
MY : FANTASY

大天刀道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY： FANTASY

【Nコード】

N3414J

【作者名】

大天刀道

【あらすじ】

いつも通りの学校からの帰り道。

主人公、兵藤双真は幼なじみである橋本綾瀬とぎこちない関係で一緒に歩いていた。

その時、突如空に黒い穴が空き、見知らぬ存在が現れ、橋本綾瀬を連れ込もうとする。

助けを求め、手を伸ばす綾瀬。

助けるため、伸ばされた手を必死に掴んだ双真だったが、その拍子に自分までもが黒い穴へと飲み込まれてしまった。

そして…双真が目を覚すと、そこはなんと化け物が住む異世界。
綾瀬ともはぐれ、途方に暮れる双真。

地球の常識が通じないその世界で双真は地球に帰る術を探すか……

…

冒険1―日常から非日常（前書き）

新連載です。

今回は異世界ファンタジーへと挑戦してみました。
良い作品に仕上がるよう、頑張りたいと思います！

是非とも誤字、脱字などがありましたらお伝え下さると幸いです。
宜しければ感想や意見なども貰えると有り難いです。

冒険1―日常から非日常

「ソウマ！一緒に帰ろ！」

いつも通りの日常…学校を終えた後の下校時間、後ろから少年…兵藤^{ウドウ ソウマ} 双真に声をかけたのは彼の幼なじみである橋本^{ハシモト} 綾瀬^{アヤセ}だ。
ソウマは振り返り、その姿を確認した後に眉間にシワを寄せた。
確か…アヤセには…

「あ？お前、彼氏いるんだろ？」

そう、アヤセには恋人がいる。
確かに幼なじみではあるが、流石に彼氏がいるのに一緒に帰るのはどうかと思う。
何しろ、一緒に帰ってその彼氏から色々と言われるのは我慢ならない。

「トモくんは生徒会だってさ〜だから、ね？」

だが当の本人は関係ないと言わんばかり。
何が「ね？」だ。

アンタは良くてもアンタの彼氏はどう思つか考えてみる。全く…

ソウマは再び前を向き、黙って歩き出す。

「ねえ、良いでしょ！」

「うるさい、一人で帰れ」

アヤセはしつこくソウマの隣に並び強請るように言う。

面倒な奴だ…アヤセは幼なじみだからと言って頻繁に接触して来る。幼なじみと聞くと、仲が良く、家が近所と言うのが相場が決まっているが…

ソウマとアヤセはそうではない。

確かに家は近所どころか隣同時ではある。

それでも仲が良い訳でもない。

「だって家は隣でしょ！なんで嫌がるの〜！」

自分の胸に聞いてみる。

うんざりとしたようにため息を吐く。

「もう良いもん！勝手についていくから！」

そう断言してアヤセは黙ってしまった。

けれどしっかり後ろをついて来ている。

名も知らぬアヤセの彼氏よ…どうかこの女に鎖でも繋いでおいてくれ…

心の中でそう呟いた時だった。

『見つけた』

……………？

聞いた事の無い声がその場に響いた。

「今の聞こえたか？」

「う、うん…女の子の声…だね」

どうやらアヤセにも聞こえたらしい。

と、言う事はこの場にいる二人以外…つまり第三者の事となる。

まさか…アヤセの彼氏か？とも思ったが、声は女のものだったため違う。

なら誰が…

そう考えていた時だった。

謎の声の第2声が聞こえた。

『強い魔力の持ち主…異世界の女神が』

「おい！誰だよ！出てこい！」

ソウマが低く、謎の言う何と何も無かった空中が割れた。

ピシッと罫が入ったような音の後、形の悪く開き丸い円を描き穴となった。

その穴の中は真っ暗で不気味さを感じる。

一体何が起こったのかと穴を見つめていると、中から人が出てきた。

「んな！？」

「うそ〜！？」

出てきたのは女性で白いフードを被っていて、手には杖を持っている。

いわゆる白魔道士のような恰好をしていた。

『やっと見つけた…救いの女神』

白魔道士はそう呟き手に持つ杖を振る。

すると、白魔道士の一番近くにいたアヤセの身体が宙に浮いた。

「な…なんだそれ…」

『用は済んだ…』

そのまま白魔道士は黒い穴に戻り、アヤセの身体も一緒に引き込まれる。

アヤセの表情は恐怖に怯え、助けを求めるようにソウマに向かって手を伸ばす。

「助けて！ソウマあ！」

「ッ…くそ！」

ソウマは舌打ちを一つして、黒い穴に向かって走りだす。
次第に穴は小さくなり、猶予が無い事を知らせていた。

「アヤセ！」

アヤセの伸ばす手に向かってソウマも手を伸ばす。

「ソウマ！」

そして………お互いの手が繋がれた瞬間、ソウマの身体は強い引力に引かれ黒い穴に向かって行ってしまう。

「……マジ？」

アヤセだけで無くソウマ自身も黒い穴に吸い込まれ、穴は完全に閉じた後、消滅した。

この瞬間、兵藤双真と橋本綾瀬は日本から…地球から姿を消してしまった。

「ここは…？」

気がつくと、そこは砂漠だった。
どうなっている？

変な女にアヤセが連れて行かれ、助けようとして巻き込まれた。

「アヤセ…は？」

周りを見渡しても砂漠だけが広がり、人影は見えない。

どこだよ…ここ…

先ほどまでは見慣れた街の中にいたはずなのに、今はこうして砂漠の真ん中に立っている。

ソウマは砂で歩きずらい砂漠をゆつくりと進む。

太陽が真上にある事から、恐らく昼間なのだろう。

最悪だ…昼間の砂漠だと？

手持ちには食料どころか水すら無い。

この砂漠のど真ん中にいたら死んでしまう。

どうにかして水だけは確保しなければならぬ。

3時間ほど歩いただろうか…

正直、容赦なく照り注ぐ太陽の熱と砂漠からの熱…意識は朦朧とし、脱水症状を起こしていた。

それでも町どころか人もいないうえに食料も水も無い。

誰が見てもソウマの身体は限界で、危険な状態だった。

既に希望など見えず、半分死を覚悟していた…

だが、そんな時、遠くに人影をソウマは見つける。

これで助かるかもしれない、そう思うと披露しきったはずの身体でも動いてくれた。

「なんだ…あれ…？」

しかし、ソウマは更に絶望を知る。
近づいて来た人影は人間ではなかった。

二本足で立って歩いてはいるが、肌は緑色に染まり鼻は潰れ、手には斧を持っている。

数は3…生命体である事に変わりはないが、果たして助けてくれるのだろうか？

次第に近づき、緑色のそれはついにソウマの目の前まで来た。

「オイ、人間ダゼ！」

「久シブリノ獲物ダナ」

「女デナイノガ残念ダガ…」

会話を聞くと明らかに助けにくれそうにはなかった。

目の前には化け物…俺の知る限り、地球にはこんな生命体は存在しない。

つまり…ここは…

地球じゃない。

最悪だ。

しかも砂漠のど真ん中で化け物に遭遇だと？

何の拷問だ、これは…

だいたい、これも全てはあの白魔道士の女が原因だ。

ましてやアヤセまで…アヤセまで…

「ハッ…アヤセは連れて帰らないと駄目だろ…こんな所で人生終わり？ふざけやがって…」

ギロリとソウマの眼光が化け物に注がれる。

先ほどまで弱っていたソウマでは有り得ないほどの眼光に殺気。既に死にかけている人間を前に化け物たちは圧倒的有利にも関わらず、退いてしまう。

「チッ！ナンカヤバイナ…サツサト殺ルゾ！」

一体のその言葉で3つの斧が振り上げられる。

その斧を避けられる体力は既にソウマには無い。

ソウマは無力な自分を悔やみながらも目を瞑った。

死にたくねえ…

………しかし、いつまで経っても痛みや衝撃はやって来なかった。

ゆっくりと目を開いて見ると、斧は振り上げられたまま…

それを握る化け物たちは何故か空を見上げて固まっている。

その表情は恐怖に染まっていた。

そこでソウマは自分の周りが暗い事に気がついた。

周りに大きな日影が出来ている…何者かが太陽の光を遮っているという事だ。

化け物たちの視線を追って自分の背後上空を見た。

「……………嘘だ…」

ソウマの目に映るのは…ドラゴン。

数十メートル級のドラゴン…銀色の肌に睨まれただけで死んでしま

うような目、触れただけで切れてしまうであろう鋭い爪と牙。頭部に生やす角は太陽と重なり黒く見えるが、長さとその尖り様は分かる。

『去れ、ゴブリン共』

ドラゴンから発せられた言葉を聞いた化け物たちは直ぐにその場から逃げてしまい、ソウマ1人が残された。

逃げなければ殺される…

ソウマはそう頭では理解していた。理解はしていたが身体が動かない。何故だろうか…恐怖を通り越し、このドラゴンになら殺されても文句は言えないと思ってしまう。

『異界の住人よ…ソナタを待っていた』

ドラゴンはゆっくり翼をたたみ、顔を下げる。ソウマの目の前で止まったその頭部は凄まじかった。近くで見ると体全体に纏っている龍鱗には艶があり、とても強靱に見えた。

この龍鱗には刀も銃弾も…ミサイルさえも効かない、そう思わざるを得ない程に…

『臆するな。ソナタに危害を加える気はない』

嘘じゃない。

本能がそう言っている。

このドラゴンの言葉は全て真実で、疑いようがない。

そんな事は有り得ないのだけど、そう思ってしまう。

「アンタは一体…」

『我は神龍。ソナタには我の協力者になってもらう』

「は？」

いきなりわけの分からない事を言い出すドラゴン。

協力者？

こんな何の力も持たない人間に？

『この世界には6人の異界の者が放たれた。ソナタはその1人…異界の者はこの世界に変革を齎す存在。ソナタには我の力を受け継ぎ、『変革者』となってもらう』

「変革者…」

言っている意味は分からなかったが、世界を変えろ、そう言われているのは分かった。

世界に6人の異界者がいる。

もしかしたら…いや、間違いなくその中にアヤセもいるはず。

『では、ソナタに力を与える』

ドラゴンがそう言った後、砂漠だったはずの地面に魔法陣が現れた。魔法陣は銀色に光り、ソウマの身体を包む。

「なんだ…？」

『ソナタには『神速』を授ける。願えばソナタはどこまでも速くなれる』

魔法陣は地面から足を伝わってソウマの背中で止まる。

『背の魔法陣が神速の証。頼んだぞ、ソウマよ』

「！、なぜ俺の名前を…？」

ソウマの問いにドラゴンは答えず、翼を広げ、羽ばたきだす。風は砂漠を抉るように舞い、次第にドラゴンの体が宙に舞う。

『さらばだ』

「おい！ちよ、待……………て」

ソウマは必死で制止を求めたが、ドラゴンは空へと姿を消してしまっ
った。

残ったのは沈黙と背中に刻まれた魔法陣…

これは何を意味するのだろうか…

「つつか…どちらにしろ砂漠を出なきゃ死ぬな」

そう呟き果てしなく続く砂漠の地平線を見つめる。

「？」

見つめていて気がついた。

町が…見える。

微かにだがアレは町だろう…恐らく、さっきまでは披露や熱中症で視力が低下していたため分からなかったのだ。

そういえば、あのドラゴン…神龍は俺に力を与えたと言っていた。神速を授けると、願えばどこまでも…と。

それは強く願えば力を使えるという意味なのだろうか。

ソウマは町の方向を向き、目を閉じる。

願う…町まで…速く…速く。

するとソウマの目の前に魔法陣が現れ、それに触れる。
瞬間、周りの景色が見えなく確認できないほどに過ぎて行く。
そして気がついた時には町の入り口に立っていた。

これが…『神速』…

今体験したスピードは飛行機でも有り得ない。

変革者…世界を変える者たちが持つ力が…俺に…

信じられなかった。

それでも信じるしかなかった。

あのドラゴンが何者かなんて分からない。

それでも、俺に生き抜くための力をくれた。

運命なんて信じないが、これも定めかもしれない。

何にせよ、アヤセを見つけて地球に帰らなければならない事にな
りはない。

そのための力だ…

「礼を言う」

聞こえてるはずはないが口に出した。

帰るためにはまず世界を知らなければならぬ。
町では情報を集めるのが妥当だろう。

そう考え、ソウマはまだ知らぬ町へと足を踏み入れた。
この一歩が…波乱を呼ぶとは知らずに…

冒険2―神速

町には驚きの光景が広がっていた。

露店ばかりが並び、そこでは見たことはないが恐らく食べ物である物や、武器または防具を扱っていた。

地球とは違い過ぎる文化にも驚いたが、それ以上に驚いたのは町の人々…いや、人ではない。

人並みのトカゲが二足歩行で普通に歩いたり、豚の化け物が立っていたり…体や顔は鳥なのに人間型になっている者。

まるで夢でも見ているようだった。

そして…もう一つ気づいた事がある。

それは人間が1人も居ない事…どこを見ても人間は見当たらない。急速に不安が胸に広がって行く。

もしかしたら人間は居ないのかもしれない…そう考えると怖かった。

露店がズラリと並ぶ道を歩きながら売られている商品を見ている。

地球にある物と似ている果物らしき物もあるが、明らかに変な物も売っていた。

その中でリンゴのような…と言うか見た目がそのままリンゴの物を発見。

ズイツと顔を近づけて見てみるが変な臭いも変な色でもない。

「買つかい？」

急に声をかけられて驚いた。

リンゴのような物から顔を離し、声をかけた張本人であろう店のトカゲ人間を見る。

「あ、いえ…」

「ん？お前さん、もしかしたら人間か？」

ソウマの顔や身体をじろじろと見るトカゲ人間。

マズい…もしかしたら人間は険悪の対象なのかもしれない。
だから人間が居ないと考えられる…

だが、そんな心配は杞憂に終わった。

「なに、客に人間も魔族も関係ねえ！見た所、砂漠を渡って来たんだろ？これ持ってけ」

そう言っただけでトカゲ人間が投げたのは先ほどまで見ていたリンゴ。咄嗟にキャッチし、礼を言ってからその場を後にした。

どうやら、緑色の化け物たちのような輩ばかりではないらしい…少しだけ安心した。

一通り歩き終わると、だいたいこの町の様子が分かって来た。

まず、この町の中心に宮殿があり、その周りを囲むように町が出来上がっている。

砂漠とは逆側の方には大きな鉄門があり、槍で武装した見張り番がいた。

この世界はそれなりに技術が発達しているみたいで、小さな町だが滞空場に飛行機のような物が止まっていた。

飛行機と言っても地球で見えるものとは全くの別で、フォルムはゴツゴツしていて武装も確認済みだ。

トカゲ人間から貰ったリンゴをかじってみると何故か洋梨の味がした。

見た目リンゴで味は洋梨…ミスマッチな気もするが、こちらではそれが当たり前なのかもしれない。

無一文なのに食べ物くれた店の店主には感謝しよう。

心の中で優しいトカゲ人間に感謝しつつもシャリシャリとリンゴ（のような物）を食べていると商店街が静かになった。

今まで常に賑やかだったからか、商店街が静かになると急に町の元気が無くなったように感じる。

立ち止まり、何かと商店街を見つめていると、商店街に溢れていた者たちが両サイドに別れ、その間を数人の人間が歩いて来た。

いや、良く見ると人間ではない。

全員身体に銀色の鎧を纏っており、数は3人。

両脇に居る者は顔に兜を被っていて顔が見えないが身長が2メートル近く、身体も大きい。

中心にいる者は兜は被っておらず、顔が見えた。

見た目は人間の女だが違いは背中にあつた…なぜなら、背中には白い羽が生えていたのだから…

羽が無ければ人間だと喜んでいた所だろうが、そうはいかない。

少し残念に思つて見ていると羽の生えた女と目が合った。

「居たぞ！捕らえろ！」

目が合った瞬間、なぜか女はそう叫び、両脇の二人がこちらに向かって迫つて来た。

意味が分からない…なぜいきなり「捕らえろ」なんて言われなけれ

ばならないんだ。

やはり人間が来てはいけない場所だったのだろうか…

様々な疑問が浮かんだが、捕まったらロクな事にならなそうなので
取り敢えず逃げる事にする。

迫って来る二人に背を向けると全力で走り出す。

体格から考えるに戦っても勝てない…なら逃げるしかない。

広い所に逃げても囲まれたら終わりだ。

そう思ったソウマは横道を多く使って逃げて行く。

後ろを確認してみると先ほどより差が開いていた。

やはりプロレスラー並みの体格に鎧を纏っているだけあって足は遅
いようだ。

これなら逃げられる。

腹は減っているがトカゲ人間のくれたリングゴにより多少は大丈夫だ。

そう思い少し安心したが、ソウマは前を見た瞬間に足を止めた。

「門…だと？」

目の前には大きな鉄門…そこで気がついた。

自分は誘導されていたのだと…

やられた。

まさか上手く鉄門に追い詰めていたなんて、考えもしなかった。

後ろを振り向くと追っ手の二人が既に追いつき、手に西洋剣を持っ
て立っていた。

「追い詰められたな、人間」

空から女の声が降って来た。

二人を注意しながらも、チラリと目線を上に動かすと空から先ほどの女が降りて来た。

背中の羽を動かし、ゆっくりと地に降り立つ。

3対1…後ろには鉄門に番人…絶望的だ、こちらには武器すら無い。

ソウマの頬を冷や汗が伝う。

どう知能を巡らせても良い案は浮かばない…ましてや手札にカードが無さ過ぎる。

どんなに使えない物でも有れば使えるが…手札0はキツイ。

「なぜ俺を狙う！悪事は働いていないはずだ！」

時間稼ぎとばかりにソウマが叫ぶ。

無駄かもしれないが、説得をすれば状況が変わるかもしれない。

それに自身は本当に悪事は行っていないのだ。

しかし、ソウマの言葉を聞いた女は変な者を見るかのような目でソウマを見た後、鋭く睨んだ。

「なぜだと！？貴様…人間が勝手にこちら側に入って来て何を抜かす！」

「……こちら側だと？」

ソウマには言っている意味が分からなかった。

当たり前だ、ソウマにとっては世界について何も知らない。

食べ物も歴史も生態系も法律も知らないのだ。

「知らぬフリなどして…貴様！不法入国しただろ！」

……不法入国。

その言葉を聞いて、少し前を振り返ってみる。

入国…町に入る時、確かに普通に入った。

だが誰も管理をしていないし、ましてや背後にある門でも有れば分かるが、柵の一つも無かったのだ。
分かるわけがない。

「不法入国…」

「そうだ！…もう良い！捕まえる！」

また両脇の二人が迫って来た。

だが、だいたい分かった…恐らく、この世界で国に入るのには入国証が必要…つまり地球と同じような手続きが必要なのだろう。
それを知らないソウマは勝手に入り…晴れて不法入国者となった。

理解した後、ハツとなり顔を上げる。

すると目の前では全身鎧の二人が西洋剣をソウマに向かって振り下ろしていた。

一気に寒気が襲い、死を予感したが…異変に気づく。

二人の振り下ろす剣の速度が遅い。

スローモーションカメラで見ているかと思う程に遅く、それを見てソウマは一つの可能性に行き着く。

神龍から与えられた『神速』が発動しているのかもしれない。

だから周りが遅く見える…

実際、ソウマの考えは正しかった。

ピンチに陥ったソウマは無意識に背に刻まれた魔法陣の力、神速を発動させていたのだ。

服越しに背の魔法陣は銀色に光り、ソウマに力を宿す。

いける！

そう判断したソウマは二人の間を走り抜け、女の背後に移動し、後ろから首を掴んだ。

「えっ？」

女には…いや、その場にいた全ての者たちは何が起こったか分からなかった。

だが、神速で動いたソウマの通ったその場には、有り得ない風圧が押し寄せる。

それはソウマの動きの数秒後、動きを追うように風圧が押し寄せ、切りかかった二人は風に吹き飛ばされた。

それを見てソウマはポツリと言葉を零す。

「これが神速…」

改めて自身に宿った力の凄さを知った。

首を掴まれた女は恐怖に染まった表情でゴクリと生唾を呑んだ。

冒険3―ラウナ・ソン・ソーマルイ

女は心底驚いていた。

なぜなら、ただの人間だと思っていた男がまばたきの間に視界から消え、自分の背後に移動していたのだから…

加えて強烈な風が巻き起こった後、その風圧に屈強な護衛が吹き飛ばされた。

これは有り得ない事だ。

この世界に存在する『魔法』を使ったとしたなら不可能ではないかもしれない。

だが、魔法には5属性しか存在しない…その中に高速で移動の出来る魔法は無い。

身体能力でのスピードでは到底有り得ない速さだった。

つまり……この人間は異例な存在。

女はそう考えつくくと震える言葉を抑えて言った。

「貴様…何者だ…？」

女の問いにソウマはニヤリと笑う。

取り敢えず絶体絶命の危機は逃れられた…このまま何とか世界観について教えてもらえたら一番だろう。

「人間だよ。だが少し訳ありで……」

それが襲って来たのは言葉を発している途中だった。
身体 of 全身の筋肉が軋み、悲鳴をあげる。

痛みが全身に広がり、脳はそれを痛覚として認識する。
身体中を巡る血液を喉からゴフツと音を出しながら吐き出してしま
う。

「ゴホツゴホツ！」

ソウマは激しく咳き込み、立っていられずに崩れるように地面に膝
をつける。

なんでだ…？

さっきまで平気だったのに急に…

「おい！人間！大丈夫か！？」

耳元で女が叫んでいるのが分かる。

けれどその声は小さく、遠くから聞こえているように感じた。

次第に意識すらまともに保てずに、身体は横に倒れ地面と平行にな
る。

訳も分からないまま意識は闇へと落ちて行き……

そこでソウマの意識は途切れた。

目が覚めると、そこには見知らぬ天井が視界に入ってきた。
頭がボーっとして現状について良く分からない。

「気がついたか？」

「!？」

不意に女の声が鼓膜を揺らした。

その声で意識は覚醒し、バツと勢い良く身体を起こす。

ソウマは白いベッドの上に乗せられ、身体には布がかけてあった。
周りを見渡すと、西洋風に作られた部屋に机と椅子が置いてあるだけだった。

女は腕を組み、椅子に座って足も組んでいる。

服装は鎧ではなく、白いワンピースのようなものを着ていた。

「ここは…？」

「ソーマルイ宮殿だ。貴様が血を吐いた後、気絶をしたから助けてやったのだ。有り難く思え」

お前たちが追いついたからだろう…そう思いながらも、助けてくれ

た事には変わりはない。

しかも、そのおかげで今は落ち着いて話が出来るような状況にある。
全て結果オーライだろう。

「…ありがとう…助かったよ」

「ふん…それで？なぜ貴様は不法入国などした？」

ソウマの素直な気持ちも女に対してはどうでも良かったみたいだ。
有り難く思えと言ったから礼を言ったのに、理不尽だな。
多少シヨックを受けながらもソウマは女の問いに答える。

「ここが国なんて知らなかったんだ…と言うか何で人間がいないんだ？」

「ここが魔族の国、ソーマルイだからだ。人間が入国するには特別な許可証が必要なんだ」

特別な許可証…だから追われたのか。

それに女は魔族の国と言った…魔族とは何だろうか？
分からない事が多過ぎる。

「それで、もう一つ質問だ。貴様は何者だ？あの力は何だ？」

女の質問がやけにハッキリと聞こえた。

何者…そう聞かれたら「異界者」としか答えられない。

力だって神龍とやらに与えられただけだ。

未だに自分の身に何が起こったかなんて理解はしていないが、割り切って行かなければ生きていけない。

ソウマは女を見つめる。

そこで、女は良く見ると相当な美人である事に気がついた。

薄いピンク色の髪をサイドポニーで纏め、長い睫毛に強気を印象付ける切れ長の目。
赤い唇は潤いがあり、綺麗な小顔のライン…誰が見ても美人だと応えるだろう。

ジツと見つめるだけで一向に口を開かないソウマに痺れを切らしたのか、女はズンズンと近づいてソウマの胸ぐらを掴んだ。

「質問に答える！」

「……………先に言って置くが…嘘じゃないからな？」

異世界から来た、なんて本当なら黙っている方が…隠して置いた方が良いのかもしれない。

けれど、これからの事を考えると協力者はどうしても必要だ。

目の前の女が100パーセント信じられるかと聞かれたら、それは出来ない…

だが、自分を助けてくれたのと、こうして話し合いの場を儲けていえると言う事はそれなりに信用性がある。

そう考えた結果、身元を明かしても大丈夫だろうと思ったのだ。

ソウマは少しの間を空けた後、ゆっくりと告げた。

「俺は異世界から来たんだ」

「……………は？」

女の表情が固まる。

「理由は俺にも分からない。だが、白い魔道士に連れて来られたんだ…友人も一緒だったが、途中ではぐれてしまっ——」

「ちよつと待て…貴様、ふざけているのか？」

女は眼光だけで人を殺してしまいそうな程鋭く睨む。

これは普通の反応かもしれない。

誰だって「異世界から来た」なんて言われたって信じられる訳がない
うえに頭がおかしいと思われるだろう。

それが冗談のどちらかしか無い。

だがこれは真実…紛れもない真実であり事実だ。

「ふざけてはいない。この状況で冗談を言えるほど馬鹿でもないかな…」

「だからって異世界だと？ふん！信じられる訳がないだろう！」

「じゃあこのまま捕らえるか？どんな尋問や拷問をしようと答えは変わらない…紛れもない事実だからな」

ソウマは一步も退かずに女を見つめる。

ここで退いたら信用などしてもらえない…何とか話を聞いて貰えるようにしなければ何も始まらないのだ。

「……ッ！……分かった…話を聞こう」

「本当か！？」

「信じるかどうかは…その後に決める。話せ」

女は胸ぐらを話し、ドカツと椅子に座る。

どうやら、取り敢えずは分かって貰えたようだ。

だがここからが問題…それでも出来事をそのまま話すしかない。
変に脚色すれば逆に信憑性が無くなってしまう。

嘘偽り無く…これが大前提の事柄だ。

「あれは友人と帰り道を歩いていた時だった…——」

そしてソウマは、女に出会うまでの経緯を包み隠さずに話し始めた。

「なるほどな…信用し難い話だ」

全て話終えた後の女の感想がこれだった。
まあ、しょうがないだろう…信用して貰える方が有り得ないのだから。

「だが、神龍の話は聞いた事がある」

「へ？」

「神龍は言わば『神話』のような存在だ…見た者はいないが、昔から語り継がれている」

あのドラゴンはそのような素晴らしい龍だったのか…と思い出しながら背中の魔法陣を触る。

いや…砂漠で会った時は確かにただ者ならぬ存在だとは感じた。
異界者の事も知っていたうえにソウマの名前も知っていた…力を与えた事も見てみれば相当に凄いのは容易に分かる。

「あの力…まさか神龍に与えられたとは…信じ難いがそれなら納得

「がいく」

「出来れば世界について教えて欲しい…この力についても分からないんだ」

「……………」

女は顎に手をつけて考え込み始めた。

地球に帰るためにも世界についての知識が必要だし、自分の力についても知らなければならぬ。

なぜ自分が血を吐いて倒れたのかだって分からないのだ。そんな事では力も使えない。

期待を抱きながら返事を待っていると、女は顔を上げた。

「良いだろう。ある程度は信じてやる…世界についても教えてやる…が、条件がある」

条件…聞いてみないと何とも言えないが、こちらに選択肢は無い。受けるしかないだろう。

「私の側近を頼みたい」

「…側近？」

意外な条件だった。

側近…つまり、彼女の側について護衛をしろと言う事だろう。

だが、それで良いのだろうか？

確かに神速の力は凄まじいのもかもしれない…だが使いこなせていないのも事実。

これほど未熟で、危険因子な存在を側近に置いて何の得が有るのだろうか…

疑問を露わにするソウマに女は後づけるように説明を加える。

「不安要素は有るが…貴様の力はそれを有り余るほどに大きい。それに神龍と接触した唯一の存在だ。価値はある」

「…なるほど」

言い方は多少気に食わないが、ある程度は買ってくれているようだ。それなら問題ない…むしろ、こちらからお願いしたいくらいだ。

「そう言う事なら…何てことない」

「よし、なら決まりだ！私はラウナ・ソン・ソーマルイだ、ラウナと呼んでくれ…よろしく頼む」

そう言つてラウナを手を差し出し、握手を求める。

こちらの世界でも握手は共通らしい。

「俺は兵藤…いや、ソウマ・ヒョウドウだ。ソウマで良い。こちらこそ、よろしく頼む」

ソウマも手を差し出し、ラウナの白くて細い綺麗な手を握る。

「まずは世界について教えよう…と思ったが、今日は疲れているだろう？この部屋を使って良いから休め。また明日…私が呼びに来る」

ラウナはそう言つと部屋から出て行ってしまう。

だが、この提案は嬉しいものだった。

確かに身体には披露が蓄積されているし、何より精神的な疲れが酷かった。

ベッドに身体を寝かすと睡魔が待っていましたとばかりに押し寄せて

来る。

「疲れたな……」

ゆっくりと目を閉じると、意識は直ぐに遠退きソウマは眠りについた。

「ラウナ隊長：何をお考えですか？あのような得体のしれない人間を側近にあてがうなど……」

ラウナが部屋の扉を閉めると、扉横に立っていた見張り役のザッシユが咎めるように言った。

ザッシユは町でソウマを追っていた全身鎧の一人だった者：だが、現在は兜を取り顔が伺える。

その顔は狼のようで額には角が生えている。

「ザッシユ：あの人間は不可解な点が多いが真つ直ぐな目をしている。加えてあの神速とやら：我々で面倒を見る方が良い。野放しにして何者かが悪事に利用されても困る」

「……………ですが……」

「怪しい行動を起こした時は始末して構わない。それで良いか？」
「…了解しました」

ザツシュは一礼した後、廊下を歩いてラウナから離れて行った。
ラウナは眉を「ハ」の字にしながら溜め息を吐く。

「急に問題が山積みになったな」

そう呟きながらザツシュとは逆の方向に歩き出す。

この時、ソウマとの出逢いが彼女にとって大きな出来事となる事を
…彼女はまだ知らない。

冒険3―ラウナ・ソン・ソーマルイ（後書き）

異世界にやって来て、やっと1日が終わりました…

誤字・脱字などが有りましたら教えてくだされば幸いです。

良ければ感想や意見などを頂けたら嬉しいです！

冒険4―知った世界

ソウマは扉を叩くノックの音で目を覚ました。

まだ重たい身体をゆつくりと起こし、扉までふらふらと危なげに歩き、開く。

そこには昨日、協力を交わし合った相手のラウナが立っていた。

「気分はどうだ？」

「まだ眠いが…それ以外は大丈夫だ」

「そうか、何よりだ。まずは身体を綺麗にしよう…大浴場に案内するから湯に浸かれ」

そう言うラウナは廊下を歩き出し、ソウマはその後ろをついて行く。

こちらの世界にも風呂に入る習慣があるようだ。

目の前を歩くラウナの髪はしつとりと濡れている。

恐らく、既に彼女は入った後なのだろう。

廊下の所々には警備の者が立っていた。

ほとんどの者が兜を取っていて顔が見えたが、人間は誰1人としていなかった。

ラウナだって顔や身体は人間だが背中には白い羽がしっかり生えている。

天使と形容した方が良くかもしれない。

「着いたぞ」

ラウナがいきなり止まり振り返る。

横には青色の通路が続いていて、奥には扉がある。

逆側には同じ作りだが赤色の通路が続いて奥に扉があった。

「赤い方は女だからな…気をつける」

「……わかった」

「着替えは中に用意されているからそれを着ろ。使用人を待たせて置くから、湯からあがったら案内して貰え、いいな？」

「ああ」

返事をしてソウマは青色に染まった廊下を歩く。

青色と言っても白なども混じっているうえに高級そうな装飾品も施してある。

壁に埋まっている宝石や飾られている品を見ながら歩き、奥の扉に着くとそれを開いた。

「……………凄いな」

思わずそんな言葉が零れた。

扉を開いた先には100人近くは入れそうなほどの大浴場…

間違いなく日本にこれほど広く、高級感溢れる風呂は無いだろう。

取り敢えず端にある龍の頭型シャワーを取り、適当に色々と動かすとお湯が出て来た。

普通にお湯が出た事に感動しながらも身体を洗い流し、湯に浸かってみる。

湯加減も心地良く、疲れが抜けるようだ。

そのまま30分ほど浸かった後、用意されてある服を着て外に出る

とメイドさんが待っていた。
そのメイドさんに案内され、ラウナのもとへと向かった。

「座ってくれ」

メイドさんに通された部屋には長く広い机と椅子が幾つものあり、机の上には豪華な料理が並んでいた。

ラウナに促されるがままに正面に座り、目の前に並ぶ料理を見る。どれも見た事のない料理ばかりだが、自然と美味しそうに見えるのはシェフの腕だろうか。

それとも、ただ単に空腹だからだろうか。

生まれて初めてこんな豪華な料理を見だし、宮殿に入ったのも初めてだ。

そんな庶民のソウマからすれば、あまり落ち着ける雰囲気ではなかった。

「好きなだけ食べてくれ。話は食べながらも出来るだろう?」

「……じゃあ遠慮なく」

考えて見ると、こちらの世界に来てから食べた物はトカゲの店主か

ら貰ったリンゴ（のような物）だけだ。

非常識な事ばかりが続いていたためか、空腹があまり気にならなかったが、いざ目の前に食料があると空腹に耐えられなくなる。

この世界では通じるか分からないが一応「いただきます」と言ってから、置いてあるフォークを手に取り…一番近くにある料理を食べてみた。

「これ旨っ！」

「当たり前だ。一流の料理人が作っているのだからな！」

なぜかラウナが誇らし気に自慢した。

別に料理を作っているのは料理人たちであってラウナではないだろう。そう思ったものの、口には出さずにゆっくりと料理を口に運ぶ。

空腹ではあってもマナーは大切にされた方が良い。

ましてや今いる場所は宮殿…それなりの態度が必要である。

最初は黙々と食べたが、ある程度まで食べた所でソウマは手を止めて食器を置いた。

「ラウナ…そろそろ話を聞きたい」

「…そうだな」

ラウナはゆっくりとソウマを見た後、語りだした。

「まず…この世界についてを話そう」

この世界には人間・魔族・魔物の3種が存在している。知能が高く、文明を築いているのが魔族で…魔物は魔族に成り上が

れない者を指す。

人間と魔族はお互いにある程度の交流を持ち、協力し合って生きているが…中には受け入れられない地も少なからずある。

王国ソーマルイは受け入れられない訳ではないが、規制として人間には許可証が必至となっている。

技術面では、現在の最新技術は空を移動出来る『飛空艇』と呼ばれる飛行型要塞だ。

だが、それもほんの一部の国でしか見られない。

魔法が存在し世界の基本となっている。

火・水・雷・地・闇の5つの属性があり、その5属性にはそれぞれ司どる龍が存在すると言われている。

炎龍・水龍・雷龍・緑龍・黒龍がそれぞれの5属性魔法の原点と言われているが、それを見た者はいない。

そして『神龍』と呼ばれ、未知の力を持ち世界の流れを作っている神に近い存在が神話として信じられている。

龍は全てを合わせてこれらの6匹しか存在しない。

「これが世界観だ」

「…じゃあ、俺が神龍と出会ったのは相当稀な事だな」

「稀所か…世界的な地位に立つてもおかしくはない。それだけ6匹の龍は素晴らしい存在なんだぞ」

この話を踏まえて考えると、変革者は恐らくそれぞれの龍に出会い、力を受け継いでいる。

それなら数も揃うし、変革者と呼べるほどの力を宿しているはずだ。

「お前が神龍と出会い、変革者の予言と背の魔法陣を受け継いだ…
…これは偶然ではないだろう」

異界の者が変革者として龍の力を受け継いだのなら、近いうちに世界は混沌の渦に巻き込まれる。

ラウナはそう続けた。

どうやら自分が思っていた以上に自分は特別なようだ…ソウマはそう思い知らされた瞬間だった。

「そして…お前の力、神速についてだ」

そう言うときラウナは椅子から立ち上がり、「上着を脱げ」とソウマに命令した。

いきなり何を言うんだ！…と思ったが、直ぐに背の魔法陣を見たいのだろうと理解し、上着を脱いだ。

ラウナは魔法陣をマジマジと至近距離で観察した後、優しく背に触れ、魔法陣を撫でるように指を移動させる。

「どうだ？」

「この魔法陣には有り得ないほどの魔力が宿っているな。道理であればどの力が使える訳だ」

ラウナ曰わく、魔法陣には人間や魔族とは違う異質な魔力が膨大に宿っているらしい。

質については不明だが、魔力の量については生命体として有り得ないとの事。

ソウマは手が背中から離れたのを確認して、服に袖を通して聞いた。

「じゃあ、昨日はなぜ俺は血を吐いて気絶したんだ？」

「推測だが…不慣れな事に加えて強大過ぎる力を使った反動だろう。あれほどの力を使って身体に負担がかかるのは当たり前だ」

つまり神速は身体への負担が大き過ぎる…ラウナの言葉はそう言う意味だった。

だが、ソウマには神速しか持っている力は無い。

これからの事を考えると、負担が少なく済む使い方か速度を落とすかのどちらか…

そのためには力のコントロールが出来るのが絶対条件のようだ。

「それで、これからお前は私の側近として側に居てもらう事になるのだが…」

考えているとラウナがそう持ちかけて来た。

協力者となってもらう変わりに側近となる…これが交わした条件だ。

「なんだ？」

「私とお前で旅に出ようと思う」

「……………は？」

ソウマはこの時、ラウナの考えている事が全く分からなくなっていた。

冒険5―旅の理由

「旅だと？」

ソウマはラウナの言った言葉を理解出来なかった。
なぜなら、ラウナはこの国の国王の娘辺りだと考えていたからだ。
宮殿を我が物のように言っていたし、他の者とは完全に扱いが違っていた。

まず間違いなく位の高い地位のはず…そんな者が旅など簡単に出て
良いのだろうか。

国の仕事があるはず。

訝し気に視線を送るソウマに、ラウナは補足のようになんて答えた。

「お前…私を国の姫君と思っているな？だが、私は軍人だ。ソーマ
ルイ第7軍隊長の位置にいる」

「ぐ…軍人！？」

軍人…つまりラウナは姫でも何でもなく、部隊の隊長と言う事。
期待感と言うか…予想と言うか…それらの気持ちたちが全て裏切られた
気分だ。

「隊長は他にもいる。私が抜けても問題はない」

ラウナは側近になってほしいと言ったが…側近と言うより部下の方

が正しい。

別に言い方にこだわる訳ではない…問題はなぜ旅に出ようなど提案したか、だ。

別に嫌ではないが隊長ともあろう者が「旅に出たい」と我が儘を言っても国がそれを許さないはず。

「……………なぜ旅なんだ？」

「…理由は私の妹だ」

ラウナの妹であるレイナ・ソン・ソーマルイはソーマルイ国の姫君であるが、母親が違う…つまり腹違いの子らしい。

妹のレイナが正妻との間に生まれた子供で、ラウナは国王の愛人との子供…

本来なら姉であるラウナが姫君の座に座っているはずだが、正妻との子供が優先されたのだ。

ラウナは「それなら軍人に」と軍隊に入隊した。

そのレイナは姫君として知能も美貌も人間性も持ち合わせ、国王も安心していた矢先…

数日前にレイナは原因不明の病に倒れた。

国中に治せる者がいないか探したが見つからず、レイナの容態は見るみる内に悪化。

今では起き上がるのも辛いと言う…

「世界を旅すれば何か見つかるかもしれない…出来れば早い方が良い」

確かに世界は広い…旅と言う形で廻れば何かしらの方法は見つかるかもしれない。

だが、それにはあらゆるものから身を守る力が必要だ。

恐らく、そのために「側近になれ」と言ったのだろつ。
どちらかと言うと部下の方が言い方的には正しい。

「旅に出る理由は分かった。そういう理由なら協力しよう」

ソウマがそう言うとなラウナは安心したように息を吐いた。

どちらにせよ、行く宛は無かったし旅に出て世界を廻ればアヤセと
出会えるかもしれない。

それに当たっては準備が必要だ。

出来る事なら魔法やら武器を使えるようにしておきたい。

だが、その前に…

「そのアンタの妹…レイナ・ソン・ソーマルイ姫を一目見たい」

「レイナに？」

「原因不明なんだろ？探すに当たって俺も症状くらいは確認してお
きたい」

「…そうだな。それなら着いて来てくれ」

ソウマの提案に少し疑問を抱いたラウナだったが、説明すると納得
たようで案内してくれるようだ。

ラウナは椅子から立ち上がり「着いて来い」と言い、その場を後に
した。

ソウマは啞然としていた。

目の前には豪華に飾られたベッド…だがそこに眠っている魔族の女は一目で分かるほどに衰弱していた。

目の下には濃いクマが現れ、額には汗で濡れた髪が貼りついていて、辛そうに歪むその表情は見ているこちらの方も辛くしてしまうほどだ。

「レイナ…具合はどうだ？」

ラウナはなるべく音を発てないように近づき、心配そうに聞く。先ほどまで見ていたラウナの表情とは違い、すっかり「姉」の顔になっていた。

やはり、どこの世界も大切な家族にはこういった優しい表情になるのだろうか。

妹の手を握りしめるラウナを見ながら、ソウマはそう思った。

「…お姉ちゃん…」

妹のレイナが呟いた。

細々と、か弱い声は消えてしまいそうなほどに小さい。

レイナは姉の面影はあるが、全体的に優しい印象を与える。

美人で肌も綺麗だが、現在は血行が良くないのか少し顔が青い。一体…なぜこんな状態になってしまったのだろうか。

レイナの話によれば体調を崩したのが数日前、たった数日で起き上がれないほど衰弱する病なのか…

どちらにせよ、世界について知らない事の多いソウマには分からない話だった。

レイナの視線はラウナから、その後ろに立っていたソウマへと移る。

「……誰…？」

「…初めまして。ラウナの側近を務める事になったソウマだ」

「レイナの病の原因を調べる旅で、私のお供をしてくれる奴だ」

ラウナがそう付け足すと、レイナは少し安心したように目を細めた。

「…ありがとうございます…お姉ちゃん…ただだと心配で……」

この姉妹は本当に仲が良い。

お互いをこうやって大切にし合える身内は家族の理想とも言える。

もしかしたら…レイナは姉に旅なんて出て欲しくないのかもしれない。

自分の病のせいで姉が傷つくのが怖いから。

止めたところでラウナは頑として譲らないだろうが…

「大丈夫だ。アンタのお姉さんは必ず無事に帰って来る…だから病に負けないでくれよ？」

安心させるようにソウマが言うと、レイナは精一杯の笑顔で「はい」と応えた。

だが、その笑顔もどこかぎこちない。

病の辛さと姉に危険が及ぶ辛さ…両方を考えると素直に笑えないのかもしれない。
妹は傷つく姉を見たくない、姉は病で苦しむ妹を見たくない…複雑な話だった。

レイナの寝室を出た後、ラウナに連れられて武器庫に来ていた。
旅に出るに当たって神速ばかり使う訳にはいかない。

身体の負担が大き過ぎる…少しでも使わないようにしたいからだ。
様々な武器が並ぶ光景に驚いているとラウナが我が物のように言う。

「好きに選んでくれ。武道の経験は…——」

「剣術を少し。うちの家系が道場だな」

そう応えて多種多様な剣を手にとって軽く振ってみる。

家系が道場と言ってもいつもは剣道の道場だ。

だが、実際は古流剣術の家系でその一人息子である俺は後継者として、小さい頃から教え込まれていた。

と言っても、喧嘩で負けないくらいの強さでしかない。

命の奪い合いなんて怖くて足が震えるだろう。

「それは期待出来そうだな」

けれど、そんなソウマの気持ちも知らずにラウナは期待を込めた眼差しを送る。

出来れば戦いが少なければ助かる…いや、もしかしたら治安が良いかもしれない。

それなら危険も少ない…

そう考えて、その考えは有り得ないと自分で考えを消し去る。治安が良くて安全なら、ラウナ達が鎧なんて纏う必要がない。アレは危険な事が頻繁に起こり得るからの装備だろう。

「これにする」

ソウマはそう言って西洋風の少しゴツいフォルムの双剣を、腰の後ろに付けた。

習っていた剣術は二刀流なので都合が良い。

ソウマが選り終わると二人は武器庫を出て、ラウナは鍵を閉める。

「これでお前の準備はいい。食料やその他は私が用意するからな」

「分かった」

「じゃあ、部屋で休め…出発は明日だからな」

ソウマは片手を軽く上げて了解したと合図してから、歩き出す。

「ソウマ！…礼を言う」

「……ああ」

嬉しかった。

少し厳格で男口調…常に上から目線で話していたラウナから礼を言われた。

それだけで今まで悪い事続きで暗かった心は少しだけ晴れた。

この時はまだ知らなかった。

ラウナが自分にとって大切に、特別な人間になって行く事を…

冒険6―出発（前書き）

ついに冒険へ出発です。

やっこの思いでここまで来ました、ありがとうございます！

感想など貰えると幸いです。

冒険6―出発

『―やっとスタート地点に立ったようだな―』

それは、きつと夢の中だろう。

聞き覚えのある声が聞こえ、気がつくとも目の前に神龍が聳え立っていた。

「…何でも有りだな…」

『―背の魔法陣の力だ。夢の中でのみ…コンタクトがとれる―』

どうやら魔法陣のおかげで夢の中でのみ神龍と話せるらしい。

だが、これは良い機会だ…力や魔法について聞けるチャンスでもある。

「2つ、聞きたい事がある」

『―言うが良い―』

「力…神速は身体に負担がかかるのか？」

『―察しの通り―』

神速はあまりにも強大な力であるからか、長時間使えない。

今はコントロールも出来ておらず、身体が魔法に慣れていないから負担がかかる。

この先、使って行けば次第に上手く使えるようになる…そう神龍は

言った。

それを聞いてソウマは安心した。

最悪の場合は剣技のみで戦うのも…と考えてはいたが、力を使って
も大丈夫のようだ。

「じゃあ次だ。俺に魔法は使えるのか？ いや…使えるようになる可
能性は？」

『…………ソナタの背の魔法陣…それは力の源—』

神龍は威厳のある声で静かに語り出した。

背の魔法陣は、神龍の力そのもの…その魔力を一気に全て使えば、
いくら異界の者でも死に堪える。

普通の魔法は知識と魔力、イメージが必要。

だが六龍の力を使うにはそれぞれの条件があり、それぞれ違う。

その中で神龍は『願い』を司っている。

術者の願いが強ければ強いほどに、魔力は引き出される。

魔法も同じで、術者が願えば魔力は引き出され、発動する事が可能。

『—魔法が5属と言うのは知っているな？—』

「ああ」

ラウナからバツチリ説明された事だ。

それぞれ自分に合った属性しか扱えないと言うのも、レイナに会っ
た後に聞いた。

『—だがソナタには無属性のみだ—』

「……………は？」

ソウマは耳を疑った。

無属性…？そんなものラウナの説明には無かった。

だいたい、魔法には全て属性が有るものだと思うっていたのだから。

意味が分からないと言ったように表情を曇らせるソウマに、神龍は
応える。

『―無属性とは極めて異例…ソナタのみの力だ―』

「俺…だけの…」

異例な力…無属性の魔法に神速。

確かに説明されたものとは異なるものばかりだ。

だが…そうなると思界の者はみんなそうなのだろうか…
疑問を神龍にぶつけると少しの間を置いた後に応えた。

『―他の者については不明だ…我が分かるのはソナタのみだ―』

どうやら分からないみたいだ。

どちらにせよ旅をしているうちに会おう事もあるだろう。

『―そろそろ時間のようだ―』

唐突に神龍がそう言った。

時間…それは、つまり夢が終わると言う意味だろう。

『―我が名はラグナロク…変革者としての使命を果たせ―』

神龍、ラグナロクの言葉が終わると次第に目の前が白くなり……
夢はそこで途切れてしまった。

「荷物はそれだけ？」

朝、部屋に呼びに来たラウナを見て思わず聞いてしまった。

ラウナは最初に出会った時と同じ鎧を纏い、リュックサック程度のバックを腰に付けた程度だった。

「食料は現地で調達する。金銭面についてはソーマルイ国から支給されるから安心しろ」
「なるほどね」

この世界の通貨は『シル』と呼ばれる物らしく…

金貨―約10万シル

銀貨―約1万シル

札―約1000シル

銅貨―100シル

となっている。

地球のように細かく区切られている訳ではなく、小難しくなくて助かる。

ラウナの後ろにつき、宮殿の正門から出ると多くの者たちが見送りのために集まっていた。

やはり、自国の姫を救う旅に出るラウナは宮殿でも有数の存在のようだ。

頑張つて、気をつけて、姫様のために…など様々な声がラウナに向けられる。

それにラウナも胸を張り、任せろと言わんばかりに頷いた。

こうして見ると、ラウナは信頼の厚い人間だと分かる。

それに比べ、ソウマを見る周りの目は冷たい…それもそうだろう。どこから来たかも分からない怪しい者、加えて人間の若者だ。

「こんな奴が何の役に立つ？」そう言いたいのだろう。

だが、そんな事を気にする必要はない。

元の世界に戻る術を探さなければならぬのだ。

レイナの病の原因も探すが、自分の目的も忘れてはいけない。

激励を受けるラウナを横目にスタスタと先に進んで行く。

「ソウマ！」

「鉄門で待つてるから…ゆっくり話とけよ」

焦って名前を呼ぶラウナにそう言い残し、一人で鉄門に向かう。

のどかな街並みを見ると、ここが魔族の街とは思えない…やはり、ここは異世界。

地球と似ている所が無い訳ではないが、常識が通じない。

魔法なんてものがある時点で理解し難いだろう。

こんな不思議な世界から早く帰りたくはあるが…そうもいかない。
レイナの件にラグナロクの言葉、アヤセの事もある。

全部放つてしまえば楽なのだろうが、それでは自分が自分を許せない。
い。

出来る限りの事はしたい。

正面に鉄門が見えて来た頃、後ろからラウナが小走りで追いついて
来た。

「ゆっくり」とは言って置いたが…急いで来たらしい、律儀な性格
だ。

「早かったな」

「待たせるのは性に合わないからな」

本当に男前だ。

ラウナとソウマは並んで歩いて行くと、鉄門の両脇にいる警備の者
が門を開いた。

礼を言ってから通ると、ゆっくりと門が閉まる。

やっと目的のために行動が起こせるな…そんな事を思いながら鉄門
を見つめていると、ラウナが催促するように言う。

「ほら行くぞ！」

「…ああ」

前を向くと、長い道のりを既にラウナが歩いていた。

時間がない…レイナの病状は明らかだ。

あの衰弱の仕方は異常と言える…そう長くは持たないだろう。
きっと、ラウナもそれを理解している。

ソウマはラウナの背中を追うように歩きだす。

この時から始まる…ソウマの物語りが。

冒険7―初陣（前書き）

初バトルです。

感想や意見など貰えると幸いです！

冒険7―初陣

二人は馬車に揺られて隣国への道のりを移動していた。

「こっちは馬車なんだな…痛っ！」

時々道にある石により、ガタンと揺れる馬車に尻やら腰が痛いのを我慢しながら呟く。

「当たり前だ、お前の世界はどうなんだ？」

「車とか飛行機とか…鉄の機械がたくさん入り組んで移動してるな」
「飛空艇のようなものか…」

日本ではコンクリートで作られた道を車がたくさん走っているし、空には飛行機が海を渡っている。

この世界では基本的に移動は徒歩か馬車の二つ。

飛空艇も存在する（ソーマルイ国にも一つだけあった）が、発展した都市にしか無いとのこと。

道も道路なんてものは無く、土が整えられてあるだけだ。

「話を聞くだけだと…その日本とやらは技術が発展した都市のようだな」

「まあね」

出発して馬車に乗った後、ラウナが地球の事を聞いて来た。
だから日本での学校生活や街の事などを話していたのだ。

「私も行ってみたいな…」

ラウナが不意にそんな事を呟いた。

最初に出会った頃は異世界の存在なんて信じていなかったようだが、話を続けて行くに連れて嘘では無い事を悟ったらしい。
結構細かく話をしたからかもしれない。

「……目的地はどこだっけ？」

ソウマはラウナの呟きを聞かなかった事にして話を変える。

世界を渡るなんて簡単に出来るはずがない。

自分だってどうやって帰るかなんて分からないのだ。

もし、ラウナが心から日本に来たいと言ったとしても…それに応える事は出来ないだろう。

ラウナは横目でソウマを一度だけ見て、腰に付いているバッグから地図を出す。

「私たちが向かっているのは…この『ストラト都市』だ」

ラウナは地図にある一つの国を指差す。

現在、二人がいるのはソーマルイ国から南に向かって少し進んだ所だ。

ストラト都市とは食材関係に置いては右に出る国は無いと言われるほど豊かな国らしい。

馬車と徒歩を合わせて三日ほどでたどり着くが、道中には魔物も出るとのこと…

「食料はストラト都市までは保つだけは有る。ただ、夜は野宿だぞ」
「分かった」

今乗っている馬車はストラト都市までは行かず、その途中で他の街に向かうため、その後は徒歩だ。
何事も無くストラト都市まで辿り着けば良いが…世の中はそう上手くは出来ていないだろう。

しばらく馬車の揺れを我慢しながら座っていると、不意に馬車が止まった。

「降りるぞ。馬車はここまでだ」

ラウナはそう言って馬車を降りた。
どうやら、馬車の揺れとは別れでここからは徒歩で歩く事になる。
ソウマも後に続いて馬車を降りると、馬車はゆっくりと動き出した。
自分の進む道を見ると少し登り坂になっている。

「この山を越えればストラト都市だ」
「馬車の揺れが無くなったのは嬉しいが、次が山登りとは…」
「文句を言っな」

ラウナはバツサリと切り捨てて、スタスタと登り坂の山道を歩いて行く。

その姿は勇ましい事この上ない。

如何に日本の生活が便利に溢れているかを実感してしまう。
はあ…と軽く溜め息を吐いた後、ソウマも山道を歩き出した。

「そろそろ日が落ちるな…ここで野宿にしよう」

空が暗くなり始めた頃、ラウナがそう提案した。
山を登るから、持つと辛いかと思つたが…それほどでもなかった。
むしろ、時々見え隠れする魔物（小さめで安全）が怖かった。
襲つては来なかったが見るもの全てが見た事のない動物だからか、
あまり落ち着く事は出来ない。

「薪を拾つて来る。少し待ってろ」

そう言い残してラウナは森の中へと姿を消した。

出来れば一緒に行きたいのが本音だ…もしこんな所で一人になり、襲われた時の事を考えると怖い。

熊程度の大きさなら剣も有るので問題ないが…未知なる生物ばかりのこの世界では手に負えない動物も居そうだ。

そんなものに遭遇、なんて事は避けたい。

そんな事を考えていた時だった。

遠くから犬の遠吠えのような声が聞こえた。

その声にビクツと驚いてしまう。

暗くなってから行動する動物なんて…しかも犬の遠吠えに似た事をする魔物なんて、ろくなヤツがいないだろう。

絶対好戦的な魔物だ…そんなふうに考えていると森の中からラウナが戻って来た。

「早かったな」

「薪など直ぐに見つかるからな。それより、さっきからベアウルフが鳴いているな」

ベアウルフとは大型の魔物で基本的に狼のような形態をしているが、牙と爪が堅く鋭いため、結構危険な魔物…らしい。

予想通りにろくな魔物ではなかったな。

ラウナは薪を一カ所に集めて置き、それに向かって手を向ける。

すると、手からは赤い光が輝き魔法陣が浮かび上がった。

その魔法陣からは炎が吐き出され、薪に火を灯す。

「ほゝ便利だな」

「これくらいなら誰でも出来る。個々の属性もあるが…」

魔法は属性があり、それぞれ人間や魔族も自分に合った属性の魔法

しか使えない…それが魔法のルールだ。

「私は魔法が苦手だな…このくらいしか出来ないんだ」

「うん、見た目通りだな」

思った事を口にするとうーナはギロリとソウマを睨む。

ラウナはどう見たって不器用そうだし、魔法についても一般的な事しか知らなかった。

剣技は凄いのだろうが、魔法は全然のようだ。

あまり迂闊な事を言うとかで刺されそうなので黙って置く。

そんなやり取りをしている間に薪は火に包まれ、二人を照らし、影はユラユラと動いている。

風で揺れる炎を見ながら思う、自分はどうしてこんな所にいるのだろうか…と。

日本の常識は通じない上に、見た事のない動物…魔物とやらは存在する。

普通に生活していた時間を酷く懐かしく感じてしまうほどに、有り得ない事ばかり。

それでも、生きるための最善策を考えて判断し、結果的には生き延びた。

選んだ道が正解かどうかは分からないが、ラウナに出会い、こうして共に旅をしているのは間違えでは無いのだろう。

けれど、やはり日本への帰郷願望は強い。

今まで当たり前前に過ごして、うんざりに思っていた教室でさえも懐かしい。

「大丈夫か？」

ラウナが心配そうにソウマの顔を覗き込む。

どうやら心配させてしまったようだ。
いきなり目の前に現れた顔に少したじろっていると、ラウナが聞いた。

「…やはり故郷が恋しいか？」
「……恋しいな」

それは当たり前だ。
こんな命をかける物騒な世界よりも、平穏な日常に戻りたい…そう思うのが普通だろう。
家族の事もある、今はきっと行方不明だと騒がれているのが目に浮かぶ。

「だが、愚痴を零しても何も変わらないからな」
「……お前は強いな」

強い…のだろうか？
いや、そんな事はない…とソウマは思う。
正直な話をする、戦いなんて大嫌いだし本当なら逃げ出したい。
だが、生きて帰りたいからこそ自分のやるべき事を精一杯する。
そうでもしなければ生きられないから…

そんなことはない——そう言おうとした時だった。
ソウマとラウナはバツと森の茂みに向き直り、体勢を低くして剣の柄に手をかける。
鋭い殺気を感じ、素早く反応したのだ。

「何かいるな」
「俺、嫌な予感が…」

何となく嫌な予感を感じながら茂みを注意深く見ていると、一見狼のような魔物が姿を見せた。
鋭く尖った爪と牙、暗闇に赤く光る四つの目に黒い光沢を放つ毛並み。

「ベアウルフか…」

ラウナがそう呟くと、様々な方向からカザツと音が聞こえ、ベアウルフの群れが二人を囲んだ。
どれも大きさはそれほどでもないが、数は30近い。

「ソウマ…半分は任せるぞ」

「了解だ。やるだけやってみるよ」

そう呟って腰にさしてある二本の剣を鞘から抜く。
左手は普通に持ち、右手に握る剣は坂手に持つ。

「古流剣術、蒼閃二刀流の力…見せてやるよ」

そう呟き、地面を蹴る。

ベアウルフの群れに飛び込み、身体の捻りを使って剣を振るう。

黒い体毛を二本の剣が貫き、ベアウルフの体からは赤黒い血が吹き出る。

同時に飛びかかってくるベアウルフに対し、バックステップやサイドステップで素早く移動し、攻撃を無駄なく避けると直ぐに構えて向かう。

身体の動きは決して止まらず、流れるように次の動きに転じる。
背後を突かれた攻撃も回転を軸とした双剣の特性の前には効かない。
十数体いたベアウルフたちは瞬く間にソウマから退き、森に飛び込

んで退散して行つた。
軽く斬つたが、そのうち塞がってしまう程度なので心配はないだろう。

ラウナの方を見ると、そちらも終わったようである。周りにはベアウルフの死体が転がっていた。

「なかなかの腕前じゃないか」
「そりやどうも」

面と向かつて褒められたのが少し気恥ずかしいのか、ソウマはそばを向きながら短く応える。

だが、直ぐに二人の表情が引き締まる。

「ソイツ」は他のベアウルフとは違い、隠れもせずに堂々と姿を現した。

「親玉登場…か」

二人の目の前に現れたのは先ほどのより数倍の大きさをしたベアウルフだった。

爪や牙の長さ、鋭さも比べものにならない。

「気をつける。さっきのとは格が違つぞ」

ラウナの忠告にソウマは無言で頷く。

格が違うのは頭から理解している。

ビリビリと感じる殺気がどれほど危険度が高いかを物語っているのだ。

ベアウルフは突如として強靱な四本の足を使い、二人のもとに突進

して来た。

反射にも等しいくらいの反応で左右に避け、挟み込むように動く。スピードすら段違いだ。

余所見などしていたら一瞬で切り裂かれるか食いちぎられるだろう。旅を開始して1日目でゲームオーバーなんて冗談じゃない。

ベアウルフの素早い切り裂きがソウマを襲い、ソウマはそれを二本の剣で受け止める。

動きが止まった際にラウナが背後から切りかかる…が、ベアウルフは攻撃を感知し素早く跳んで距離を空ける。

「良い引き際だな」

「いや、関心する所じゃないからね。下手すればこっちが死ぬからね」

本当に下手すれば死ぬ。

図体が大きくなって攻撃力が上がったのに加えてスピードも上がってるなんて…どう考えても反則だ。

「ソウマ、お前は奴の攻撃を正面で引きつけて隙を作れ。私が背後から仕留める」

それはさっきと同じパターンではないだろうか…

あのスピードや察知能力に長けたベアウルフを仕留めるには、大きな隙を作らなければ難しい。

つまりだ…先ほどは受け止めたがこちらから攻めなければ駄目と言う事だ。

「最初から難易度が高いだろ…」

そう呟きながらも剣を構える。

ベアウルフはそれを待っていたかのように、ソウマに攻撃を仕掛ける。

鋭い爪が一線を切り、ソウマはそれを紙一重で避けた。が、避けきれずに頬が少しだけ切れてしまう。

そのまま姿勢を下げ懷まで走り、回転しながら頭に向かって斬りつけた。

しかし、ベアウルフはその鋭い牙で剣撃を防いだ。

ソウマはその隙を見逃さない。

回転の勢いを殺さず逆手に握った剣でベアウルフの目を狙う。

だが剣先が目に触れる事は無かった。

ベアウルフの強靱な前脚がソウマに向かっていったのだ。

それにいち早く気づいたソウマは寝転ぶ事でその攻撃を避けたが、ベアウルフの牙が襲う。

ソウマの身体は寝転んだばかりだから次への行動が遅れ、避けきれない。

「ラウナ！」

ソウマの呼びかけに背後からラウナが斬りかかる。

狙いは頭、あらゆる生物の急所だ。

これで決着。そう思っていた二人だったが、ベアウルフは想像以上に強かった。

跳んでいたラウナの身体はベアウルフの尻尾に寄って急速に方向を変えられ、近くにあった木にぶつかる。

「あう！」

ラウナは背中を木に強打し、苦痛の声を漏らして気絶してしまった。グッタリと意識を失ったラウナの姿を見てソウマは顔を青くする。

「軍人が簡単に気絶すんなよ！」

だが、ソウマのその隙は致命的な結果を生む。

一瞬、ラウナに気を取られたソウマにベアウルフの爪が襲いかかった。

咄嗟に反応し剣を爪と身体の間にはまり込ませ、身を守る……が、強靱な力を防ぎきる事は出来ずにソウマの身体は後ろに吹き飛んでしまった。

「ぐっ！」

ソウマの顔が苦痛に歪み、痛みに耐えきれずに剣を離してしまった。ヤバイ……そう判断したソウマは痛む身体に鞭を打って剣を取りに行こうとする。

だが、ベアウルフは既に飛びかかっていた。

空中を跳び、自分に向かって来るベアウルフの姿を見て一瞬……死を感じてしまう。

その瞬間、ソウマの背の魔法陣が銀色の輝きを放つ。

そして自分から離れていたはずの剣が銀色の粒子を放ちながらベアウルフに向かい、独りで動く。

完全に予期しなかった攻撃にベアウルフは反応出来ず、二本の剣はベアウルフの体を突き刺した。

ベアウルフはそのまま落下し、地面に体を打ちつける。

しかし、足に力を入れ、再び立とうとする。

魔物ならではの生命力なのかは分からないが、やらなければこちらが死ぬ。

再び魔法陣が光り、ソウマは姿勢を低くして地面を蹴った。

ソウマは神速と化し、全てを超越した速さでベアウルフの横まで到達する。

そしてすれ違う瞬間にベアウルフの体に刺さった剣の柄を握る。
神速で動くソウマに握られた剣は一直線にベアウルフの体を切断した。

急速に力が抜けたベアウルフはグラリとバランスを崩し、地面に横たわる。

微かに呼吸をして動いていた体も次第に静かになり… ついには完全に停止した。

「終わった…」

自然と口からそう漏れた。

身体の緊張が一気に抜け、ソウマはその場に座り込む。

まさか旅の初日にこんな魔物と出くわすとは思わなかった。

危うく死ぬ所だ。

助かったのは… 剣が銀色の粒子を纏いながら勝手に動いた、あの不思議な現象だろう。

…いや、不思議ではない。

ソウマは既に気づいていた、あれが神龍ラグナロクが言っていた『無属性の魔法』なのだと。

言わば…物を遠隔操作出来る魔法。

確かに属性は無い。

剣以外にも使えるかは分からないが、強力な力である事に変わりはない。

神速も最初に使った頃より、身体へのダメージが減った。

身体に至る所は痛むし披露感も大きい。

それでも血を吐いて気を失わないだけマシだ…恐らく、身体と背の魔法陣がリンクしてきているのだろう。

更に時間や経験を費やせば実用的になる。

遠隔操作の魔法も感覚は覚えている…これからは魔法も使えるだろう。

膝に手をついてゆっくりと立ち上がり、木を背にしてグッタリと眠るラウナの元に向かう。

少し恥ずかしいがそのままにしても置けないので、お姫様抱っこをして場所を移動する。

この場所に留まっていたら血の匂いで他の魔物が集まる可能性がある。

安全性を考えると移動するのが利口だろう。

火を消し、荷物を持って歩きだす。

お姫様抱っこされているラウナは起きる気配がない。

振り返って動かなくなったベアウルフに向かって言う。

「成仏してくれよ…」

ソウマは月明かりに照らされる道を歩き、出来るだけ安全な場所を探した。

冒険8―踊り子マーサ

「……ここは？」

「よお、やっと起きたか」

岩場の影に身を隠してから数時間後、ラウナが目を覚ました。既に空は明るくなっていて、朝とも言える。

ベアウルフとの戦いがあったからか、警戒しながら寝たため、あまり寝た気がしない。

「…そうだ！ベアウルフは！」

「倒したよ…危うく死ぬ所だったけどな」

少しの間を置いた後、思い出したようにラウナが叫んだが、ソウマは冷静に返答した。

ソーマルイ国第7軍隊長とか名乗る女が気絶したせいで本当に死を予感した。

急死に一生を得たのは良いが、こんな事が毎日起こったら身が保たない。

出来ればこれからは危険を避けながら旅をしたい。

ソウマの言葉を聞くと、ラウナは安心したように息を吐いた。

「流石だな。私はあるう事が気絶してしまうなんて…情けない」

自虐的にラウナは呟く。

何が「流石だな」だよ！お前が気絶したせいで死にかけたんだぞ！
…そう言いたかったが、ラウナの悔し気で自分を責めているような
表情を見たら…責める事は出来なかった。

「そんな事はないさ」

これが多人数だったり、ベアウルフに襲われていなければ…余計な
事は言わなかっただろう。

いつもの冷静で要らない事は言わない無口な兵藤双真でいたはずだ。
これは疲労や二人きりの状況だから…言ってしまったのだ。

「アンタには既に何度も助けられてる。気絶したのは否定出来ない
が…そのおかげで魔法も使えるようになった」

「魔法…だと？」

そういえばラウナにはまだ話していなかった。

ソウマは、ラウナが気絶した後、何が起こりどうやって生き延びた
かを話した。

話を聞いたラウナは考え込んだ。

「そんな魔法…聞いた事がないぞ？」

「だろうな。神龍は唯一無二の魔法だと言ってたからな」

そう…唯一無二、ソウマ自身だけの魔法。

ラウナが知らないのは当たり前だった。

ソウマ自身すら詳しくは分かっていない…ただ、その力は旅を続け
て行く上で…日本に戻る上で必要な力である事に変わりはない。

ソウマはそこで話を止め、立ち上がってラウナに手を差し伸べる。

「そろそろ進もう。ストラト都市には早く着いた方が良いんだろ？」
「…ソウマの言う通りだな、済まない」

ラウナは素直に差し伸べられた手を握り立ち上がる。

側に置かれていた荷物を腰に巻きつけてからラウナは歩き出す。
ストラト都市までもう少し…道中が安全であるように願おう。

ソウマの目の前に広がっているのは、見知らぬ食材が取り引きされている姿だった。

あまりに賑やかで人数の多さに少し気が引けてしまった。

あれからは魔物に襲われる事は無く、安全にストラト都市に到着した。

そして、感動したのは都市に人間が多く存在していたこと。もちろん、魔族もいるが…この世界にやって来て初めて人間を見たのだ、嬉しいに決まっている。

いや、歓喜よりも安堵感と言った方が正しいのかもしれない。

「まずは宿をとろう」

ラウナは何度か来た事があるらしく、スイスイと進んで行く。人や魔族で人混みとなっているので、はぐれないようにラウナの背中を追う。

ストラト都市は食材の貿易（？）が盛んなだけでなく、金属を使った武器や防具も充実している。

街の至る所に武器屋や防具屋などが並んでいた。

後で剣を買いに来よう、と心の中で考えながら足を動かした。

高くも安くもない普通の宿をとった後、ソウマとラウナは別々に情報収集する事になった。

買う物があるなら情報収集のついでに買え、と10万ジルを受け取って現在は街を練り歩いている最中だ。

ソウマは先ず、近くにあった酒場に入った。

店に入った瞬間に客たちの視線が一気にソウマに集まる。

映画などで良くあるシーンだが、実際に自分がその中心に立つと言うのは些か居心地の悪いものがある。

集まる視線を身に感じながらカウンターまで歩き、店員の人に問う。

「この辺りに変わり者っているか？」

「……それはどういう……？」

「何でも良い。明らかに周りとは逸脱した変わり者を探してるんだ」

普通なら、難病に効く薬について知らないか、など聞くだろつ。

だが、そんな事をしていたら無駄に時間がかかってしまう。

レイナ・ソン・ソーマルイの病は原因不明……国中の医師が診察したが何も分からなかったとラウナからは聞いている。

そこまでして何も分からないのだ……普通に探しても見つからない。

常人に分からない事が分かるのは「普通」から逸脱した者のみ……天才と馬鹿は紙一重と言うように。

そして、天才と馬鹿の共通点はただ一つ……変わり者と言う事だ。

つまり、変わり者を探していった方が当たりに出会う確率が増す訳である。

「……すみません、知りませんね」

「そうか」

「私、知ってるわよ」

店員が分からないようなので、他の店に移ろうと振り返った時だった。

近くのテーブルで仲間のような者と談話していた女がそう言った。

美人であろう顔つきに、スタイルの良い身体つき。

チャイナドレスのような服だが、それとは比べ物にならないほど露出の多い服装。

胸元は大きくはだけ、長い脚線美は隠そうともしていない。

紫色の長い髪の生える頭には飾り物を付けている……その姿を見るかぎり、どうやら人間の踊り子のようなようだ。

「ストラト都市の周りを囲むストラト山のとある場所に剣職人がいるのよ。滅多に街に下りて来ないで剣ばかり作ってるイカレた女よ……腕は確かだけどね」

剣職人：原因不明の病とはかけ離れた職だが、変わり者なら会ってみる価値は有りそうだ。

加えて剣職人なら剣を譲って貰うか買う事も出来る。

腕は確かだと言うし、ソウマとしては悪くない話だった。

「……ソイツの居場所は？」

「うふふ……」

居場所を聞いてみるが踊り子は答えずに、妖艶な笑みを浮かべてソウマに近づいた。

目の前に立ち、ソウマの顔に自身の顔を近づけ、ソウマの首筋を撫るようになぞる。

「アナタ：なかなか良い顔してるわね」

「……悪いが、俺は暇じゃない。教えてくれるのなら早く言って貰いたい」

「教えないのなら？」

「次の店に行ってまた情報を集めるさ」

初対面の相手に警戒をしないほど馬鹿でもない。

既に腰の後ろに付けてある剣の柄に手をかけ、いつでも抜けるようにしておく。

踊り子を見るソウマの瞳には、明らかに殺意の色が混じっている。

そんなソウマの殺意を感じとった踊り子は肩を竦めながら離れ、クスツと笑った。

「冗談よ。そうね…2万ジルで案内してあげるわ、後払いで結構よ」
「……………良いだろう」

情報料と言うのは有り得ないくらい高いものだ。

案内もしてくれて2万ジル、それなりにお手頃な値段だろう。

「交渉成立ね。私はマーサ・シーンスよ…よろしく」

「俺はソウマだ。案内頼む」

お互い自己紹介も終わった所で、二人揃って店を出た。

そして、何故か分からないが「男なら奢りなさい」と言われ、食べ物をつか買わされながらも、ラウナと合流すべく宿に向かった。

冒険9―剣職人ティアラ・コーナ（前書き）

PV5000突破！

ご愛顧、ありがとうございます！

冒険9―剣職人ティアラ・コーナ

「……ソウマ、その女は誰だ？」
「手がかりだ」

宿に戻って見たが、ラウナはまだ戻っていなかったみたいなので、部屋でマーサから剣職人について話を聞いていた。

そして一時間ほど過ぎた頃にラウナは帰って来て…最初に発した言葉はそれだった。

知らない人間がいたらそう聞くのが普通の反応なんだが…

「変わり者の剣職人がいるらしい」
「……ちよつと来い」

短く説明したら、ラウナが曇った表情でソウマを部屋の外に連れ出した。

「お前…旅の目的は分かっているよな？」
「もちろん」

旅の目的はレイナ・ソン・ソーマルイの病の原因を突き止めること。それに当たり、腕の良い医者や難病に効く薬を探すことだ。

加えて、個人的だが元の世界に帰る方法を探す…その二つが旅の目的。

「ならば何故！剣職人なんだ！」

ラウナは激怒した。

つまりだ、剣職人なんて全く関係ないのにどういつつもりなんだ…
そう言いたいのだろう。

こんな事なら先に説明して置くべきだった…と思いながらも、変わり者を探すことにして剣職人に行き着いたまでを話した。

話を聞いたラウナはしばらく考え込んだ後、表情を緩めた。

「その考えは確かに効率が良いな…」

「だろ？」

「ああ。大きな声を出して済まなかった」

ラウナが理解してくれたようなので、これで話し合いが終わり、二人でまた部屋に戻る。

「うふふ…会議は終わったの？」

「まあな」

マーサがヤケに楽しそうに聞くが、それに対し静かに応える。

何が楽しいのかは分からない…最初に出会った時から思っていたが、マーサはどこか怪しい雰囲気を出している。

常に油断をせずにいつでも対応出来るように気をつけているが…
どちらにせよ、これからも油断をしない事だろう。

「いつ出発するのかしら？」

「ラウナが疲れていないのなら今直ぐにでも行きたいが…」

「私は大丈夫だ」

ラウナに視線を送ると胸を張ってそう言った。
軍人として訓練していたのだから、少し情報収集したくらいでは疲れないだろう。

「なら直ぐに行こう。マーサは準備が必要か？」
「いいえ、大丈夫よ」

マーサも準備は要らないようなので、三人は宿を出てストラト都市を囲うように聳え立つストラト山に向かった。

マーサの案内でストラト山に入り、少し進んだ頃…かなり険しい山だと知った。

上り坂は急で道は凸凹としている、ストラト山は森が少なくほとん

どが岩ばかりだ。

こんな所で引きこもる事など出来るのだろうか…森の生い茂っている場所なら食料も確保出来るだろうが、周りは固い岩場。

鉱石などは豊富かもしれないが、食料があるとは思えない。

本当にここで引きこもって暮らしているのだとしたら相当な変わり者だろう。

「この坂の上りきった所よ」

そう言つてマーサは少し上を指差す。

指差す先には、既に上り坂の終わりが見えていた。

だが、ソウマは少しの違和感を覚えていた。

今まで歩いて来たストラト山には人の気配を全く感じなかったのだが…坂を上つて行くに連れて複数の気配を感じる。

どうやらラウナもそれに気づいたようでソウマに声をかける。

「ソウマ…」

「ああ、先に行つて様子を見てくる」

ソウマはそう告げて剣を一本抜き、それを軽く空中に投げる。

剣は銀色の粒子を纏い、曲線を描きながらソウマの足元を通過する。通過の瞬間にソウマは軽く跳び、刀身の横腹に足を乗せてバランスを保つ。

剣をスケボーのように扱い、空中を飛び抜けてアツと言うまに上りきった。

そこには一人の若い女を中心に周りを柄の悪い男たちが取り巻いている光景が広がっていた。

「盗賊か…？」

服装や人柄を見るかぎり、そういう輩にしか見えない。

決めつけるわけではないが、良い人には見えないだろう。

とりあえず…見てみぬ不利も出来ないうえにラウナが上って来るのにはもう少し時間がかかる。

ソウマは助ける事に決めて、もう一本の剣を抜く。

そして盗賊の集団に向かってもうスピードで突っ込んだ。

銀色の粒子は魔法で構成されている。

その粒子は術者の意志で形を変えられ、上手く使えば殺傷も可能。

だが今のソウマでは明確な形に出来るほどの実力が無く、粒子を放出する程度が限界だ。

それでも盗賊くらいなら問題なくそれで倒せる。

盗賊集団の密集地を粒子を放出しながら走り抜ける。

ソウマが人の間を通れば、銀色の粒子により盗賊は吹き飛ばされ、気絶した。

一分後には、その場に立っている人間は若い女とソウマだけになっていた。

「くそ！撤退だ！」

盗賊たちは急いでその場から逃げるように消え、居なくなった事を確認するとソウマは魔法を解いて地面に着地した。

それと同時にラウナたちが到着し、いきなり現れたソウマたちに若い女が問う。

「…テメエらは何者だ？」

警戒心を剥き出しにする女にどう説明しようかと考えていると、マ―サがソウマの前に出た。

「私が連れて来たのよ」

「マーサ！……………ここには誰も連れて来るなど言っただろうが！」
「だって…彼が可愛いんだもの…」

マーサの表情が恍惚に染まる。

どうやら二人は知り合いのようだ…話ている内容は聞かなかった事にしよう。

女はまくし立てるように怒声を発し、マーサに至っては全く話を聞き流している。

これでは話が一向に進まない…すると、困っているソウマを見かねたラウナが二人の間に割って入った。

「私たちは怪しい者ではない。アナタに聞きたい事があって来たんだ」

「……………マーサが連れて来たんなら怪しい者じゃねえのは分かる。とりあえず中に入れよ…助けて貰った礼くらいする」

女はそう言って一軒家に入って行った。

どうやら、話だけは聞いてくれそうだな。

三人は女の後に続くように室内へと足を踏み入れる。

そして、中に入って啞然とした。

室内に入った瞬間に目に飛び込んで来たのは剣…どこを見渡しても剣ばかり。

確かに変わり者だ…ソウマがそう思わざるを得ないほどの量の剣が飾られていた。

「素晴らしい腕だな…」

飾られている剣をジッと見ながらラウナが言った。

マーサの言った通り、腕が確かなのは剣を一目見れば明らかだ。腰に装着してあるソーマルイ宮殿から持って来た剣とは比べ物にならない。

剣の家庭で育ったソウマには、それが当たり前のように分かった。

「落ち着かないかもしれねえが…まあ座れよ」

部屋の中央に位置付けられている小さめのテーブルに座るよう促され、三人はゆっくりと椅子に座る。

「俺はソウマだ。こっちがラウナ、ソーマルイ国の軍隊長をしている」

「アタシはティアラ・コーナだ。ソウマ、さっきは助けて貰った事に礼を言っぜ」

「ああ」

ティアラは中性的な顔つきなためか、ラウナより男前に見えてしまう。

こちらの世界は男前な女性が多いのだろうか…

そんな事を考えていると、ティアラはラウナに視線を移した。

「ソーマルイ国って言う隣国だろ。軍隊長さんがこんな所に何のようだ？」

「…妹が原因不明の病なんだ。その類に詳しい者か難病に効く薬とか知らないか？」

「なるほどな」

ティアラは「うん」と考えながら顎に手を当てる。

返答が返って来るまで暇なので、椅子から立ち上がり、飾ってある剣を一つひとつじっくり観察する。

何度見ても、やはり素晴らしい出来上がりだ。

ここまで造れるようになるには、普通は何十年も必要なものだが…
ティアラは見るかぎり若い。

二十台の前半と言った所だろう。

その若さでこれほどの技術を持っているのは相当な才能と努力が必要。

スポーツで例えるなら、高校生でプロに入り世界で活躍してしまうほど凄い。

「知らないな…」

「そうか…なら、特別な変わり者は知り合いにいないか？」

ラウナとティアラの話を目で聞きながらも観察を続けていた時だった。

『その剣』を見てソウマは言葉を失い、固まった。

なぜなら…ソウマの目に映るその剣は…この世界にあるはずがない日本刀だったから…

冒険10―刀の繋がり

「変わり者なら何人か――」

「…ティアラ」

「あん？」

ラウナと話すティアラの言葉を遮るように名前を呼ぶ。

「なんだよ」と言わんばかりに視線を送るティアラに目の前に飾られている日本刀を手取る。

「おい！何勝手に触って―」

「なぜ日本刀がある！」

勝手に触るソウマを咎めようと席を立ったティアラに、強い声で言う。

この世界に来て一番に感じた事は、日本で学んだ常識や文化が全く違う事だ。

その世界に日本刀がある…これは明らかにおかしい。

他の文化は違うのに日本刀はある？

しかも、周りを見ても日本刀はこの一つだけ…疑問に思うのが当たり前だ。

「ソウマ？」

初めてみたソウマの冷静さを欠いた表情にラウナが戸惑う。

しかし、ソウマはそんな事など気にも止めない。

ズカズカとティアラに近づき、手に持った日本刀を突きつける。

「これをどこで手に入れた！」

「アタシが造ったんだよ！祖父の書物にあつたから特別に一つだけ造っただけだ！」

「祖父の書物……？」

祖父……つまり、ティアラのお祖父さんが日本刀の造り方を知っていた……いや造っていたのか？

なら、なぜこの世界で日本刀が繁栄していないんだ。

今まで見た剣は全て西洋剣のみ、日本刀なんて無いものだと思っていた。

なのにここに一つだけある……しかも祖父の残した書物により造られたものが。

分からない……この世界には一体何が隠されている？

良く考えれば、文字も読めるし言葉も話せる。

文字なんて日本語じゃないはずなのに読めたし、言葉だって違うはず……なのに話せる。

日本と文化のほとんどが違うはずの世界であるはずなのに通用している。

つまり……

この世界と地球は……日本は何かの繋がりとあると言う事だ。

戻れる……元の世界に戻る可能性が出てきた。

今まで何の手がかりも可能性も無かった旅に光が差した。

「……いや、済まない。少し取り乱した」

「べ……別に良いけどよ……」

ソウマはさっきまでの険しい表情とは打って変わって落ち着きを取り戻した。

そんな姿を見たからか、ティアラも萎むように声が小さくなる。

可能性があるのなら迷う必要はない…自分の思っように調べて行けば良い。

ソウマの瞳に宿る光が淡く光るその瞬間をラウナだけが黙認していた。

「ティアラ、悪いけど…今日は泊まっていっても良いかしら？もちろん、この二人も」

今まで黙っていたマーサがティアラに許可を求めるようにそう聞いた。

それは助かる…宿に泊まるには、それなりにお金がかかる。経費を削減出来るのならそれに越した事はない。

ラウナも期待を込めた目でティアラを見た…が、当の本人は浮かない表情だった。

「…止めた方が良いでしょう。ここは危険だからな」
「どういう事？」

マーサが聞く。

危険…とは何が危険なのだろうか。

この一体は岩場ばかりで魔物も少ない、どちらかと言うと安全な地帯なはずだ。

そう考えるソウマの脳裏に一つの光景が過ぎった。

「さっきの盗賊か？」

「……………」

どうやら凶星のようでティアラは決まりが悪そうに視線をズラした。

「あれくらいの盗賊なら——」

「あれは下っ端だろ。奴らの後ろにはとんでもねえのがくっ付いてやがるんだよ」

ティアラは一度、奥の部屋に入った後に何か布に巻かれた「何か」を持って戻って来た。

それを机の上に置き、顎を少しだけ動かして「見てみる」と示す。顎で使われるのは些か不愉快だが、そんな事まで気にしていいたら話が進まない。

ティアラの指示通りに縛ってあった紐を解き、布を取った。

「これは……」

布に巻かれていたのは七本の剣だった。

どれも触れる事すら戸惑ってしまう程に鍛え上げられた剣で一瞬、たじろってしまう。

部屋に飾ってあるのとは比べ物にならない。

一本だけ手にとって鞘から抜いて見る。

シュリン、と研ぎ澄まされた音が部屋に響き、この剣の切れ味を物語っていた。

「アタシが造った中で最高の7本だ。奴ら……いや、奴はこれを狙ってるんだよ」

「奴？」

苦虫を潰したかのような表情のティアラに聞き返す。

先ほどからやけに黒幕を隠すように話をしていたティアラだったが、
はあ…と溜め息を吐いた後に呟くように言った。

「『氷剣のゴードン』…聞いた事くらいあるだろ？」

「ゴードンだと!？」

反応したのはラウナだった。

もとより異世界の人間であるソウマには分らないが、ラウナの表情は驚愕に満ちている。

「誰だ？」

「…ゴードンは価値の高い剣を集めている事で有名でな。氷の魔法と剣を組み合わせて戦う事から付いた通り名だ。だが……………ゴードンは最近、消息不明になったと聞いたが…」

氷剣のゴードン、強さはB級だが剣を集めるためにはどんなに卑劣な手段であろうと使う。

水属性魔法の応用である氷の魔法と剣を組み合わせは強力で、それなりに有名であつたらしい。

だが…最近になってゴードンは姿を消し、消息不明。

パツタリと姿を消してしまったはずだったが、盗賊と手を組みストラト山に潜伏していると言う。

「この七本の剣は中途半端な剣士には渡せねえ…アタシが魂込めて造つたもんだからな」

ティアラの剣を見る目は、まるで我が子を思う親のようだった。
やはり、剣職人にとって自分の作品は我が子同然なのだろう。

ティアラの姿を見てそんな事を考えていると、ラウナがソウマの肩に手を置きながら言った。

「なら、私たちがゴードンを倒そう。そうすればティアラも安心だろう?」

「…気持ちは嬉しいが…関係ねえ奴を巻き込む訳にはいかねえよ」

全くだ。

もともと、この旅はレイナ・ソン・ソーマルイの病の原因と日本に帰る方法を調べること。

こんな所で無駄な時間を費やすのは利口な考えじゃない。

ここには出がかりが無いのであれば、街に戻って情報収集するか次に進むかするかのどちらかだろう。

わざわざ面倒事を増やす必要はない…のだが…

「いや、ラウナの意見には賛成だな。俺は既に顔を見られたし、そこまで知って見てもぬフリは出来ないな」

先ほど盗賊を蹴散らしてしまったのだから、恐らく情報は伝わっているだろう。

加えて、見てみぬフリをして何かあったら後味が悪い。

「そこで頼みなんだが…」

「あん?」

「ゴードンの方を何とかする代わりに剣を幾つか譲ってくれないか?」

そして、本当の狙いはそれだった。

魔法を使うにも剣が二本だけでは意味がない…魔法で二本の剣を動

かすとしても、自分で持っていないのは危険過ぎる。

複数あれば自分で剣を使いながら魔法も使える、そうすれば戦力は大幅に広がるだろう。

ティアラの腕は確かだ…彼女から剣を譲って貰えるなら経費を削減出来る上に良質な剣が手に入る。

幾ら何でも利益無くして命なんて賭けられるほどお人好しではない。

「……良いぜ。だが、どの剣を譲るかはアタシが決める…良いな？」
「ああ」

これで交渉成立のようだ。

「これで晴れて泊まれるわね」

マーサが嬉しそうに手を叩いて喜んだ。

提案するだけして置いて黙っていたくせに何を喜んだいるんだ。

こつという性格は嫌いだ…なぜなら幼なじみのアヤセに似ているから何を考えているか分からない上に無駄に軽くて馴れ馴れしい。

マーサはそっくりで、なぜかアヤセが重なって見えてしまう。

「何かしら？まさか…私に惚れたとか？」
「んな訳あるか」

視線に気づいたマーサが顔に手を当てて頬を染めながらそんな事を言ったので軽くあしらう。

マーサに惚れるなんて120パーセント有り得ない。

それだつたらラウナを好きになるだろう…別に好きとかではない。

「部屋は二階が空いてるから使えよ。ゴードンは急ぎでもないから…今日はゆっくりしてくれや」

「ああ、済まない」

お言葉に甘えさせて貰い、二階へと移動して荷物をそれぞれの部屋に置く…もちろんラウナとマーサが相部屋だ。

本当ならマーサとラウナを一緒にの部屋と言うのは好ましくない状況だった。

なぜなら、マーサが怪しいから…会ってから少ししか経っていない事もあるが、なによりマーサから感じるざわついた感覚。

気づいているのは自分だけかもしれない…だが、マーサは不思議なくらい自分に近い存在な気がするし、近くに行くと胸騒ぎが起きる。理由は分からないが、警戒するに越した事はない。

だからこそ、ラウナが心配なのだ。

そんな時、コンコンと扉をノックする音が部屋に響いた。

「ソウマ、私だ」

その声はラウナのものだった。

ソウマは扉に近づき、ゆっくりと開ける。

「ゴードンの事だが…」

「夜中だろ？分かってる」

「それなら良い。マーサにも伝えてある」

「そうか」

ラウナが伝えに来たのは、夜中にゴードンの潜伏場所に攻めようと言う作戦だった。

だが、そんな事は言われなくても分かっている。

闇に紛れ込んで奇襲すれば危険を減らして敵を倒せるだろう。

幸いな事にラウナとマーサの姿は見られていない。

「それまでは休んで置け」

「ああ…ラウナもな」

そう応えるとラウナは自分たちの部屋に姿を消した。

だが…ソウマは胸騒ぎを覚え、嫌な予感を感じていた。

もし、この時点で気づいていられたのなら、「あんな事」には成らなかったのかもしれない。

全ては夜中…闇の時間が始まる。

冒険11―決着、そして再会

深夜：普通の人々や魔族たちは既に夢の中へと旅だっている頃。

空は黒に染まり、雲が月を覆い隠して光を遮っているからか、ストラト山は闇に包まれていた。

そんな中、密かに戦いのための準備を整える影が四つ。

「ティアラ：アンタは戦わなくても良いんだぞ？」

ソウマは慣れない手付きで防具を装着するティアラに向かってそう言った。

職人としては一流でも戦いに置いては違う：余りにも不安だったから聞いたのだ。

「いや、アタシも行くぜ。他人任せは症に合わないからな」

「だが…」

「盗賊の雑魚共なら倒せる：心配すんな」

そう応えるとティアラは再び防具を着ける事に意識を戻した。

どうやら、これ以上は言っても無駄のようだ。

不安は在るが、説得を諦める事にする。

だが：この時、ソウマの不安はティアラについて以外にも在った。嫌な胸騒ぎがする：何を不安に思っているのか、なぜ胸騒ぎが起き

ているのかは分からない。

もしかしたら…作戦はまた後日に決行した方が良いのかもしれない、とまで考えてしまう。

「どうした？」

険しい表情で考え込んでいるソウマを心配してか、ラウナが声をかけた。

「いや…妙な胸騒ぎが…」

「大丈夫だ、気にするな」

ラウナは重々し気に言葉を発したソウマの肩を軽く叩き、安心させるように言う。

ラウナの表情には不安気な色は無く、心配した様子は無かった。

「初めて奇襲として攻めるからな。不安なのだろう」

仕方が無いな、と言わんばかりに得意気に言う。

そういう訳ではない…確かに奇襲なんて今までに経験もない…けれど、この胸騒ぎは違う。

嫌な予感が胸を蝕み、何か起こる事を予言しているようだった。

「ラウナ、違——」

どうしてもその胸騒ぎを無視する事が出来ず、ラウナにそれを伝えようとした時だった。

一瞬、窓の外が光つたのを目の端で捉えた瞬間…ズドンッ！と言う爆音が響き、地面が崩れた。

咄嗟の出来事に反応が遅れるが、剣を抜いて魔法を発動する。

——蒼閃流・飛翔——

銀色の粒子が剣に纏わり、スケボーに乗るかのようにその上に足を乗せる。

ラウナも助けようと視線を向けたが、上手くバランスを保ちながら着地し、特に助ける必要もなかった。

ラウナの着地した場所の横にはマーサが眠っている。

ティアラは…？と瓦礫と化した一軒家の残骸の山を眺めていると、中からティアラがゆっくりと姿を現した。

その姿からは般若のように怒気を発し、表情を見ると鬼のように変化している。

「アタシの家を壊したのはどこのくそ野郎だああ！！」

既に抜き身となっている剣の柄を握る手には血管が浮き出ている。

相当キレてるな…

それでも、ティアラの背中には昼間見せて貰った自身最高傑作の七本の剣が巻かれている布を背負っていた。

血管が浮き出るほどキレても剣はしっかり守っている所を見ると、流石だと思う。

「ラウナ！マーサは…」

「大丈夫だ。気絶をしてるだけで外傷は擦り傷程度だ！」

ラウナの近くに横たわって眠るマーサも問題は無いようだ。

仲間の身の安全を確認し終わり、ソウマはゆっくりと地面に近づき着地する。

そして、家を破壊したであろう者たちに向かって鋭い視線を送った。

「昼間の盗賊の仲間…か」

目の前に居るのは昼間の数倍の人数である盗賊。
その中心には見た目が盗賊とは明らかに違く、右手には長剣が握られている。

「中心に居るのがゴードンだぜ、気を抜くんじゃねえぞ！」

ティアアラが喝を入れる…が、周りから見れば一番冷静さを欠いていて危なっかしいのはティアアラである。

「キヒヒ…ティアアラ、お前の剣を貰いに来たよ」

ゴードンが耳障りな声でティアアラに話しかける。

その表情は嫌らしい薄ら笑みが浮かび、明らかに頭のおかしな人間だと思わざるをえない。

だが、ゴードンから放たれている魔力はそれなりに高く、ティアアラの言う通り舐めてかかると痛い目を食らいそうだ。

ソウマは二本の剣をそれぞれ左右の手に持ち、魔力を込める。

「ソウマ、お前はゴードンを殺れ。ティアアラは私が援護する」

「……分かった」

実戦の経験はラウナの方が圧倒的に多い…援護は普通に戦うのとは訳が違うので、ラウナの方が適任だろう。

ソウマは再び目の前の敵に集中し、自分の足に力を込め…

「行くぞ！」

ラウナの掛け声で地面を蹴った。

二人は気絶しているマーサからあまり離れる事が出来ないため、突っ込む事は出来ない。

よってソウマが盗賊集団の中へと飛び込む。

「殺せ！」

ゴードンの声が響くと、盗賊たちも一斉にソウマに飛びかかった。それに対し、眉一つ動かさずに姿勢を低く構える。

——蒼閃流・渦紋——

左右に腕を伸ばし、腰の捻りで回転を生む。

そして、魔力を込めた剣は回転と共に魔法により銀色の粒子が放出される。

粒子は淡い形を形成しながら盗賊たちを飲み込み、身体を刻んで行く。

「ぐあああ！」

盗賊たちは痛みに悶え、身体には切り傷が付き、その傷からは赤い血が流れ出た。

そのまま集団を突き抜け、中心にいたゴードンに向かって走りながら剣先を向ける。

——蒼閃流・鋭鋒——

肘を曲げて力を溜め、バネのように前へと剣を突き出す。

狙うはゴードンの心臓。

激しいスピードでゴードンの心臓へと剣先が迫る…だが、剣先が心臓に当たる事はなかった。

ゴードンは咄嗟に剣を抜き、ソウマが突き出した剣に自分の剣を斜めに当てて攻撃を逸らしたのだ。

それでも鋭い突きの威力は高く、外しきる事は出来ずに剣先がゴードンの肩を掠めた。

「クッ！」

「…外したか」

ソウマは直ぐさま後退し、一度体勢を整える。

先ほどまで余裕顔をしていたゴードンは一変して厳しい表情になった。

「なかなかの手練れだな」

「そりやどうも。アンタにティアラの剣を渡す訳にはいかないんでね」

鋭く睨んで来る視線を感じ、ソウマはわざとらしくニヤリと笑う。

ラウナやティアラの言っていた通り、剣自体の腕はさほどではない。本当に強い剣士だったら先ほどのソウマの突きを完全に向こうされ、後退する前に反撃をしているはずだ。

「キヒ！調子に乗るなよおお！」

ゴードンは怒りを露わにしながら魔力を高め、魔法を発動する。

魔法で造り上げられた水は剣に纏わり、包み込んだ後に凍りつき氷となる。

あれが氷剣…剣に氷を纏うだけなら大した問題はないが、相手の魔法を知らない。

ここは警戒しながらも冷静に戦う事だろう。

ソウマは気絶した拍子に手放してしまった盗賊たちの剣を適当な数を拾い上げ、それら全てに魔力を込めてから空中に投げる。

——魔法・ドラグーン——

空中に投げられた剣はソウマの近くの宙に浮き、その全ては銀色に輝き、粒子を纏っている。

そして、未だかつて無く見た事も聞いた事もない魔法を目の前で見

せられたゴードンの顔は青ざめていた。

「キ…なんだ、その魔法は!?!」

「さあな。ただ一つ言えるのは…これは龍の魔法って事だな」

「くっ! ならば死ねえ!」

ゴードンは自分の持つ剣を地面につけると、その場から氷の柱がソウマに向かって行く。

それに対し、ソウマはドラグーン（宙に浮かぶ複数の剣の総称）を自分の目前に集め、魔力を集束する。

——ドラグーン・エッジ——

集まったドラグーンはゴードンに向かって一直線に進み、その後ろにソウマも続く。

猛烈な速度で進むドラグーンの反対側には、氷の柱が向かい討つように発生する。

そして、ドラグーンと氷はぶつかり合い、激しい音を立てながら氷の破片が飛散した。

その氷の破片の中から一つの影がゴードンに向かって動き、剣先がゴードンの首に向かうが、それをギリギリで避けられる。

「クッ!」

ゴードンは奥歯を噛み締め、歯同士が擦れ合いギリツと音を立てる。目の前で剣を振るうのは大人に成りきれていないガキ…自分は価値ある剣のために多くの命を奪った実力者。

それなのに追い詰められているのは自分…認められない気持ちが冷静さを奪い、焦りを生む。

焦りは動きにブレが増えて無駄に体力を使い、余裕も無くなる。

既に戦いはゴードンの劣勢となっていた。

周りにいた盗賊たちもラウナと怒りのティアラにより、ほとんどが

戦闘不能となっている。

ゴードンを援護しようと、背後からソウマに切りかかる者もいたが、ドラグーンにより簡単に阻まれ、その戦いの勝敗はソウマとゴードンの勝敗と直結していた。

「くそガキがああ！」

ゴードンはその場で跳躍し、上空で氷を発生させる。

氷に全ての魔力を注ぎ、氷は見るみるうちに大きさを増し、氷は四方メートルほどまで巨大化した。

恐らく、これはゴードンの中で一番強い魔法……つまり、この攻撃こそが決着のとき。

そう判断したソウマは魔法・ドラグーンを解き、周りに浮かんでいた剣がランカランと地に落ちる。

ドラグーンは使うには魔力を拡散しなければならない……一撃に力を込める為には解く必要が在ったのだ。

ソウマは剣を一本だけ仕舞い、魔力を右手に持つ一本の剣に集中させる。

「死ねええ！」

全てを込めたゴードンの氷の塊がソウマに向かって落下する。

だが、ソウマに焦った様子は無い……少しだけ膝を曲げ、剣を氷の塊の向こう側にいるゴードンに向ける。

ソウマの背に刻まれた魔法陣が銀色の輝きを放ち、自身の身体が銀色に染まった。

そして……ソウマは神速を発動させた。

——蒼閃流・シン・鋭鋒——

瞬きをする間もなく、ソウマの持つ剣とゴードンの放つ氷の塊がぶ

っかり合う。

刀身は一直線に氷を貫き塊を破り、ソウマはゴードンの魔法を突破した。

だが、神速のスピードで氷の魔法とぶっかかり合った剣は強度上の問題、耐えきれなかった。

氷の塊を突破した時点で剣の刀身はバラバラになり、破片が空中から地面に向かって落下する。

それでも神速は緩まず、ソウマは右手の拳を握りしめた。

そして、二人が交差する瞬間…ソウマの右ストレートがゴードンの腹にめり込み、身体がくの字に折れる。

「ガハッ」

世界の常識を越えた速度で繰り出されたパンチは人間の耐えられる威力ではなかった。

ゴードンは口から血を吐き出し、直線的に身体が地面に叩きつけられる。

地面に倒れるゴードンは白目を向き、完全に気絶していた。

「ハアハア…」

ソウマも地面に着地し、気絶しているゴードンを見下ろしながら息を整える。

魔力を消費し過ぎた…魔力コントロールが上手く出来ていないからか、浪費している部分が多く効率が悪い。

体力も使い、これ以上は充分に戦える余力が残っていなかった。

周りを見渡すと既に立っている盗賊たちは居らず、ラウナたちも肩で息をしていた。

ソウマはゆっくりと近づき、話しかけた。

「大丈夫か？」

「ああ…問題ない。ティアラもだ」

ティアラも息を切らしてはいるが、見た所擦り傷以外は見当たらない。

「まさか…向こうから奇襲して来るとはな」

ラウナがぼそりと言った。

こちらが奇襲しようとして準備している時に家を潰される攻撃を受けたのだ。

作戦も何も有ったものじゃない。

「何にしろ、ゴードンは倒れたんだ…結果的オーライだよ」

肩を竦めながらソウマはそう言い、気絶しているマーサの様子を見に行った時だった…マーサの姿がどこにもない。

急いで周りを見渡すが見つからない。

一体どういう事だ…もし、途中で気がついて身を隠したとしても、既に戦闘は終わった。

出て来ても問題はないはず…ならばどこにいる？

「ここだよ、ソウマ」

「……え？」

不意に背後から聞き慣れた声が聞こえ振り向いた…その瞬間、ズドツと言う音と共に腹部を何かが通過した感触を感じた。

身体の熱が腹部に集中し、次第に激痛が身体中に広がる。

ソウマは刺されていた…背後にいたマーサが握る氷の剣によって。

「な…んで…」

「ソウマああ！」

ラウナがソウマの名前を叫びながら背後からマーサに切りかかる。だが、マーサは薄い笑みを浮かべながらラウナに手を翳す。

すると、ラウナの両手両足が凍りつき、そのままバランスを崩して倒れる。

その少し離れた場所には、同じように両手両足を凍り漬けにされたティアラの姿があった。

「ソウマ…久しぶりだね」

「久し…ぶりだ…と？」

ソウマの腹部からは既に氷の剣が抜かれている…が、そのせいで血液が外に流れだし、その場には血溜まりが広がっている。

地面に横たわり、焦点の定まらない目でマーサを見上げる。

すると、マーサの顔に亀裂が生じ、パリンツと剥がれ落ちた。

その中身は……

「…アヤ…セ！」

そう、幼なじみであり、この世界に来る時にはぐれてしまった橋本綾瀬だった。

冒険12―終わり、それは始まり（前書き）

1万アクセス突破！

皆さん、ありがとうございます！

これからも頑張っていくしますのでご愛読宜しくお願いします。

ご意見や感想など頂けたら幸いです。

冒険12―終わり、それは始まり

ソウマの表情は驚愕し、信じられないと言ったように不適な笑みを浮かべるアヤセを見上げていた。

なぜ、アヤセが？

マーサに変装していたのか？

ならば、なぜ？

疑問ばかりが頭に浮かぶ…だが、腹部から流れる血液が意識を朦朧とさせ、思考速度も落ちる。

その状態で考えていても答えが出るはずがなかった。

「久しぶり…ソウマ。会いたかったよ」

アヤセは噛み締めるように言葉を吐き出す。

久しぶり…そうは言っても、この世界に来てはぐれてから二週間程度しか経っていない。

それでも久しく感じてしまうのは、この世界でそれだけの出来事が有ったからだろう。

「アヤ…セ、なんで…」

「え？…ああ、刺したこと？」

ギリツと歯を食いしばり、アヤセを睨みつけるが、当の本人は全く相手にしない。

それどころか、刺したこと自体に悪びれた様子すらない。

これが幼なじみの橋本綾瀬か？……いいや、違う。

確かに、アヤセはマイペースだし人の気持ちなんてお構いなしに接して来る奴だ…けれど、人を刺して置いて平然として居られるほどイカれてもいないはずだ。

ソウマのように剣を持った事も無い上に人を叩いた事も無い…それなのに人を刺して気にした様子もない。

一体…この世界に来て何があつたんだ。

「これはね…私の使命なの。ホラ、見える？」

アヤセは含みある言い方をした後、しゃがみ込んで胸元を見せる。そこには……自分の背に刻まれている魔法陣と…同じものが刻まれていた。

ただ違うのは…

「青色の…魔法陣…！」

そう、アヤセの胸元に刻まれている魔法陣の色は『銀』ではなく、『青』だった。

この時、ソウマの脳は閃き、ある可能性を導き出す。

「まさか…アンタも、龍に…」

ソウマの見開かれた目と信じられないと言った物言いに、アヤセはなぜか嬉しそうにニヤリと笑う。

「そうなの！私はね、水龍セイレーンから神氷を受け継いだの！凄く強いんだよ！ソウマだってホラ！こんな簡単に倒せたもの！」

アヤセは心底嬉しそうに答える。

その声は踊り、表情は歓喜に染まり、瞳はうっとりとしていた。
凄く強い？

こんな簡単に倒せた？

……俺を…倒せてそんなに嬉しいのか？

ソウマは目の前の変わり果てたアヤセの姿を見る。

イカれてやる…

この状態は人間の、弱い立場にいる人間に良くあるものだ。

全ての人間は弱者であり、強者なんていない。

だから人間は助け合い、協力して生きている。

だが、それを理解出来ずに自分は弱いと考え込み、周りを強者として見てしまった者は常に脅えて過ごす。

そんな人間が、周りとは逸脱した『力』を得るとその『力』に吞まれてしまうのだ。

吞まれてしまうと、自分が優位に立っている事に快感を覚え、人を傷つける事を良い記憶としてしまう。

アヤセの状態は、その典型的な状態だった。

けれど、分からない事があった。

「使命って…何だよ…」

アヤセが零した言葉に『使命』と言うものがあつた。

それがソウマには引つかかっていたのだ。

アヤセはもともとが繊細な性格で、あまり心が強いわけでもなかった。

加えて異世界に来て一人になり、訳も分からないまま強大な力を得てしまい、その結果として力に吞まれた。

有り得ないわけでは無い。

だが…使命と言うのは何だ？

ソウマは神龍ラグナロクから『変革者』の使命を受けた。

それはアヤセも同じなのか、それとも違うのか…ソウマには全く分からなかったのだ。

「…私の使命はね、ソウマ。アナタを私の物にする事だよ」

「……！！」

自分が受けた使命とは全く違う…しかも、世界の流れとは全く関係の無い使命。

ソウマはこれ以上無いほどに混乱していた。

異界者は何か意味があって連れて来られたのではないのか？

それとも、アヤセが正気ではないだけなのか？

何が真実で…何が正しくて…自分たちは何なのか。

ソウマは分からなくなってしまった。

「フフ…苦しそうなその表情、堪んない…もっと見せて——」

「ふざけるなよ」

恍惚な表情を浮かべるアヤセに、ソウマの低い声が響いた。

消えかけていた灯火が再び燃え上がり、ソウマの瞳に強い光が帯びる。

負けられなかった…ましてや、自分の私利私欲のために働く人間になど。

ましてやそれが…小さい頃から一緒にいた幼なじみになんて。

屈するわけにはいかなかった。

「な…なにこれ…？」

先ほどまで死にかけた小動物のようだったソウマから、有り得ないほどの殺気とオーラが発しられる、その姿にアヤセは無意識に一步退いてしまう。

ソウマは奥歯をこれ以上ないほどに噛み締め、身体中に力を送る。両手を地面に付け、力を入れて身体を起こす。

腹部の傷からは激痛が走り、意識を失いそうになるが、気力で持ちこたえる。

足を立て、力の限りを尽くして膝を伸ばし……ソウマは立ち上がった。

その姿からは有り得ない気迫と殺気……それは幼なじみに向けられるものではない。

手負いの獅子がそれを向ける相手は……『敵』と判断した者にだけだ。

「アヤセええ!!」

ギンツとソウマの眼光が光り、背に刻まれた魔法陣が眩い銀色の輝きを放つ。

それに呼応してか、アヤセの胸元にある魔法陣も青空の光りを輝かせる。

「な、何なのこれえ!!」

アヤセは焦るように胸元を隠し、ソウマに視線を戻す。

銀色の粒子がソウマの身体に纏わり、発光するその姿からは、信じられないほどの魔力が放出され、それがどれほど危険かを物語っている。

小さい頃から常に一緒だった幼なじみが……あのクールであまり感情を露わにしなかった幼なじみが……己の感情を包み隠さず露わにしている。

けれど、その感情は……怒りと悲しみ。

向けられているのは自分…初めて自分に見せてくれた本当の気持ち
が怒りと悲しみ…望んでいたものは違った。

彼氏を作ったのも、その人が好きだからじゃなかった。

ソウマの気を惹くため、それが彼氏を作った理由だった。

いつもソウマを独り占めにしたかったし、他の誰かに渡すなんて我
慢ならなかった。

そのソウマが初めて感情を素直に表に出したのに、それが怒りと悲
しみだなんて…なぜ、彼は私の思い通りにならない。

ソウマは自分の心のままに魔力を放出し、何のコントロールも無し
に神速を発動した。

眩い光がその場を一瞬照らした後、ソウマは光の速度でアヤセに突
っ込んだ。

先ほどのゴードンに使った神速とは、まるで格が違うその速度で突
撃されたら、肉片すら残らない。

決着は一瞬だった。

光と化したソウマはアヤセの身体にぶつかり、貫通するように通り
過ぎた。

だが……

バリイインツとガラスを勢い良く割ったかのような音と共にアヤセ
の身体が碎けた。

その場には氷の破片が散らばる。

『……今日は…退いてあげる。でも、いつか必ず…アナタは手に入
れるから』

アヤセの空虚な声が響き、静寂が戻る。
一陣の冷たい風が通り過ぎ、枯れた木々が揺れ、ストラト山の石が
やけに冷たく感じた。

「ソウマ…」

ラウナの心配した声がソウマの背中に届く…が、ソウマは崩れるよ
うにその場に倒れた。

腹部からの出血が激しく、肌の色も青くなっている。

動いてはいけない状態にも関わらず、無理な力で立ち上がり、身体
への負担が多い神速まで使ったソウマの身体は限界だったのだ。

「ソウマ！」

ラウナの悲痛な叫ぶ声が聞こえる。

血液が外に流れるのと比例して身体からは力が抜け、意識が遠ざか
る。

死…ソウマの脳裏にその言葉が過ぎった。

異世界に勝手に連れて来られて強過ぎる力を与えられ…

ラウナの妹も助けられない上に幼なじみに殺される。

惨めな終わり方だ…

全て中途半端で終わるなんて…情けない…

ソウマは自分の命が消えるのを悟り、自分の人生の空虚さに怒りさ
え覚えた。

死にたくないな…

ソウマは遠退く意識の中、自分の名前を叫ぶラウナの声を聞きなが
ら…

そこで全ては途切れ、意識を失った。

意識は闇の中にいた。

誰もいない、何も聞こえない、何も見えない、何も匂わない…完全なる闇の中。

目を閉じているのか、それとも周りが真っ暗なのか…分からない。分かるのは、ここが闇の中と言う事だけ。

ああ…俺は死んだのか…

ソウマはそう悟った。

腹を刺されて大量の出血をしていたのにも関わらず、神速なんて使ってしまった…無理をし過ぎたのかもしれない。

まだ高校生なのに…まさか幼なじみに殺されるなんて…格好もつけられない死に方だ。

死んでしまったら人は天国か地獄に行く、と多くの人が言うが…どうやらそうでもないらしい。

もし、ここが死後の世界なら、人が死んだ後に向かう場所は『無』だ。

本当に何も無く、長時間いたら気が狂ってしまいそうになる。だが、死んでいるのなら…何も感じないのかもしれない。

暗黒の中、ソウマがそんな事を考えていると、闇の中に一つの光が上から舞い落ちる。

ユラユラと揺れながら光は足元に落ち、落ちた光は波紋のように広

がり、ソウマの目の前に居た『ある者』を照らした。

「……ラグナロク……」

波紋のように広がった光に照らされ、姿を現したのは銀色の神龍・ラグナロクだった。

光沢を帯びた龍鱗は光を反射し、闇の中にぼんやりと映し出されたように見える。

『——ソナタの物語りは終わりか？』

ラグナロクの高貴なものと言いと威厳のある声が響く。

物語り…そんなものは果たしてあったのだろうか。

見知らぬ女にアヤセと共に連れて来られ、拳げ句の果てにはアヤセに殺される。

それが物語り？冗談じゃない…それが自分の物語りだったら、誰でも嫌だろうし信じたくない。

「そう…だな。俺は死んだんだから…終わりだろ」

信じたくない…だが、殺されてしまったソウマにとっては既にどうでも良い事だ。

諦めたようにソウマは息を吐く。

こんな事なら、アヤセなんて助けようとせず、見捨てれば良かった。そうすれば今頃だって平凡な毎日を暮らしていたはずだろう。

『——使命はどうする——』

「さあな。死んだ後に聞かれてもな」

ソウマは自虐的に渴いた笑いを零す。

変革者の使命だが何だか知らないが、死んでしまったのなら意味は無い。

何も出来はしないのだから…

『ソナタは…生きたいか?』

「しつこいな…今更何を聞こうと意味無いだろ」

『…意味が有るか無いかではない。ソナタの気持ちを…願いを聞きたい—』

「知るかよ」

もう話は終わりだと言わんばかりに、ソウマは顔を背ける。

だが、ラグナロクは退かない。

首を下げてソウマに近づけ、銀色に輝く眼光を向ける。

『—今一度聞く…生きたいか?それとも—』

「生きたいに決まってんだろ!」

ラグナロクの眼光に怯みもせずにそう叫んだ。

出会った頃は脅えるだけの人間が、今では龍に向かって怒鳴るように叫ぶ事が出来る。

少ない戦いの中で、成長したのは戦闘能力だけではなく、心までも強くしていたのだ。

ラグナロクを睨み返すソウマの瞳は銀色の眼光宿り、背の魔法陣が淡い光を放つ。

その姿はまるで…龍の子のよう。

「ラウナとの約束も、ラグナロクからの使命も!何も果たせずに死ぬなんて出来るか!生きて…俺の物語りを続けたいさ!だけど…」

『—続けたいんだな—』

己の気持ちをぶつけるソウマに、ラグナロクは希望の光を導く。

『ソナタの物語りは…まだ終わりではない。これから始まるのだ—』

ラグナロクが言い終えた瞬間、二人だけを照らしていた光が眩く全てを照らす。

『目覚めるが良い。ソウマよ—』
「どういう…」

ラグナロクの言っている事の意味が分からないソウマは、怪訝そうにラグナロクを見上げる。

『伝説の遺跡都市・エターナルを目指せ！そこで…全てが明かされる—』

視界は次第に白に染まり始め、時間が経つに連れてラグナロクの姿も見えなくなっていく。

『—そこで我も…ソナタを待つ—』
「ちょ…待つ——」

声も一瞬で遮断されたように消え去り、視界も一気に真っ白に変わる。

意識は遠退き、前と同じような感覚を感じる事に、少なからず嫌な気持ち覚える。

そして…白い光景の世界からはシャットダウンされ、心だけのソウマは消えてしまった。

「……………生きてる…」

ソウマは闇の中から現実の世界に戻り、ゆっくりと目を開けた。木製の天井に白いベッド、独特な薬品の刺激臭が鼻を刺激する。病院…？匂いは完全に病院だが、日本のように白ばかりではなく、普通に木製素材そのままの色もある。

ゆっくりと身体を起こすが、腹部に激痛が走り、思わず奥歯を噛み締めて傷口を押さえた。

上半身は服を着ておらず、包帯が腹部に何重にも巻かれてあるだけだ。

自分が生きている事に疑問を抱いていると、少し離れた場所に取り付けられている扉が開き、ラウナが入って来た。

その後ろにはティアラが並んでいる。

「…ソ…ソウマ！」

意識を取り戻したソウマの姿を見たラウナは瞳に涙を溜めながら駆け出す。

そして、重傷患者であるにも関わらずに抱きついた。

もちろん、重傷患者が抱きつかれたら勢いと相応の激痛を食らうことになる。

いくら相手が女性とは言えど、我慢出来る痛みではない。

「いつ…痛ええええ！！！」

ソウマの涙混じりの声が病院内に響いた。

いつものソウマなら抱きつかれた事に意識が集中し、羞恥に悶えるかもしれないが…

身体に走った激痛は、そんな事は気にならないほどのものだった。

「あ…ああ！済まない！」

ソウマの痛みを叫ぶ声で自分の行動に気づき、ラウナはバツと離れて近くの椅子に座る。

ティアラは腕を組み、壁に寄りかかりながら冷静に状況を見ていた。まさかラウナが抱きついて来るとは…思ってもいなかった。

ラウナは他人にも自分にも厳格だし、気の強い性格だ…その人がソウマの生還に涙を流して喜んでいる。

ソウマにとっては心配してくれた喜びと、どう対応すれば良いか分からない戸惑いが入り混じっていた。

「良かった…！生きてて…本当に…」

「…………悪かった…」

再び喜びに涙を流しそうになるラウナに向かって、ソウマはそう呟いた。

危うく全て中途半端のまま投げだす所だった。

生きていたから良かったものを…いや、実際は一度死んだのかも知れない。

どちらかは分からないが、ラグナロクが動いてくれたのだろう。

そうでなければ…先ほどの光景に説明がつかない。

何も出来なかったソウマは謝る事しか出来ず…呟くようにそう言っ
てしまったのだ。

「なぜ謝る！」

だが、ラウナはその謝罪に立ち上がり、真っ直ぐにソウマの目を見て強い口調で言った。

「お前は私たちを助けたも同然だ！何も出来なかったのは…むしろ私だ…」

「そんな事——」

「あの女に指一本触れられなかった…だがお前は奴を退けた！私は…お前に救われたんだ…だから謝るな、頼む…」

「……………」

違う、アヤセは俺が居たから襲って来た…俺のせいでみんなを危険な目に合わせたんだ！……そう言いたかった。

だが、ラウナの消えてしまいうさな、今まで強気だったラウナからは聞いた事も無いほど…か細い声に何も言えなくなってしまった。

ごめん…そう言おうと思っていたのに口から出た言葉は…

「ありがとう」

ありがとう、だった。

泣いてくれたから？

心配してくれたから？

分らない…なぜお礼の言葉を口にしたのか。

けれど、ソウマの言葉を聞いたラウナは満足そうに頷き、その表情は笑顔だった。

「はいはい、円満夫婦は分かったから次に進みてえんだが…」

端から見れば仲の良い恋人同士のような空気に耐えかねたティアラが、会話に入って来た。

ティアラは呆れたと言わんばかりに、溜め息を一つ吐き、自分が背負っていた何かが巻かれた布をソウマに差し出す。

それは見覚えのある布…確か、ティアラが造った最高傑作の巻かれた布だ。

「…これは？」

「約束だろ？ゴードン倒したら剣を譲るってな」

ゴードンを倒したら剣を幾つか譲って貰いたい…確かにソウマはそう言った。

だが、最高傑作なんて貰えるはずがない。

職人にとって最高の作品はその人の魂と言っても過言ではない…命とも言える。

幾ら何でも「はい、どうも」と貰える物で在るはずがない。

「幾ら何でも…これは…」

「他の剣は生憎潰されちまってな。これしか残ってないんだ。それに……お前ほどの奴ならアタシの魂も預けられる」

「……………分かった」

ティアラは真剣な眼差しでソウマに剣を渡す。

その目が真剣過ぎて……これ以上まごつくのは逆に失礼だと感じた。自分になら魂を預けられる、それは自分の戦う姿を見て信用してくれたと言う意味だ。

それなら、ティアラの信用に応えるのが義務……責任だろう。

ソウマは差し出された七本の剣を受け取る。

「……有り難く頂戴する。剣に恥じないよう……俺も全てをかけるよ」
「頑張りな。おーい、先生！患者が意識取り戻したぜー！」

剣を譲り終えたティアラは大きな声で病院の医師を呼んだ。

普通は一番最初に呼ぶべきだろ……そう呆れながらも色々と咎める気力も無く、小さな溜め息だけを一つ吐いた。

その一週間後、なぜか重傷患者だったはずのソウマは退院した。腹部の深い刺し傷は完全に塞がり、痛みも完全に消えている。

この世界の医療技術は、特殊な魔法である回復魔法を使うものだった。

5属性全てに回復系統の魔法はあるらしいが、それぞれによって効力が違う。

例えば火属性の回復魔法は体力回復に秀でていて、水属性は傷の回復に…と言ったようになっていてる。

だが、生死をさまよった患者が一週間で退院出来る筈がない…担当医が言うには背中魔法陣から滲み出る魔力により、自然治癒をしているのだと言っていた。

いよいよ自分が人間かどうか分からなくなるな…と少しながらショックを受けたソウマだったが、早く治った事は良いことだな…と気にしない事にした。

二人は一度宿に戻り、荷物を整理した後、街へと繰り出した。

このまま食料を調達した後、ストラト都市を出発しようと言っ考えた。

「何だこれ？」

「それはな、レムニールの霜降り肉だ。だが高いから却下だ」

見た事もない食材を前に、ソウマが質問する。

全く違う食の文化に最初は戸惑っててもいたが、今では興味すら沸くようになった。

こちらの世界に慣れて来た様子のソウマの姿がラウナも嬉しいように、質問に答えるラウナはお姉さんのように誇らし気だ。

その後もソウマが興味深い食材を見つけては質問し、それにラウナが得意気に答えるやり取りがしばらく続いた。

「そろそろ出発しよう」

保存の効く食材を一通り集め終わった頃にラウナがそう提案した。食材確保も朝早くに行ったため、出発するにも良い時間だ。

二人は朝早いにも関わらず、賑やかな街並みの中を並んで歩く。腹部の傷もほとんど回復し、つい先日死にかけていたのが嘘のように思える。

長閑な街に隣には少々キツイ性格だが美しい女性…戦いなど無ければ幸せな生活だろう。

戦いさえなければ、こちらで生きて行っても良いかもしれない。

……そう考えて直ぐに首を横に振る。

何を馬鹿な事を考えているんだ…日本には友達も家族もいる。

自分を心配してくれている人達を残して、自分だけ好き勝手に生きるなんて…そんな事は出来ない。

それに、やる事など沢山ある。

ラウナの妹は助けなければならぬし日本に帰る方法も探さなければならぬ。

加えて……なぜアヤセが自分を殺そうとしたのか、使命とは一体何なのか。

自分たちを連れて来た白いフードの女は何者なのか…分からない事

は山ほどある。

「…ソウマ？大丈夫か？」

ラウナが心配そうな表情でソウマの俯き気味だった顔を覗き込む。
白く透き通った肌に赤く潤った唇、コバルトブルーに染まった瞳に
吸い込まれそうになる。

「な！なんだよ！」

特別な感情がある訳ではないが、美女がいきなり眼前に現れれば誰
だって胸が高鳴るし、顔も赤くなる。

普段はクールなソウマも、異性関係には疎いからか、例に準えて頬
を赤く染めながら一歩だけ後退った。

「なぜ逃げる！私は…何か考え込んでいたから…心配になっただけ
だ…」

最初のラウナはキツと目つきが鋭くなったが、言葉を続けるに連れ
て言葉は小さくなり、視線は斜め下へと逃げてしまった。

そんなラウナの姿にソウマは少しながらむず痒い感情を覚える。

その感情がいつものラウナではない事への戸惑いなのか、はたまた
別なのか…今のソウマには分からなかった。

気まずい空気が流れ、二人の足音と周りの喧騒だけが耳を支配する。
そんな時だった。

「二人ともー！早くしろおー！」

ストラト都市の出入り門が見えて来た頃、門の近くでこちらに手を
振りながら大声で叫ぶ人影が一つ…ティアラだった。

どうやら見送りに来てくれたようだ…なぜ急かされなくてはいけないのかは不明だが。

「久しぶりだな、ティアラ」

「昨日会っただろうが！」

ソウマの冗談にティアラが本気でツッコむ。

冗談なのに…通じない奴だ。

ティアラの知り合い、マーサは実際は普通に暮らしていたらしい。つまり、途中で入れ替わったとかではなく、接触して来た時点でアヤセだったのだ。

アヤセはマーサに変装し、ティアラの元までソウマたちを誘導…ゴードンたちがこちらの奇襲を予測していたように攻撃して来たのは、アヤセの企みかもしれない。

ゴードンとアヤセ…繋がっていた可能性が高いのだ。

家を壊されたティアラは、ストラト都市にある本当の『自分の家』に住んでいる。

ストラト山にあった家は剣を造るための家らしく、剣製造の期間以外はストラト都市にある普通の家にいるらしい。

「食いもんは集まったか？」

「問題ないさ」

「見れば分かるだろ？」

ソウマが引いている車輪付きの台の上には大きめの布袋が乗っている。

その中に食料を入れ、台に乗せて引く事で普通に背負うよりか楽に運べるのだ。

「……頑張れよ、二人共。近くに來たら寄れよな」

「ああ。ありがとな」

「礼を言うぞ」

お互いに堅く握手を交わし、門番にラウナが通行書を見せると重苦しい門がゆっくりと開いた。

「じゃ、またな」

「おう！……つとラウナ！」

ソウマは一声かけて門の外へと歩き出す。

それに続こうとしたラウナを、ティアラが呼び止める。

ティアラは早足で近寄り、口をラウナの耳元に寄せて小さい声で言った。

「……式には呼べよ」

「っ！」

ニシシとティアラが意地悪そうに笑い、ラウナは顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。

「な！なにを言う／＼／私は別に——」

「ラウナー！置いてくぞー」

「い、今行く！」

反論しようと言葉を発したラウナだったが、既に先に進んでいるソウマの呼びかけに阻まれる。

ラウナは頬を赤く染めながら悔しそうに睨むが、怖くも何とも無く、ティアラの表情はニヤニヤと嫌らしい笑みだ。

本当に置いて行かれそうになるので、ラウナは反論を諦めて踵を返して走り出した。

その後ろ姿にティアラは優しい眼差しを送りながら呟く。

「頑張れよ、ラウナ」

ティアラの呟きは誰にも聞かれる事無く、静かに風に紛れて消えてしまった。

冒険14―幻影の森

「それで、次はどこに向かうんだ？」

「ダーラル国だ。ティアラが言うには…そこに『ゼア』と言う男の研究者が居るらしい。医療にも詳しいようだから可能性はある」

ラウナが地図を広げてダーラル国の地を指差す。

ダーラル国はストラト都市から西に位置している。

小さな街が集まって出来た国だが、国土争いなどは無く比較的に穏やかな国らしい。

「ダーラル国に行く間には…『幻影の森』があるから気をつけろ」

幻影の森…万年、濃い霧がかかっていて常に薄暗い広大な森で、強い魔物も多い。

中でも、森の支配者として君臨する『ダキユラ』たちは森に迷った人間や魔族を襲うらしい。

ダキユラは魔族の中でも上位のクラスで魔力も高い。

基本的には団体で行動する事はなく、群れない…貴重な闇属性の魔法を使える種族だ。

エンジェルであるラウナも上位クラスだが、魔力は人それぞれ、向き不向きがある。

ラウナは魔法に向いていないのだ。

「はぐれたら終わりだと思え」

「分かった…が、別に森を通らなくても良いんじゃないか？」

そう言っただけでソウマは地図を覗く。

地図を見る限りでは遠回りすれば幻影の森を避けられる。

危険度が高いなら避けるのも一つの手段だ。

だが、ラウナは難しい表情で地図に目を落としながら反論した。

「遠回りは…出来なくはないが、周りは険しい山々ばかりだ。時間のロスが計り知れない」

ラウナが言うには、遠回りすると険しい山々を越えなければならぬ上に距離も長い、少なくとも一週間はかかる。

だが、幻影の森を通れば数日でダーラル国に辿り着く、上手く突破すればの話だが…

それでも、ソウマよりラウナの方が地理には圧倒的に詳しい。

世界についても博識なラウナが幻影の森を通った方が良いと判断したのだ、それならラウナを信じた方が良さそうだ。

「なるほどな…それなら予定に変更はいらないな」

ソウマは納得したように何回か頷き、ラウナから視線を外して前を向く。

その横顔をラウナは感づかれないように横目で見ていた。

彼の幼なじみ…アヤセとは一体何者なのだろうか。

自分やティアラを一瞬にして氷で封じ込める魔力…そして彼女の胸元にはソウマと同じ魔法陣が刻まれていた。

そこから考えられるのは…アヤセも龍から力を受け継いでいると言う事だ。

ソウマがアヤセを退けた後、必死で火の魔法を使って氷を溶かし、ソウマを助けはしたが…普通の氷魔法とは比べられないほどに溶か

すまで時間がかかった。

あの時、もつと魔力の籠もった氷で封じられていたら、ソウマの命は間に合わなかったかもしれない。

だが、それより分らないのは…なぜ幼なじみであるソウマを殺そうとしたのである。

最初に出会った時、ソウマから聞いた話ではそこまで仲が悪い訳ではなかったらしい。

ソウマ自身も、彼女を助けようとして巻き込まれ、こちらの世界に来たと言っている。

殺したいほどの殺意を抱くほど、ソウマが悪い人間にも見えない。むしろ…冷静だが誠実で、心の優しい良き青年としか思えない。ならば…なぜ…？

「どうした？」

ソウマがラウナの視線に気づき、心配そうに問う。

「な、なんでもない…気にするな！」

ラウナは慌てて目線を逸らし、感づかれないように、そっぽを向く。今は考えても分らない…ソウマは何か気づいているのかもしれないが、こちらから聞く訳にもいかない。

ソウマから話してくれるのを待つべきだろう。

そして、自分を頼ってくれる時が来たら…心の底から支えになるのが役目だ。

密かに、そう決心して思考をストップさせる。

二人は幻影の森に向かって歩みを進め、着々と目的地への距離を縮めて行った。

幻影の森への入り口が見えて来た頃、周りは既に霧が包んでいて、視界を遮っていた。

森からは満ち満ちた魔力が外に漏れだし、それだけで中の危険度が分かる。

ソウマの第六感が「ここは危険」と仕切りに告げるが、今更ルート変更する訳には行かない。

今から遠回りすれば一週間より更に時間がかかる上に、危険だからと逃げ回っていたら何も始まらない。

ソウマ自身も少しずつだが戦いに慣れ、危険への対処の仕方覚え来ている。

加えて背中にはティアラの最高傑作である七本の剣がある。油断をせずに進めば何とかなるだろう。

「ソウマ…ここからが幻影の森だ」

幻影の森の入り口に立ち、ラウナがわざわざ説明するように言う。その言葉には「気を引き締めろ」と言うメッセージも含まれているのだろう。

「分かってる…行くぞ」

ソウマは表情をキツくして森への一步を踏み出す。

瞬間、ゾワツと背筋に寒気が走り、魔力の高さに冷たさに驚く。魔力には容量と純度があり、容量とは魔力の大きさ、純度とは魔力に宿った心のこと。

例で言う、100パーセントの憎しみで魔力を使えば、それは相当の純度の高さになる。

つまり、混じり気の無い気持ちで使った魔力は容量以上に強い事がある、と言う事だ。（ゴードンの魔法を破ったのも純度によるもの）そして、負の感情が籠もった魔力は冷たさや恐さを感じさせる事がある。

森に入った瞬間、それを感じたと言うのは、負の感情による純度が高いため…強い魔力の持ち主がいる、と言う事だ。

二人は幻影の森、ダキュラの支配する魔物の巣窟へと足を踏み入れ、歩を進めた。

「凄い霧だな…」

常に霧に包まれているとは言っていたが、まさか数メートル先が見えないほどとは思ってもいなかった。

森の先なんて白い霧に遮られ、太陽の光が遮られているからか薄暗い。

きつと、少しでも二人の距離が離れたりすれば、別々にはぐれてしまい、二度と森から出る事は無いだろう。

「も、もつと近寄れ、ソウマ。でででないと迷ってしまうぞ!」

「顔真つ赤にしながら何を言ってるんだか…少し咬んでるし」

はぐれるのを防止するために言ったのだろうが、ラウナの顔は真つ赤に染まり、表情は強張っている。

何をそんなに緊張しているんだか…とソウマは少々呆れながらも、はぐれるのは困るのでラウナに近寄り、隣に移動する。

だが、近寄れと言った当のラウナは、肩が触れそうになるほど近くに來たソウマを意識して固まってしまう。

ソウマは気づいていないが、ラウナがソウマを意識しているのは明らかだった。

「そそそソウマ…やっぱり離れて——」

「っ!ラウナ、隠れるぞ!」

あまりの恥ずかしさに耐えかねたラウナが、やはり離れて貰おうと言葉を続けようとした時だった。

ソウマが何かに気づき、ラウナの手を引いて近くにあった大木の影に隠れる。

本来なら気配に感づく程度、ラウナが気付かないはずがない。

だが、ソウマが近くにいると言う事実冷静さを失い、注意力が散漫になっていたのだ。

ラウナは大木の影から顔の半分を出し、ソウマの見つめる視線を追う。

すると、そこには上まで伸びる木と同じ太さで、体長が10メートルほどの紫色の大蛇が何かを探していた。それを見たラウナは息を呑む。

「デビルスネーク…だと？」

「知ってるのか？」

「スネークの中では一番強い奴だ。猛毒を持っていて毒に当たれば即死だ」

ラウナの額を一つの冷や汗が伝う。

毒に当たれば即死だと？どう考えても反則だろう。

ましてやアナコンダより大きいデビルスネークとやらの巻きつかれでも危険…いや死ぬだろう。

出来れば戦闘は避けたい。

デビルスネークは今だにキョロキョロと頭を左右に動かしながら何かを探している。

「ラウナ…どうする？」

「…このままやり過ごすしかない」

残念ながら逃げるという手段は無いらしい…まあ、この霧の中で逃げ回ったらお互いはくれる可能性が高い。

相手が大人しくこの場を後にしてくれるのを待つのが一番なのだろう。

だが、世の中は上手く行かないのが常で、どうやら神様は二人が嫌いらしい。

デビルスネークはピクンツと何かを察知したかのように二人が隠れている大木に顔を向ける。

二人に緊張が走る…と、そこでソウマはある事を思いだした。

デビルスネークは見る限り蛇だ…大きさは異常だが、見た目はどう見ても蛇で間違いない。

そして、蛇は目が悪く、その代わりに周りの熱を感知して獲物を襲う。

蛇が舌をペロペロと出すのは、舌が熱探知機の役割を担っているからだ。

もし、こちらの世界でのデビルスネークが地球での蛇の生態が通じるのであれば…

「隠れても無駄じゃね？」

ソウマがそう言った瞬間、デビルスネークの目は血走り、クパアと開いた口から紫色の液体が二人の隠れる大木にかかった。

毒に当たった大木は相当な太さであるにも関わらず、ジュワアと聞きたくない音を経てながら溶解してしまい、二人の姿が露わになった。

「倒すぞ！ソウマ！」

「蛇は嫌いなんだがな…」

ラウナは剣を抜き、戦闘大勢に入る。

その横では同じく剣を抜くが、明らかに険悪感を隠さずに露わとするソウマが、呟いた。

「キシヤアアア！」

デビルスネークは威嚇の声と共に二人に向かって突進して行く。

そのスピードは蛇とは似ても似つかないほどに速い。

二人は左右に別れて突進を避け、ソウマは左右両手に持っている日

本刀の剣先を大蛇に向ける。

「初振りだな」

ティアラの造った最高傑作の中に、二本…日本刀があった。

それぞれの日本刀の刀身の腹には『天』と『地』と言う、この刀の名を表す文字が彫られている。

ソウマはもともとが日本の流派だからこそ、日本刀はどんな剣よりも手に馴染み、信用出来た。

加えてティアラの造った日本刀『椿』の出来は感服するほどで、ソウマはこれまでに無いほど負ける気がしなかった。

「ソウマ！何を突っ立っている！そっちに行ったぞ！」

ラウナの声が森に響くのと同時に、デビルスネークは大きな口を広げてソウマに向かっていた。

だが、そんな事はラウナに言われる前に気づいている。

剣士と言うのは刀が変わるだけで剣の振りの速さ、強さ、切れ味と全てが変わるのだ。

日本で剣を学び、日本の流派を使うのに西洋の剣で戦っていたソウマの力は半分も使えていなかった。

故に日本刀を握ったソウマは…

大蛇に向ける剣先がユラリと揺れ、刀の刀身はデビルスネークの口から尻尾までを一気に切り裂く。

——蒼閃流・燕雀——

そう、日本刀を握ったソウマの強さは格が違った。

「…まさか…一撃…」

ラウナは啞然と真つ二つになったデビルスネークの姿を見ながら咳く。

ソウマはそんなラウナを尻目に刀を鞘にしまい、食料袋の乗る台車の紐を持つ。

「ラウナ、どうした？」

「…いつの間にそんなに強くなった？」

不思議そうにラウナが聞く。

いつの間に…と言われても、もともと剣は習っていたし、こちらの世界に来てから戦闘も経験した。

実戦に勝る訓練はないと言われるように、ソウマは実戦の中で成長していたのだ。

「さあな。とりあえず…この場から離れよう」

「…そうだな」

あまり大蛇の死体を見るのは良い気分ではないし、血の匂いで魔物が集まって来てこられても困る。

早急に場所を移動するのが得策と言う事で、二人は休む間も無く歩きだした。

冒険15―本当の気持ち

陽も落ちて来た頃…と言っても濃い霧に覆われ、また木々にも覆われた幻影の森にいる二人には分からないが…

「そろそろ陽が落ちるな…ここで野宿にしよう」

「なんで陽が落ちるなんて分かるんだよ…」

ソウマは視線を空に向けるが、霧と木々が邪魔していて全く太陽は見えない。

首を傾げ、んーと悩むソウマに向かって、ラウナは当たり前のように言う。

「辺りが暗いからな。それに、気温も下がって来てる」

「よく分かるな…そんなこと」

ソウマは時計と言う物に頼って来たため、環境に置ける時間を知る方法が分からない。

太陽の位置でだいたい時間なら分かるが、今は肝心の太陽が見えない…ラウナに頼るしかなかった。

ラウナが野宿を決めた場所は湖の近くだった。

この湖は『聖水』と呼ばれる聖なる水のみで出来たものらしい。

聖水は邪悪な意志を取り払ったり、身体の傷を癒やしたりなどが出

来る、貴重な水。

幻影の森は危険なため、人が寄り付く事が少ない事から、聖水が湖として大量に残っていると云う。

聖水の湖の近くなら襲われる事がなく、森の中で最も安全のようだ。

「ソウマ、済まないが…薪を拾って来てくれないか？あまり遠くまでは危険だから…近場で良い」

「了解」

ラウナの頼みなら断る理由はない、そう考えてソウマは二つ返事で薪拾いに向かう。

湖の周りは茂みなどで覆われ、離れた所からでは確認出来ない。

ラウナが見つける事が出来たのは、任務で何回か来た事があるかららしい。

ソウマは適当に歩き、落ちている薪を拾いながら、異世界に来た時の事を考える。

あの時…アヤセを連れて行こうとしたのは見知らぬ女、白魔道士のような服装をしていた。

そして「見つけた、救いの女神」と言った…それはどう言う意味なのだろうか。

言葉の意味をそのまま考えると…アヤセはこの世界を何らかの形で救う存在になるはずだ。

だが、アヤセの姿を思い出す限りでは有り得ない…力に吞まれた者の末路は決まっているのだから。

加えて、この世界についても、これと言った大きな問題は起きていない。

それなら…あの言葉は何を意味するのだろうか…

「おっと…こんな集めなくても良いか」

考え事をしながら集めていたため、いつの間にか相当な量の薪を抱えていた。
どうしようかと悩んだ挙げ句、念のために多めに持って行く事に決定する。

アヤセの事は考えてもしようがない、旅を進めて行けば…自分の物語りを進めて行けば答えはいずれ出るだろう。
それがパンドラかどうかは、今は考えないようにしよう。

ソウマは考えるのを止めて歩調を速める。
そして、茂みを駆け分けながら湖の付近へと戻った。

「薪集めたぞ……っっていない」

さっきまでいたはずのラウナの姿は見えず、荷物だけは置いてある。
どこへ行ったのだろうか…まさか誘拐？

そう考えて、直ぐに首を横に振る。

ラウナは誘拐されるなんてヘマはしない…ソーマルイ国軍隊長の肩書きは伊達ではないのだ。

「とりあえず…探すか」

集めた薪をその場に置き、湖の付近周りをゆっくりと歩きながら周りを見渡す。

もしかしたら聖水の湖に居るのかもしれない…と、茂みの中を進む。
小さな葉っぱがくすぐったい感触を肌に与えるのを我慢し、少し進むと湖が見えて来た。

「……なっ／＼／」

湖を見た瞬間、ソウマは言葉を失った。

正しく言えば「湖」を見たのではなく……そのキラキラと光る聖水の湖で水浴びをする「ラウナ」を見たのだ。

水に濡れた髪の手先から雫が滴り、いつものラウナより大人っぽさが増している。

隠すものが消え、露わになった胸の膨らみは綺麗な形で、腰のくびれはまるでモデルのよう……

長い手足は異様にセクシーで思わず生唾を飲んでしまう。

一切の布を纏わず、生まれた時の姿で水浴びをするラウナは、まるで天使のように綺麗で……聖水の輝きも重なって、それは一つの芸術とも言えるほどだった。

思わず見とれている事に気づいてソウマはハツとする。

何を見ているんだ……ラウナが……女性の裸の姿に見とれているなんて変態ではないか。

軽く自己嫌悪に陥りながら、ラウナの水浴び姿は見なかった事にしてその場を後にしようとするのを向いた時だった。

流石のソウマと言えど、女性の裸体を見て冷静でいられるほど大人でもない。

寧ろ、初めて見たものでもあったからか、自分の行動への注意を怠っていたのだ。

ソウマは後ろを向く際に、茂みのガサガサと言う音を経て、足元にあった枝をバキバキと踏んでしまった。

もちろん、ラウナがそれに気づかないはずがなかった。

「誰だ」

ミスった……！とソウマは心の中で絶叫する。

ここで正直に出て行くべきか、はたまた逃げるべきか悩んでいると、ラウナが湖から揚がって剣を持った。

そして、ゆつくりとソウマの隠れる茂みへと向かって行く…裸体のまま。

殺される！とラウナから溢れる殺気から感じ、瞬時に正直に出て行く事に決めた。

切られる前にバツと飛び出し、そのまま土下座の体勢で着地する。

「悪い！覗くつもりはなかった！俺はラウナが心配で探していたら偶々…」

「……………」

額を地面に擦り付けて、精一杯の誠意で謝る。

だが、頭上からは何の言葉も降って来ない。

恐る恐る顔を上げると……顔を真っ赤にしながら怒りにプルプルと震えるラウナの姿があった。

「だったら！早く向こうへ行けー！」

「ぐはぁ！」

ラウナの強力な右ストレートがソウマの顔面を捉え、ソウマの身体は綺麗なアーチを描きながら地面に落ちた。

激しい顔の痛みと共に、ソウマの意識は彼方へと飛び、ソウマの身体からはガクリツと力が抜けた。

「ごめんなさい」

拾って来た薪に、ラウナの魔法で火を点けたその光で照らされるソウマの顔は、頬が腫れ上がっている。

口の中が切れていて唾液が染みる。明らかに悪いのはソウマなので、文句も言えずに小さく体育座りをしていた。

充分に反省はしているのだが、ラウナの怒りは収まらないようで、今だにソウマに向かって説教をしている。

「荷物が置いてあるんだから無事に決まっているだろう！だいたい、私だって女だぞ！確かに口調は男勝りで性格だって嚴格かつキツイかもしれないが、それでも私は胸も80センチ以上ある！ウエストだって細いつもりだし、確かに尻は小さいが、だが私は紛れもない女なんだぞ！一緒に旅をしているから多少はしょうがないと目を瞑る事も出来るが、いくら何でも裸体を見られて許せるか！誰にも見せた事がなかったのに！しかも隠れて見ていたなんて言語道断だ！ソウマの事は誠実で良き青年だと思っていのに！やっぱり男と言うのは誰もがそう言った疾しい事しか考えていないのだな！」

さっきから延々とこの調子で話しているのだ。
いくら何でも、こんなマシングントークを長時間に渡って聞かされ

ている身としては耳に胼胝が出来そうになる。
相当に水浴びを覗かれた事に「立腹のようだ」
確かに自分が悪いのは自覚しているが、ここまで追い詰められると精神的に落ち込みそうになってしまう。

「だからさ…偶々だって説教したろ？だいたい、水浴びするなら一言言っけて置いてくれよ。俺は心配したんだからさ」

「そ、それは悪かったが…私は裸を見られたんだぞ！」

「だから悪かったって」

一向に進まない話に、ソウマは空腹に耐えきれなくなって、買いだめして置いた食料から木の実を取り出し、一口かじる。
何を言っても許してはくれなさそうなので、ここで話は止めにした方が良さそうだ。

「何を勝手に——」

ラウナが咎めるように言葉を続けようと時、ラウナのお腹からは、ぐうぐうと言う空腹を伝える音が聞こえた。

「……………」

「……………」

場を沈黙が支配する。

触れるべきか、それとも気にしないで話を続けるべきか…気まずい雰囲気にも包まれる中、ラウナの顔は見るうちに紅潮して行く。
ラウナは恥ずかしさに耐えきれないと言ったように俯き、静かに座り込んでしまう。

「……とりあえず食べようか」

「…うん」

なぜか口調が少し可愛くなっている。

相当に恥ずかしかったのだろう…顔からは湯気が出そうな勢いだ。ラウナはリンゴのような木の実をシャリシャリと、大人しく食べている。

さっきまでの勢いはどこへ行ったのやら…そう思えるほど静かになっってしまった。

そして、静かになった事でようやく、まともに話ができる。

「……悪かったな。悪気がなかったとは言え…見た事には変わりない。本当に悪かった」

ソウマ自身、自分が悪い事も自覚しているし反省もしていた。

だが、ラウナがあまりにも凄い勢いでまくし立てたため、真面目に謝るタイミングを逃してしまっていたのだ。

だからこそ、ソウマは静かになった今、心の底から謝った。

「…私も悪かったよ…最初に言っておくべきだった。お互い様だな」

落ち着いたラウナはいつも通りに戻り、お互いは優しい雰囲気になりました。

完全に陽が落ちたため、ソウマにも見て分かるほどに辺りは暗くなっている。

ゆらゆらと揺れる炎に照らされ、二人の影が揺れた。

「……私はな…レイナの事がそれほど好きではないんだ」

暫くの間、お互い沈黙に包まれていたが、唐突にラウナがそう言った。

いきなり何を言うんだ？と、一瞬思ったが、話を切り出したラウナ

の表情があまりにも真剣だったため、こちらでも本気で聞く事にする。

「どういう事だ？」

「前に話したが…私は正妻との子ではない。そのせいで蔑まされる事も少なくはなかったんだ」

その話は出会って間もない時に聞いた話だ。

妹であるレイナは正妻の子で、姉のラウナは違う。

一般家庭にはあまり見られない、なかなか重い家族関係にあると言える。

ラウナは静かに続ける。

なに不自由無く暮らすレイナとは違い、周りからラウナへの扱いは酷いものだった。

幼かったラウナは、妹であるレイナへの憎しみを膨らます…それでも半分だけでも血が繋がっている妹を傷つけるのは、自分のプライドが許さなかった。

そして、憎しみを誤魔化すように軍に入隊し、自分を必死に鍛え上げ…遂には軍隊長にまで登り詰めたのだ。

「今でもレイナへの憎しみは消えない…助けようとしている者を憎むなんて…可笑しな話さ」

「……ラウナ…」

きつと、誰にも言う事の出来なかった本当の気持ちなのだろう。

真剣だが、妹を憎んでしまう自分に絶望し、落ち込む表情をしているラウナを見れば直ぐに分かった。

今までずっと苦しみ、その苦しみや憎しみをぶつける先が無かった…良く今まで耐えて来れたと思う。

妹が好きではない…そうラウナは言うが、本当に嫌いだったら世界

中を旅で周り、原因を探そうとは思わない。

ラウナは自分で気づいてはいないが、心の奥底では妹のレイナが大好きなのだ。

ただ、不器用なラウナにはそれが分からないだけ…ラウナはこれ以上無いほどに優しい『姉』だった。

「嫌な女だな…私は。今の話は忘れてくれ…済まなかった」

「……………そんな事ないさ」

「え？」

「憎しみなんて誰でも持っているし、ましてや複雑な家庭だ…にも関わらず、妹のために命を懸けて旅をしているラウナは嫌な女なんかじゃない」

ソウマは嘘も、励ましも、気遣いも関係なく…ただ自分の思っただけを口にした。

真っ直ぐな瞳がラウナの潤んだ瞳とぶつかる。

薄っぺらいものではなく、気持ちの籠もった言葉はラウナの心を揺らす。

「…旅は、義務感のようなものだ。私の心からの意志じゃない」

「だとしても、だ。妹のために命を懸けている事に変わりはない。

ラウナは立派だ…優しい姉だよ。俺が保証する」

齒の浮くようなクサイ台詞かもしれない。

けれど、ラウナには追い詰めて弱気になっていた心に、優しく染み渡る言葉だった。

ラウナの瞳には涙が溜まり、目尻から一滴の涙が頬を伝い、地面にポタリ…と染みを作った。

ソウマはそんなラウナに無言で近づき、抱き締める。

「あまり自分を追い詰めるな。ラウナが苦しんでたら…俺まで辛くなる」

「……ソウマ」

腕の中で小さく肩を萎め、胸に寄りかかるラウナは『軍隊長』などでは無く、ただ一人の『女性』だった。

いつもは強気な彼女が初めて見せた弱さであり、同時に一番大切な事だった。

ラウナの肩が僅かに震えている。

「……ッ……くう……」

声を押し殺して、必死に泣いている事を誤魔化そうとする。

ソウマは何も言わず、静かに…優しく抱き締める力を強め、ラウナを包み込んだ。

心の内を話せたのは、隣に居たのがソウマだったから…信用の出来る、特別な感情を抱くソウマだからこそ、話せた気持ちだった。

今まで我慢して来た感情が、ダムが決壊したように流れだし、それに比例して涙も零れる。

そんなラウナを精一杯の優しさで抱き締めるソウマ…

聖水の湖が光る中、二人は暫くの間、抱き締め合い…ソウマはラウナの涙を、気持ちを受け止めた。

冒険16―過去（前書き）

結構な所まで進みましたね〜と、言ってもまだ序盤ですが…

ここまでご愛読して下さいありがとうございます！

これからも頑張りますので、意見や感想など貰えたら幸いです！

二人は湖にあった聖水を少しだけ確保し、現在は相変わらず濃い霧で覆われた道を歩いていた。

昨晚の事はお互い、一言も話題に出さない…けれど気まずい雰囲気ではない。

抱き締め合った後、最初は気まずい雰囲気になったが、次第にいつもの調子が戻り、今では何事も無かったかのようだ。

それでも、二人の間には今でに無かった、確かな『絆』が生まれていた。

お互いの詳しい過去を知らなかっただけに、昨晚の出来事は二人の距離を詰めるのに、大きなものだったのだ。

相手の過去に踏み入れるのは…とお互いに気遣い、今まで放置して置いた事実。

その考えは至極当然な気遣いだが、それは一般の状況での事…二人は危険な旅を共にしている、それならある程度はお互いの事について知っておく必要があった。

だが、度重なるように起きる戦いが、そんな事を考える余裕を与えず、ズルズルとそのまま来ていたのだ。

その、わだがまりが消えた今…二人の距離が縮まるのは当然の事だった。

「ラウナ、今はどの辺？」

「ちょうど半分くらいだ。中心地は魔物の強さが跳ね上がるから気

をつけるよ」

二人は幻影の森の、ほぼ中心にいた。幻影の森は、外側にいる魔物はそれほど強くなく、中心地に近寄れば近寄るほどに魔物の強さが上がる。

森で最初に出会ったデビルスネークは、幻影の森では、比較的弱い部類に入る魔物なのだ。

だからと言って、デビルスネークが弱い訳ではない…その辺の盗賊程度では手も足も出ないだろう。

「……ソウマ」

並んで歩いていると、ラウナが突然に声をかけた。

ソウマは自分と呼ぶ声の方に顔を向ける。

「どうした？」

「……アヤセとは…何者なんだ？お前の幼なじみとは聞いていたが…なら、なぜお前を殺そうとしたんだ…？」

ラウナが戸惑うように言ったその言葉に、ソウマは歩みが止まり、固まってしまう。

今まではラウナが気を使って待っていてくれた…だが、昨晚の件でお互いの壁が無くなり、もっと互いを知らないといけない事が分かってしまった。

アヤセの事を、ラウナに隠して置いてはいけないのだ…だから、ソウマは決心する。

「い、嫌なら言わないでも——」

「いや…いずれは話さないといけない事だからな。話すよ」

気を使ったのか、焦って話を打ち切ろうとするラウナの言葉に、重

なるようにソウマは言う。

あまり過去を話すのは好きではない…別段とした理由はないが、楽しい過去がある訳でも無いから。

ソウマは短く溜め息を吐いた後、再びゆっくりと歩きだしながら、話を始めた。

「俺とアヤセが知り合ったのは…五歳の時だ」

あの日、兵藤家の真横にある道場の隣に、ある家族が引っ越して来た…それが橋本綾瀬の家族だった。

家を立て始めた頃に、父親から「道場の隣に引っ越して来るらしい」と言われていたから…誰かがそこに住む事は知っていた。

そして、引っ越しの挨拶をするためにやって来た人たちを見て驚いた…嘘見たいに綺麗な母親と、隣には連れて来られた同じ歳の可愛いらしい女の子。

子供同士って言うのは直ぐに仲良くなるもので、二人が仲良くなるのに時間はかからなかった。

道場で剣の練習のため、竹刀を振っていると、必ずと言って良いほどアヤセがやって来て、一心不乱に竹刀を振るソウマを見ていた。

学校への登下校だって常に一緒だったし、何をするのも一緒だった…だが、二人の関係が変わったのは中学生になってからだ。

ソウマは歳を重ねる度に落ち着き、他の同年代と比べたら異質なくらい心が大人になっていた。

蒼閃二刀流と言う流派を学ぶ中で、ソウマは心も体も強く成長していたのだ。

そんなソウマが中学と言う舞台で浮いた存在になるのは当たり前だった。

子供は変わっている者が嫌いで、自分たちの和に入っていない者は孤立して行くのが暗黙のルール。

ソウマは誰とも群れず、無口でクールなためか「和の外」と子供たちには認識されてしまったのだ。

そこからはお馴染み、中学生なら必ず発生する事件：イジメに発展した。

他の子供たちは、上履きを隠そうとしたり、教科書を破こうとしたり：挙げ句の果てには階段から突き落とそうとしたり：だが、どれも「そうとしたり」なのだ。

つまり、どの試みも失敗に終わったのが事実。

ソウマは剣の道を知る人間：人の悪意には敏感で、周りの子供がやるうとする事を、される前に防止していた。

上履きは持ち帰り、教科書は常に鞆に入れて離れないようにし、階段から突き落とそうと背後から迫る手を見向きもせずには避けたり：どんな事も通じない：それが子供をさらに激情化させた。

そして：事件は起きてしまった。

その日、ソウマの机の中に一枚の紙が入っていた：そこには「アヤセを助きたいなら体育館裏に來い」と書いてあった。

アヤセは、ソウマがイジメにあつてからは全く関わらなくなっていた：

けれど、ソウマは気にしていなかったし、関わってアヤセがイジメられるのも申し訳ない：そう考えていたのだ。

だから、この呼び出しのメッセージは無視が出来なかった。

それを見たソウマはその紙を持って、体育館裏へと向かつて走つた。だが、体育館裏に辿り着いた時に見た光景に目を見開いた：未だに忘れない、あの瞬間。

アヤセが捕まつたなんて言うのは只の嘘：ならまだマシだった。

迎え出た十数人いるイジメグループの中に……幼なじみのアヤセの姿があったのだ。

流石のソウマもこれには戸惑った。

アヤセが自分を裏切っていたなんて考えもしなかった…いや、今思えば考えようとしていなかったのだ。

小さい頃から一緒だったアヤセには警戒なんてしなかったから…

全くもって状況が分からないソウマに、イジメグループの中心的存在の男が言った。

「橋本の言う通り、本当に来たぜ！バカじゃねえの！」

アヤセの言う通り？本当に来た？

嫌な考えが頭に浮かび上がり、それを信じたくない一心でアヤセに視線を送る。

すっかり綺麗になり、中学校の中でもかなり人気のある幼なじみ。けれど、その幼なじみから出た言葉は…信じられなかったものだった。

「当たり前でしょ。ソウマは私の事が好きだもん」

「お前は俺の彼女だろ？」

「そうだよ、だからこうしてソウマを呼んであげたでしょ」ホラ、早く片付けてベッドに直行しろ！」

目の前で繰り広げられる、イジメグループ中心核の男子とアヤセの会話。

それを聞いてソウマは全て悟った。

アヤセは幼なじみである自分を……

売ったのだ。

その後、ショックを受けたソウマは袋叩きに合い、全治一ヶ月の怪我を追った。

学校や病院の先生たちも「何があったの」と何度も聞いて来たが、無言を貫いた。

そして、入院をした方が良くと言う医者や父親、教師の反対を押し切り…ソウマは次の日には、歩くだけで痛い身体に鞭を打って学校へと登校した。

包帯やガーゼだらけの姿で、学校にやって来たソウマを見たイジメグループとアヤセの表情は蒼白としていた。

なんで学校に来れるんだ…そう表情が物語っていた。
そし主犯だった男子とすれ違う瞬間、ソウマは視線だけで人を殺してしまいそうな勢いで睨んだ。

それは、手負いの獅子が見せる「百獣の王の眼光」だった。
男子は睨まれた瞬間、ヒイツ！とあまりの殺気と恐怖に腰を抜かし、そこに座り込んで動けなくなってしまうのだ。
その日からイジメは無くなり、ソウマには誰も近づかなくなった。

「だけど、高校に入学してから…アヤセは何事も無かったように話かけて来た。だから、俺はアイツが嫌いなんだ」

「……そうだったのか…辛い過去を思い出させてしまったな、済まない」

ラウナは話をするソウマ以上に、辛そうな表情をしながら謝った。
こういった所を見ると、やはりラウナは優しいのだと思う。

他人の過去を聞いて、本気で感傷出来る事はそう出来る事ではない。
だから彼女は優しいのだろう。

「気にするな。大して気に病んだ事もないさ」

「……だが、それならなぜ…アヤセはお前を殺そうとしたんだ？」

「分からない…俺もそれが知りたいな」

殺されかける理由なんて分かるはずがない…まだ、ソウマがアヤセ
を殺そうとするのなら納得が行く。

だが、恨まれるはずのアヤセに殺されかけるなんて…意味不明以外
の何ものもない。

答えが見つからず、二人共浮かない表情で視線を合わせていると…
目の前の霧に影がぼんやりと映し出された。
土を踏む音に比例して、影は近づく。

二人は直ぐさま剣の柄に手をかけ、いつでも対応出来るようにする。
戦い前に感じる特有の緊張感に包まれながら待っていると…ついに
その影は姿を現した。

薄黒い肌に尖った耳、背中にはラウナと対象の色である黒い翼が生
えている。

黒いローブを来ていて、腰には長剣が差してあった。

「だ…ダキユラ…」

ラウナがそう呟いた。

ダキユラ…と言うと、この幻影の森の支配者と言っていた魔族…実
力も上位クラスで、強敵と言える。

「若い侵入者だな」

「待ってくれ！私たちは森に危害を加える気はない！ダーラル国に渡りたいだけだ！」

必死にラウナが自分たちの目的を主張する。

ラウナの言う通り、戦闘をする気はない…戦いは避けるに越した事はない。

ましてや、その相手が上位クラスの魔族なら尚更の事だ。

だが、ダキュラの次の言葉は予想とは違うものだった。

「始末なんてしない、安心しろ。俺はお前たちに忠告をするために来たんだ」

「忠告…？」

ダキュラは忠告をするために…？

話が見えない、全くの赤の他人の二人にわざわざ忠告をするためだけに外向くとは…森の支配者は相当に暇なのだろうか。

ソウマはそんな事を考える…だが、ダキュラの言葉に二人は他人事と割り切れなくなった。

「ダーラル国は直に攻撃される…行くのは止めた方が良い」

「……………え？」

冒険17―デルーチ帝国（前書き）

ついに2万アクセス突破！

皆さん、ありがとうございます！

これからも頑張って書きますので、ご愛読よろしくお願いします。

冒険17―デルーチ帝国

「…どういう事だ？」

ダール国が攻撃される…その言葉を聞いたソウマが問うた。
ダール国についての知識が無いからか、攻撃される理由も分からない上に、ダキュラの言葉が真実か虚実どうかも分からない。

疑いの眼差しを送っていると、ダキュラは懷から一つの小瓶を取り出した。

中には透明度の高い、輝く液体が入っている。

「聖水？」

「そうだ。ここより北に位置する『デルーチ帝国』は幻影の森の聖水を狙っていてな。…ダール国は聖水の大切さを知ってか、森を守ろうとしているんだ。つまり…聖水をかけての戦争と言う事だ」
「で…デルーチ帝国だと!？」

ラウナが悲痛な声を上げる。

昔、ソーマルイ国にも戦争があつた…現在では平和を愛す良い国となっているが、歴史に残る程の大きな戦争をした過去がある。

その相手こそが『デルーチ帝国』だった。

デルーチ帝国は古来から強い軍事力を持っていて、現在では大国へと成長し、軍事力で言えば世界トップ3に入る。

国民の若者や男は、軍で訓練を何年間かは必ず行われなければならない

ず、それが理由なのか一般市民でさえ強い。

地球で言う徴兵制度のようなものだ。

技術も進んでいて、現在では戦闘用の飛空艇を開発しているらしい。そんな戦争大国と、かつて戦ったソーマルイ国は見るも無惨に敗れ、復興には相当な時間を要したと言う。

そのデルーチ帝国が再び戦争を…しかも希少価値が高く、多くの命を救える聖水を奪おうとしている。

許せるはずがなかった。

「許せない…ソウマ！私は戦うぞ！デルーチ帝国は血も涙も——」

「待てつて。戦争なんだろ…そう簡単に行くかって」

「少年の言う通りだ。キミたちはまだ若い…命を無駄にするのには、まだ早い」

熱くなるラウナを落ち着かせようとするソウマの意見に、ダキュラも賛成の意を見せた。

戦争はティアラを助けた時のようには行かない…ほんの少しの誤った判断で命を落としてしまう。

簡単に助けるなどと決められるものではない。

「だが…勝敗は決まっている…ダール国が負けたら森の聖水が奪われるんだぞ！無視する訳には…」

ラウナが悔しそうに唇を噛んだ。

頭では分かっているのだろう、自分たちが動いた所で相手は大国…結果に番狂わせがない事を。

けれど、正義感が強く誇り高いラウナは見過ごす事がどうしても出来ないのだ。

例え、結果が見えていようとも…

「ラウナ、俺たちが死んだらレイナは助からない。分かってるだろ？」

「分かっている！」

悔しさが滲んだ声で怒鳴るように言うラウナ。

どの世界でも、優先順位は大切だし、何より…自分の気持ちを押し殺さなければならない時など、数え切れないほどにある。仕方ない事なのだ。

「帰り道は俺が先導しよう。キミたちは着いて来れば……」
「いや、その必要はない」

ソウマの意外な言葉に、ダキュラは踏み出しそうになった足を止めた。

そのまま首を捻り、視線を移動させる。

「どういう事かな？」

「俺たちは…このままダーラル国に向かう。迂回策は却下だ」
「…ソウマ？」

ソウマの意外な発言に、ラウナが困惑の眼差しを送る。

先ほどの言葉から考えると、今の発言は意味が分からない。

だが、当の本人の表現はいつもと変わらず、冗談を言っているようには見えない。

ソウマは至って真面目に続ける。

「ラウナと俺はダーラル国に加担し、デルーチ帝国を討つ」
「なっ!？」

ダキュラが信じられないと言ったような表情で、ソウマを見る。

ソウマは何も考えが無く、決断した訳ではなかった。

確かに、ダール国とデルーチ帝国では戦力差が目に見えているかもしれない。

結果だって、誰が見ても明らかかもしれない。

だが、戦いの理由には聖水がかかっている上に…自分は龍の力を受け継いだ『変革者』だ。

無謀かもしれないが、変革者と予言された自分の力を試してみるのも悪くない。

果たして自分に…聖水を守る力があるのか、世界を変える力があるのか…自分で自分を試してみる事にしたのだ。

「心配してくれた事には感謝する。だが、行き先を決めるのは俺たちだ。それに…アンタ、デルーチ帝国と戦う気なんだろう？」

「そうなのか？ダキュラ」

「……………気づいていたのか」

やれやれ、と言ったようにダキュラは溜め息混じりで、首を横に振る。

森の聖水がかかっているのだ…ダキュラが戦う事など容易に予想が出来た。

恐らく、無関係の者たちを巻き込みたくなかったのだろう。

「ダキュラが迷った者を攫うって噂…アレも出任せだろ？」

「…その通りだ」

危険な噂が出回れば、森に近付く者も減る。

そう言った考えがあったからこそ、出任せの噂を流したのだろう。ダキュラは自分の考えを当てたソウマに参った表情を浮かべる。

「キミは鋭いな…負けたよ」

「ダキュラ、私たちは全力で協力する。共に戦おう！」

ラウナが自信有り気な表情で、片手を差し出す。

その自信がどこから来るのか知りたいくらいだ…見習うべきかもしれない。

ダキュラも差し出された手を、申し訳なさそうに握り返した。

「俺はカインと言う…よろしく頼むよ」

「俺はソウマ、こっちがラウナだ。とりあえず…森を抜けよう。ダキュラ、案内を頼めるか？」

「任せてくれ」

話が決まった所で、ダキュラを先頭に三人は幻影の森を抜けるため、歩き出した。

相変わらずの濃い霧に、三人の姿は包まれ、次第に姿は見えなくなつた。

冒険18―ダール王国キサラ

カインの先導で、幻影の森を抜けた後、数時間ほど歩くとダール国の入門が見えて来た。

ダール国と言う国は、小さい街…小さい国が集まって出来た国だ。穏やかな国だが、魔法がかなり発展していて、魔法自体が生活の支えになっているくらいようだ。

全体人口の約八割が魔法を使えるらしく、魔法の国と言っても過言ではないだろう。

入門の横に立つ警備兵に、ラウナが入国書を見せて門を潜る。

ラウナが持つ入国書は、それ一枚で多部の国へ出入りが出来るらしく、ソーマルイ国を出発する際に受け取ったようだ。

ラウナは正妻との子ではないから、酷い扱いを受けた…そう言ったが現在は違う。

軍隊長に就任してからは、国民からも部下からも慕われ、人の温かさに触れていた。

国王も、軍隊長としてのラウナは認めているようで、その証として入国書を手配してくれたらしい。

話だけ聞くと、周りの者が冷たいような印象を受けるが、実際は違ったのだ。

門を潜ると、カインが二人に向かってこれからの動きを伝える。

「国王のもとに向かおう。話をしたい」

「通してくれるのか？」

「安心したまえ。俺はダール国王と面識があるし、一般兵も知っている」

幻影の森の支配者であるカインは、聖水を守る守護者とも言える。ダール国からすれば、兵を送らずして聖水を守ってくれる頼もしい存在なのだ。

そんなカインも、度々ダール国に出向いては国民と交流したり、国王と談話などをしているらしい。

予想以上に偉い位にいるようだ。

だが、好都合である事に変わりはない…が、ソウマたちには他にもやるべき事があった。

「カイン、『ゼア』と言う人物を知らないか？」

ダール国に加担する事も大切だが、旅の目的を忘れる訳にはいかない。

もともと、ダール国に向かっていたのは、医学に秀でた『ゼア』とやらを尋ねるためだ。

接触するのなら、戦いの起こる前でなければ困る。

「……ゼアは…既にこの世にいない」

「……………は？」

カイン曰わく、ゼアは腕の良い医者だったが…ある日、妻が病に犯されてしまったらしい。

必死で妻を救おうと手を尽くしたが、結局救えずに妻を亡くしてしまった。

そのショックでダール国の田舎に引っ込んでいたが…先日、盗賊

に襲われ、殺されてしまったと言う。

「手がかりがまた一つ消えた…か」

「ソウマ、しょうがない事だ。今はデルーチ帝国を相手にする事だけ考えよう」

ラウナが励ますように言う。

やはり、この世界でも殺人は起こるらしい…ただ、事件の多くが盗賊などが犯人のようだ。

有力そうな手がかりが消えてしまった事に、少なからずショックを受けたが、気を取り直して話を戻す。

「じゃあ、国王とやらに会いに行こうか」

「国王はダーラル城にいる。直ぐに向かおう」

カインはそう言い切って先頭を歩き出し、二人もそれに続く。

歩きながら、ソウマは国の異様さに眉をしかめる。

ストラト都市のような賑やかな街並みとは違い、ピリピリと空気が張り詰めている。

戦い前の嫌な空気だった。

そんな空気を感じながら、三人はダーラル城へと向かう。

歩いていて気が付いたのは、ダーラル国の国民がいない事だ。

街は確かに張り詰めた空気をしていて、警備兵が何人か彷徨いているが…普通に暮らしていた人々が一人もいない。

窓から家の中を覗いても、中はもぬけの殻。

恐ろしくだが…戦争の被害を最小限に抑えるため、どこか避難させたのだろう。

屋台も畳まずに、食料が売られたままの状態で残っている。

警備兵たちは、三人を見ると一瞬構えはするが、カインの姿を確認するや否や警戒を解いた。

カインの言う通り、一般兵も顔見知りのようだ…考えていた以上にカインは、ダーラル国と親しいらしい。

「…見えて来たぞ。アレがダーラル城だ」

「……………」

カインの指差す方向に視線を動かしてみても言葉を失った。

余りにも広大で、如何にも言ったデザインの城…ソーマルイ宮殿と同じくらい大きい。

やはり、富豪たちは自分の権力を象徴するものを残して置きたいのだろう…地球もこの世界も大した変わりはないのかもしれない。そんな事を考えながら、警備兵の横をすり抜けて敷地内へと足を踏み入れようとした…が、警備兵の持つ槍がソウマとラウナに向けられた。

「お待ち下さい、カイン殿。後ろの者たちは何者ですか？」

「彼らは今回の戦いで力を貸してくれる者たちだ。無礼は止せ」

「ハッ！失礼しました」

カインの一言で警備兵は直ぐに槍を収め、敬礼をした。

いくら何でも、警備兵の対応の仕方が丁寧過ぎる…顔見知りなんて程度ではない。

警備兵の態度は、明らかに目上の人にするものだ。

もしかして…カインはもともダーラル国の上層部に属していた者ではないのか？

「どうした？」

ソウマの厳しい視線に気づいたのか、カインが振り返り聞いた。

「…いや、何でもない」

そう答えると、カインは大して気にした様子もなく、再び歩き出した。

質問しても良かったのかもしれないが、知らなければならぬ事でもない。

自分には関係ない事だ…そう考えて思考をストップさせる。

右からはラウナの足音が、左からは噴水による水の音が聞こえる。

先頭を歩くカインが、ダーラル城の扉を開くと、中には一人の警備兵が立っていて、国王の居る間まで案内してくれた。

「カイン、良く来たな。後ろの者たちの話も聞いている…力を貸してくれるとは、礼を言う」

高そうな装飾が施された椅子に座る国王…ソウマは髭の生えた老人をイメージしていたのだが…ダーラル国王は若かった。

見た所、まだ二十歳前半だろう…長い金髪に少し黒い肌。

中性的な顔付きの国王だが、頭は良さそうだ。

「そっちの女はソーマルイ国の軍隊長だな？」

「お初にお目にかかります。ソーマルイ国軍隊長のラウナ・ソン・ソーマルイと申します」

「堅苦しいのは要らん。既に戦いへの備えは万端…デルーチ帝国は明日の明朝に攻撃してくるとの事だ」

どうやらデルーチ帝国の動きは把握しているようだ。

明日の明朝…心の準備をするくらいの時間はあるらしい。

「カイン、お前は軍の指揮を取れ。その男、お前はどれくらい戦える？」

「……ソウマだ。別に俺は自分の好きに戦う。ダールル国に加担はするが…従う気は無いからな」

「ソウマ！なんて口の聞き方を！」

見下ろしながら問う国王に、鋭い視線を送りながら答えるソウマを、ラウナが焦ったように咎めた。

そんな事知った事が…国王自信が堅苦しいのは要らないと言ったんだ、構わないだろう。

それに、ダールル国には加担すると言う話だったが、従う気などゼロに等しい。

今回は「聖水を守る」「自分の力を試す」の二つが目的だ…ダールル国の指揮下に入る必要はない。

ソウマの言葉を聞いた国王は、ニヤリと嬉しそうに笑う。

「ラウナ、気にしないで良い……ソウマ…お前みたいな奴は好きだ。よし、好きなように頼むぞ…ただ、倒すのは敵だけで頼むからな」

「わかってる、当たり前だろ」

「俺はキサラ国王様だ。部屋を用意するから、今日は休んでくれ…明日は頼む」

自分で国王様とは…なかなかの自意識過剰な者のようだ。

キサラの言葉が終わると、警備兵が「こちらです」と案内してくれた。

カインはキサラと話があるから残り、ソウマたちは用意された部屋へ警備兵の案内で向かった。

「ソウマだっけか？何者だ？」

ソウマたちが王の間を後にしたのを見計らって、キサラが問うた。
何者…と聞かれても、あの二人に出会ったのは先ほどの事だ。

ラウナの方はソーマルイ国軍隊長のようだが、ソウマは全く持つて
情報不明だった。

「さあね…わからないや」

「……感じる魔力は異常だったけどな」

それは出会った時、カインも思った事だ。

いや、正確には…彼らが幻影の森に足を踏み入れた時に感じていた。
ソウマの魔力は異常としか言いようがなく、まるで『存在そのものが魔力』のような…

魔族は魔法探知能力が優れている…カインは幻影の森に侵入者が入
った時点で、魔法を探知し、森を荒らさないか監視する。

ラウナも魔族だが、魔法自体が苦手なため、気づいていないだけだ
った。

キサラも若くして国王の座に着いた強者…ソウマが異常なくらい、
見抜く事は簡単だった。

「实力は計れないが…悪い人間では無さそうだぞ？」

「…分かっている。奴からは悪意を感じ無かった…信用は出来る」

その後、キサラたちは積もる話を楽しんだ…二人共、命を落とすや
もしれないと分かっていたから。

「戦争か…」

自分が日本で暮らしていた部屋の、何倍もある豪華な部屋でソウマは呟いた。

地球にも戦争くらいあった…けれど、それは自分とは全く関係のない他国で起こっていた事だ。

自分が戦争に身を投じるとは思ってもいなかった…決断したのは自分だが。

それに、聖水を守るのと力を試す…それ以外にも理由はあった。

なぜ、デルーチ帝国が聖水を狙ったのか…前から狙っていたなら、なぜ今まで攻撃して来なかったのか。

なぜ…自分たちはタイミング悪くダール国に向かってしまったのか。

全て偶然？ソウマは疑っていた。

もしかしたら…変革者としての運命か、それとも…異界者の運命か…ソウマには分からないが、偶然には出来過ぎだ。

一人考えていると、扉をノックするコンコンと言う音が、静かな部屋に響いた。

「ソウマ…私だ」

「入って良いよ」

声でラウナと判断し、入室を許可する。

ゆっくりと扉が開かれ、お気に入りなのか白いワンピースを着たラウナが中に入ってきた。

「その…いきなり戦いだなんて済まなかった。私の意見を尊重して

くれたのだろうか？」

「…関係ないさ。俺は自分の考えで決断したんだから」

「……そうか…」

理由は分からないが、ラウナの元気が無い。

表情も暗いし、声もいつもより小さい。

こういう時のラウナは、何か余計な事で悩んでいる時が多いのだが…
続きの言葉を待っていると、少しの間を空けてから言葉を発した。

「私は…お前の足手まといにならないだろうか？」

「……………」

「今まではソウマに庇われていた事が多かった…だが、今回はデル
ーチ帝国が相手の戦争だ。もし…私が邪魔なら——」

「前は俺が尻拭う」

どうやらラウナは、自分がソウマの足手まといにならないかが心配
だったらしい。

やはり余計な事で悩んでいたな…ラウナが邪魔だなんて今まで一度
も思った事はない。

寧ろ、自分の方が迷惑ばかりで申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

ネガティブな考えで悩むラウナに、ソウマは言う。

「だから、後ろはラウナが守ってくれ。頼むぞ…相棒」

「……あ…ああ！任せろ！」

ソウマの「信用してる」と言う隠れたメッセージに、ラウナは表情
を明るくした。

戦争で、戦いで背中を預けるという事は、命を預けるのも等しい…
相当な信頼が無ければ言えない台詞だった。

時間は刻一刻と過ぎる…明日の明朝、決戦の火蓋が切って落とされる。

「気を抜くなよ！いつデルーチ帝国軍が現れるか分からないからな！」

太陽が昇る少し前、キサラが自軍たちに喝を入れる。

まだ太陽は見えていないが、暗闇で包まれていた夜とは違い、視界が明るくなって来ている。

直に太陽が昇るはずだ。

こちらのダーラル国の勢力は900ほど…対するデルーチ帝国の勢力は5000。

数字だけで見ると、敵は五倍以上の勢力を持っている…が、ダーラル国の兵は全員が魔法を使えるため、力で考えるとこちらの軍の方が強い。

それでも、圧倒的に不利なのは変わらない…九割の確率でダーラル国は負ける。

例え、一割の確率で勝ったとしても、壊滅的な打撃を受けているだろう…

どちらに転んでも危険な状態になる…けれど、聖水を守るためにダーラル国は戦う。

それほど、この世界で『聖水』は貴重で、ダーラル国にしても重要な物なのだ。

後ろにはダーラル国の砦…これを背に、敵に突破されないように戦うのだ。

兵力は圧倒的でも、兵たちは誰一人として諦めの色を見せない。寧ろ「やってやるうじゃないか」と言った意気込みの念が感じられる。

剣を握る力が強まる雰囲気の中、空が白み始め、山々の間から太陽の片鱗が姿を見せた。

瞬間、砦の高台からデルーチ帝国を見張っていた兵士が声を張り上げて言った。

「見えました！デルーチ帝国が迫って来ます！」

「迎え討つぞ！全軍進めえ！」

キサラの合図に寄り、ダーラル国の兵士たちが咆哮を挙げて進軍する。

あまりにも大きく、気合いの入った咆哮に空気はビリビリと振動し、大地を轟かせた。

「……行こう」

「ソウマ…大丈夫か？」

「ああ、覚悟は出来てる」

それは、死ぬ覚悟などでは無論無い。

人の命を奪い……自分が生き残る覚悟だ。

この世界に来て、剣を手にとったその瞬間から決めていた事。

今更揺れる事はない…目の前に立ちはだかる敵は切り、向かって来るなら風払う。

…戦う覚悟だ。

「行くぞ！」

ソウマは腰の左右に差しである日本刀『天地』を抜き、両手にそれぞれ持つ。

そして、地面を蹴り付け走り出した。

若干、十と七の少年が戦乱の中心へと飛び込んだ瞬間だった。

後に、これは世界にとって大きな存在を生む戦乱へと発展する事になる。

砂煙が戦場を包み、砂塵が立ち上る戦乱の地…多くの命が絶え、消え行く灯火ばかりの中で、少年は剣を振るう。

「ラウナ！伏せろ！」

——蒼閃流・飛来——

刀の刀身に込められた魔力が、鋭い斬撃となりて、ラウナの背後にいたデルーチ帝国軍の兵士を切る。

ラウナは倒れる兵士を一目し、ソウマが庇ってくれなかった時の未来を考えて冷や汗を流す。

敵が多過ぎる…四方八方の殆どがデルーチ帝国軍で埋め尽くされて

いる。

既に何人の敵を倒し、何人の仲間がやられたのかも分からない。そんな中で、二人は剣を振り続ける。

「埒が開かない！」

「……敵の頭を取りに行こう。この戦いは長期戦になれば、ダーラ
ル国が不利だ」

ソウマがラウナにそう伝え、残っている五本の剣を上空に投げ、ドラグーンを発動させる。

明らかに数で負けている上に、こちらは魔法が主体だ。

長期戦になればなるほど、戦況は不利な方へと動き、負けてしまう。
タイムリミットは…一日ほどだろう。

もう一度、朝日を見るまでに決着を付けなければ、一気に戦況が崩
され、敗戦決定だ。

そうになると、敵兵の全てを倒している時間は無い。

短期戦の基本策は敵の頭…つまり、首謀者を叩く事だ。

そして、首謀者は必ず後ろに置く。

「突っ切るぞ！」

——ドラグーン・エッジ——

五本の剣を眼前に集め、目の前を一直線に放つ。

そのラインに居た敵兵士たちは、容赦ない攻撃に吹き飛び、眼前が
開かれる。

すかさず二人は兵士の消えたラインを進み、密集地を抜け出した…

…瞬間、二人は一際大きな殺気を感じ、左右に飛び退く。

避けるのと同時に、二人の居た場所には巨大な斧が振り下ろされ、
地面がバラバラに割れた。

避けなければ確実に死んでいただろう…恐らく、原形すら残らない

かもしれない。

体勢を整えながら、斧を振り下ろした張本人に視線を移す。

「なかなかの反応だな、ガハハ！」

3メートル違い身長に、広過ぎる肩幅…腕や足は丸太にも匹敵する太さで、その太さは筋肉によるものだと分かる。

熊のような顔に黒い毛…魔族、ベアー族の敵兵だった。

先ほどの殺気から、明らかに他の一般兵とはレベルが違う…軍隊長レベルだろう。

「貴様…『巨斧のグラン』だな？」

「ガハハ！その通りよ、俺様こそが巨斧のグラン様よ！」

巨斧のグラン…あまりにも大きな斧を、まるで普通の斧のように扱う事から付いた名だ。

巨斧から繰り出される攻撃は、巨大な岩をもバラバラに砕き、危険な破壊力を秘めている。

実力者であり、危険な敵であった。

「面倒な敵だな…」

「ソウマ、お前は先に進め」

「は？」

ラウナの提案に、ソウマは困惑した。

目の前の敵は実力者なのは一目瞭然で、ましてや恐れられるほどの通り名すら付いている。

二人で協力して戦うのが定石だろう。

「…ソーマルイ国の仇がある。私一人で倒したい」

ラウナはグランを真つ直ぐに見据えている。

その考えは、戦いに置いては良い考えではない。

自分の感情に任せ、冷静な判断が出来ていない事が多いからだ。

感情的な判断が、取り返しの付かない結果をもたらす事は明らか…

ラウナも分かっているだろう。

それでも、敢えてその考えを提案した…戦いに勝てる自信があるから。

「……………分かった。但し、絶対に死ぬなよ」

本当なら受け入れたくない…だが、ソウマはラウナを信じた。

ラウナは負けない…絶対に死なないと。

だから、敢えて一対一の戦いを了承した。

ソウマは止めていた足を動かし、グランの脇を通り過ぎようとする。

「おいおい！誰の許可でそこを——」

自分の後ろには行かせないとばかりに、大きな手でソウマを捕まえようとする。

だが、手を伸ばそうとした瞬間、グランの脳裏にはある光景が浮かぶ。

それは伸ばした自分の手が、ソウマの持つ刀により切り落とされる光景…

一瞬にして背筋が凍り付き、伸ばしかけた手を引っ込める。

コイツはヤバイ…グランの動物的な危機回避能力がそう告げた。

ソウマはそのまま脇をすり抜け、グランの背後を走って行く。

グランにとって、こんな経験など初めてだった。

普通の者なら感じる事すら無かっただろう。

実力者のグランであるからこそ、感じられたものであった。

「良かったな…手を伸ばさないで」

「……ガハハ…何て事はねえ。後ろには俺様より強いのがいる」
「舐めるなよ」

急速にラウナが放つ殺気の鋭さが増す。

ソウマの強さを、凄さを、勇ましさを直に見て来たラウナにとって、ソウマは既に『並』のレベルでは無かった。

有り得ない成長スピードに加えて、絶対に諦めない強い精神力。何より、龍の力を受け継いだソウマは最強と言って良いほどに強い。

「ソウマは強い…そして、私も負ける気は無い」

「ガハハ！凄え殺気だな、ねえちゃん！気に入ったぜ！」

「……ソーマルイ国軍隊長ラウナ…参る」

ラウナは握る剣を構え、グランに向かって突進をして行った。

冒険20―それぞれの戦い（前書き）

3万アクセス突破！

皆さん、ありがとうございます（泣）

これからも頑張って執筆致しますので、ご愛読宜しくお願いします！

冒険20―それぞれの戦い

「はあ！」

ラウナの振るう剣の刀身と、それを受け止めるグランの巨斧の刃がぶつかり合い、キンと鉄同士が鳴らす甲高い音が響く。

当たり前だが、どんなに力を込めてもグランの巨斧はビクともしない。

それを理解しているからこそ、ラウナは力では勝負せずに手数で対抗していた。

グランの凄まじい横振りによる一閃を、しゃがむ事で避け、すかさず懷に飛び込み刃を立てる。

避けようとするグランの脇腹に刃先がかかるが、それ以上は行かず、かすり傷しか与えられなかった。

「ガハハ！なかなかの腕だ！」

「筋肉馬鹿め……」

嬉しそうに笑うグランを見ながら、「硬すぎる」とラウナは舌打ちをする。

鍛えられた筋肉は鋼のように硬く、ラウナの振るう剣では、思ったようにダメージを与えられなかった。

それは、ラウナが非力だからではない。

ラウナはスリムではあるが、無駄の無い筋肉の付き方により、そう見えるだけだ。

力が無い訳ではない。

それでも、ダメージを与え辛いのは、グランが巨体である事と筋肉が異常なまでに鍛えられているからだった。

「それにしても良い女だ！強く美しい…敵じゃなかったら俺様の女にしてやりたいくらいだ！」

「……虫酸が走るな。貴様のような男など、こちらから願ひ下げだ！」

一層険しくなった表情で、ラウナは剣を振り下ろす。

だが、グランの巨体に似合わず俊敏な動きは、ラウナの攻撃を上手く避け、なかなか一撃が決まらない。

普通ならもどかしさを感じ、ここで焦って深く踏み込み過ぎてしまふものだが、ラウナは違う。

伊達にソーマルイ国の軍隊長を名乗る女ではない。

常に敵の攻撃を視野に入れた攻撃で、自分の有利に戦いを進ませる。ソウマほどではないが、ラウナの動きは速く、充分に実力者として戦えていた。

寧ろ、この戦いで焦っていたのはグランの方だった。

ただの女兵士だと見てびびっていたが、いざ戦ってみると、その腕の良さは予想を遥かに越えていたのだ。

しかも、自分の一番嫌う、細かで俊敏な手数が多い攻撃をして来る…表面では平然としていても、内心は冷や汗ものだった。

「…ソーマルイ国を潰した時は、お前は居なかったな？」

「当たり前だ。私が軍隊長に任命されたのは3年前だから…」

「ガハハ！そうかそうか！ソーマルイ国が敗戦した時はまだガキだったか！」

そう、グランの言う通り…ソーマルイ国がデルーチ帝国に敗戦したのは十数年前。

ラウナが七歳の頃の話だ。

現在の年齢が十九なので、ラウナは若干十六歳という若さで軍隊長へと就任した。

「ガハハ…だが、お前さんじゃ俺様には勝てん！」

ニヤリとグランが笑うと、魔力が急速に高まる。

身体を覆う体毛は逆立ち、手足の爪が更に鋭く尖った。

一般では魔力を体内から放出し、魔法を使うのが普通だ。

だが、魔力を放出せずに体内で溜め込み、体内の中のみで魔力を循環させる…魔族のみが使える戦闘手段だった。

名を『バーサーカー』と言い、人間は体内で魔力を循環させられるほど頑丈では無いため、魔族しか使えない。

だからと言って魔族が全員使えるわけではない。

バーサーカーは身体を魔力で強化し、通常よりも速く動き、強い力を使え、より頑丈な身体へと変化させる技だ。

そのため、デメリットが伴う。

長時間使えない上に、使い終わった後の激痛と披露が激しい。

会得するには常人を越えるセンスと努力、そして……デメリット…リスクを受ける覚悟が必要なのだ。

「まさか…」

ラウナの表情は固まり、頬を冷や汗が伝う。

グランは「巨斧のグラン」と呼ばれるほどの実力者なのは知ってい

だが、バーサーカーを使えるまでとは予想だにしていなかったのだ。

「ガハハ！そらあ！行くぜえ！」

グランは掛け声と共に地面を蹴る。

瞬間、今までとは段違いの速度でラウナへと迫り、握った拳を振り抜く。

グランの拳は、ラウナの腹へとめり込むように命中し、身体はくの字に曲がり後方へと吹き飛んだ。

「がはあ！」

腹から内臓へと衝撃が伝わり、吐血する。

口から吐き出された血液は、地面に滲んで直ぐに黒くなった。

一撃が先ほどとはレベルが違うほどに重く強い。

しかもグランは巨斧を使っていない……ただの殴ると言う動作だけで、ラウナは意識が飛びそうなほどのダメージを受けた。

形勢は一気に逆転してしまった……ラウナが圧倒的に不利な形勢へと。

「ガハハ！倒れないだけ凄えじゃねえか！」

「ぐ……」

ラウナは確かに倒れなかった……だが、もともと攻撃力が半端ではない上に、パワーアップしたグランの攻撃をまともに受けたのだ。

立っているのもやっとだった。

それでも、ラウナは戦う事を選ぶ……母国を攻撃し、多くの者を傷付けたデルーチ帝国を許す訳には行かなかったから。

ラウナは剣を握る手に力を入れ、グランに向かって走り出す。
一歩を踏み出す度に襲う激痛を、歯を食いしばる事で耐える。

「ガハハ！…根性のある女だ！」

しかし、痛みに耐えながら速く動くのは常人では出来ない。

明らかに速度の遅いラウナは、的としか言えなかった。

グランの持つ巨斧がラウナに向かって振り下ろされる。

そして……スドオン！と言う轟音が響き、土埃がその場を包んだ。

「……ラウナ……？」

敵と味方の兵士が入り乱れている中を進んでいたソウマは、立ち止まり後ろを振り返った。

剣同士が弾ける音、土埃による視界の悪化、唸るような地響き…五感はそのらによって邪魔されている。

そんな中、ソウマは何かを感じて、口は自然とラウナの名を口にしていた。

まさか…ラウナが負けたのか？

嫌な考えが脳裏を過ぎる…戻るべきか、と言う考えまでもが頭に浮かぶ。

だが、その考えは直ぐに捨てた。

戻った所でそれは余計なお世話だ…ラウナが戦いへの介入を拒否したのは、自分自信の戦いだからだ。

邪魔をしてはいけない…それにラウナとは約束を…絶対に死なないと言っ約束をした。

今はラウナの言葉を信じて進むしかない。

ソウマは再び前を向いて走り出そうとした…が、こちらにゆっくりと歩いてくる存在により、一步踏み出した所で止まった。

「アラ…良い男！カイトの言った通りね」

戦争の場には相応しくない、白いドレスを纏った人間の女がそう言った。

手には西洋の長剣を持っている。

整っている顔の造りに、腰辺りまで伸ばした金色の髪、ドレスから覗く白く長い脚線美…

その女は一見、戦いの世界とは無関係にしか見えない…だが、女から発せられる殺気と戦うもの特有のオーラが、ただ者ではない事を証明していた。

「カイト？」

「アナタと同類だ…って言ってたわよ？」

「！」

同類…その言葉だけでソウマは理解した。

カイトと呼ばれるその者は…同じ龍の力を受け継いでいる異界者なのだと。

だが、気になる事があった。

女の言い方から考えるに、カイトとやらは自分の事を知っているようだ。

なぜだ？

異界者の事はラウナにしか伝えていない…無論、ラウナが口外するはずかない。

つまり…アヤセと接触した可能性が高いと言う事だ。

アヤセが情報を流したのなら、カイトとやらが自分を知っていても不思議はない。

「そうか…それで？アンタはそこを通してくれる気は？」

カイトと呼ばれる者に会わなくてはならない。

そして、次第によっては戦いになる事も有り得る。

ソウマの問いに、女はニツコリと可愛く笑いながら答える。

「無いわ…本当は殺すつもりだったけど、可愛いから私の玩具にしちゃう！」

「……………なるほどな。全力で遠慮させて貰う」

まるで、本当に新しい玩具を与えられた子供のような、無垢な笑顔で女は答える。

そして、その笑顔に不気味さを感じ寒気が背筋を通り過ぎた。

ソウマは魔法ドラグーンを使い、天地以外の五本の剣を宙に浮かべる。

「わお…凄い」

「安心しな。これらが一齐に攻撃する事はない」

ドラグーンに込めている魔力は少量…浮かべる事が精一杯の量だ。この戦いでドラグーンを使う気はない。

後に異界者との戦いが待っているのだとしたら、ここで魔力を消費する訳にはいかない。

ドラグーンは魔力消費が激しいのだ。

ソウマは両の手に握る日本刀『天地』の剣先を女に向ける。

「通させてもらう」

「クス…声も顔も私好み！私はシリアよ。アナタは？」

「……ソウマだ」

女、シリアは右手に握る長剣の刀身を口元に持つて行き、赤く唾液の滴る舌でゆつくりと舐める。

その姿は妖艶で、かつ危険なオーラを醸し出していた。

「来なさい、ソウマ。私の玩具にして…あ・げ・る」

「お断りだ！」

ソウマは姿勢を低くし、素早くシリアの懷まで移動する。

強烈な速度で迫る刀身…だが、シリアはそれを長剣で易々と受け止めた。

交差する剣はギリギリと音を立てて、睨み合う。

その音は運命の歯車を狂わせるキッカケ…この瞬間、ソウマの長い…本当に長い戦いの一日が始まった。

冒険21―バーサーカー同士の戦い

グランの振り下ろした巨斧は轟音を響かせ、戦場の大地を揺らした。巻き起こる土埃は次第に風に流され、自分の倒したであろう相手に、グランは視線を向ける。

「なっ……！」

明らかに、誰が見てもグランが勝ったと認めざるを得ないはず……だった。

手応えは感じていたし、バーサーカー状態のグランの攻撃を、ラウナが防ぐ術は無かったはず……だった。

だが、グランが目にしたもの。

それは……ラウナがグランの攻撃を防いでいる光景だ。

ラウナは自分の持つ剣を頭より少し高い位置で構え、巨斧をしつかりと受け止めている。

有り得ない……と、グランは狼狽する。

目の前の女は確かに実力はあるだろうし、才能もある事は認めざるを得ない。

だが、パワーだけを見てみればグランの方が上なのは確実。

加えてバーサーカーを使い、全てに置いて勝っていたはずなのに……

なのにラウナは立って、攻撃を受け止めていた。

驚くのも無理はなかった。

「残念だったな…『巨斧のグラン』。私は魔力コントロールが下手でな…本当は使いたくないのだが………そうも言っていられない」

グランを見上げるラウナの姿は、明らかに以前とは違っていた。

犬歯は牙のように鋭く伸び、背中に生える翼の羽はナイフのように尖り、髪は溢れる魔力に乗り重力に逆らうかのように揺れている。

溢れんばかりの魔力…闘争心を剥き出しにしたオーラ、巨斧を防いだ戦闘力。

これは紛れもない――

「まさか…バーサーカーか!？」

「その通りだ。私も使えるんだよ…扱いが下手だがな」

ラウナは顔をしかめながら尖った犬歯を見せる。

ラウナは魔法が大の苦手だったが、それは魔力が低いからではない。魔族なだけあって、魔力は一般から見れば充分過ぎるほどにある。

だが、あまり器用ではないラウナはコントロールが出来ず、魔力を応用する魔法が苦手なのだ。

バーサーカーについても同じで、使えるのだがコントロールが上手く出来ない。

そうすると、リスクが大きくなり危険が増える。

だから、本来なら使わずにいる事が一番だった…が、グランの実力を考えれば手加減は出来ない。

それどころか敵がバーサーカーを使ったのだ…あのまま戦っていたら確実に負けていただろう。

出し惜しみ出来る状況でもなかった。

「ここからが本当の戦いだ」

「…ガハハ…こりゃたまげた。今までの無礼は詫びてやるぜ」

先ほどまで狼狽していたグランは、ニヤリと嬉しそうに笑い、巨斧をゆっくりと自分の肩に乗せる。

その表情は、まるで自分のライバルを見つけたかのように、挑戦的な歡喜の笑みだ。

バーサーカーを発動したお互いの戦闘力は互角…間の距離は2メートルと、一步踏み出せば攻撃範囲内へと侵入してしまう。

一筋の汗が頬を伝い、顎から滴に変わり地面へと落下する。

瞬間、二人の矛はぶつかり合い、甲高い音を響き渡らせた。

迫り来る巨斧をしゃがむ事で避け、膝の屈伸運動を利用してグランの首目掛けて突きを繰り出す。

グランは素早く反応するも、巨斧を振り回した後に避けるのは至難…避けきれずに首に剣先が掠る。

だが、そんな事などお構い無しと言ったように、グランは太い筋肉質な腕を伸ばし、ラウナの身体を掴む。

そのまま地面へと突き付けると、衝撃に耐えきれない地面に罅が入る。

「ぐっ！」

ラウナの表情が苦痛に歪むが、それも一瞬のこと。

直ぐに身体を捻り、自分を捕縛する大きな手から逃れ、その捻りを利用してグランの腕を数回斬りつける。

更に畳み掛けるようとする…が、真上から振り下ろされるグランの巨斧に気付き、転がるように横に避けた。

立ち上がるのと同時に走り出し、グランの背後へと周り込んでカ一杯に剣を振るう。

グランは余りの小回りの効いた動きに着いて行けず、剣は背中を切断し致命傷とも言える一撃を与えられた。

幾ら頑丈だと言っても、何度も切られれば血は相応に流れる。

地面へと流れ落ちた血は、体力を奪い戦闘力を削ぎ落とし、五感すらをも正常に働かせなくなった。

「ハア……ハア……決着の時だ、巨斧のグラン！」

「ガ、ガハハ！人生の中で一番良い戦いだ！最高だ！」

既に意識は朦朧としているはずのグランが、楽しそうに叫ぶ。

そして、バーサーカーと言う力のタイムリミットが直ぐそこまで迫っている事を二人は理解していた。

一撃……一撃を決めた者がこの戦いの勝者となる。

直感的に理解すると、二人は真っ直ぐに距離を詰めて行く。

グランは巨斧を振りかぶり、力一杯に全力を込めて振り下ろす。対するラウナは、すくい上げるようにして剣を両手で振り抜く。互いの矛はぶつかり合い、力技での勝負になる……はずだった。

だが、ラウナは武器同士が接触した瞬間、剣を斜めに戻して巨斧の攻撃を受け流したのだ。

勢いのままに巨斧は地面に突き刺さり、隙だらけのグランの身体に、ラウナの剣が迫り寄せる。

そして……決着の時を迎えた。

剣を防ぐ物は何も無く、グランを一線に切り、決め手の一撃を食らったグランは崩れ落ちるように倒れた。

「ハア……ハア……」

ラウナは肩で息を整え、口からは熱い吐息が吐き出されている。勝った……脳裏にはその言葉が浮かび上がり、全身の力が抜けた。バーサーカーは自然に解かれ、途端に全身の筋肉たちが悲鳴を上げる。

「痛っ！」

激痛が身体を支配し、意識を保つ事さえ辛くなる。

剣すら握れなくなり、痺れた筋肉は動かなず、右手からはスルリと剣が逃げ、カランと地面に落ちた。

明らかに格上と戦ったラウナの身体は限界で、勝った事自体が驚きだった…だが、戦いはまだ終わっていないかった。

地面に影が映り、背後に誰が存在する事を知らせ、ゆっくりとラウナは首を捻り、その姿を確認する。

「まだ…だ…俺様…は…」

そこに居たのは倒したはずのグランだった。

確かに一撃は与え、グランも既に意識など無いに等しい。

だが、勝利に固執するグランの執着心が、動かない身体を動かしたのだ。

血だらけの姿で巨斧を振りかざすグラン…ラウナの身体は動かない。身体中の血の気が引いた気がした。

「勝つんだー！！！」

詰め甘さが招いた事態…ラウナは自分の愚かさを悔やみ、心の中で呟いた。

——済まない…ソウマ。約束は守れそうにない——

ラウナは堅く目を閉じ、人生の終わりを待った。

しかし…

「グランよ。彼女はソウマくんの大切な方だ。殺させはしないよ」

人生の終わり所か、痛みも衝撃も来る事は無かった。

ラウナがゆっくりと目を開くと、黒い鎌が巨斧を防ぎ、その持ち主

は…カインだった。

カインが鎌を回転させると巨斧は真つ二つに切れ、更に黒い鎌はグランの身体を切り捨てた。

闇の魔法を使う魔族ダキュラ…その強さを目の当たりにした瞬間だった。

生きた…そう理解した瞬間、ラウナは意識を手放し、身体はドサツと倒れる。

酷使し過ぎて一気に溜まった披露と痛み…それらに生き残ったと言う安心感が加わり、ラウナは眠ってしまったのだ。

それを見たカインは溜め息を吐いた後に、ラウナを担ぎ上げ、ダール砦へと歩き出す。

「戦場で安心してしまつとはね…」

軍人なら有り得ない…だが、ラウナはまだ十九歳。

身体は大人でも、精神は大人になりきれていない…しょうがないのだ。

そんなラウナを見て、彼女と居た更に幼い少年であるソウマを思い出す。

彼は生き残っているだろうか…いや、生きているだろう。

出会った時に感じた異常なまでの魔力、年齢に似つかわしくない冷静さ、全ての者を圧倒させる眼光…

あれほどの人間が、こんな所で死ぬはずがない。

彼はいずれ、世界に大きな変革を齎すであろうほどの人物だ。

「見せてもらつよ…キミの力をね」

カインは土埃で濁った空に向かって、この戦場のどこかにいるソウマへ言葉を贈った。

冒険22―居合いの一線（前書き）

4万アクセス突破！

皆さん、ありがとうございます。

冒険22―居合いの一線

戦場に金属同士がぶつかり合う甲高い音が幾度となく響く。

そんな中、ソウマとシアーも剣を交えていた。

シアーは長剣を真上から一直線に振り下ろすが、それをソウマは右に持つ刀で防ぎ左の刀で首を狙う。

そのスピードは速く、シアーは咄嗟に仰け反る事で交わしたが、同時に繰り出していたソウマの蹴りには反応出来なかった。

ミドルキックは横腹にヒットし、シアーの身体が一メートルほど吹き飛ぶ。

上半身から倒れ込み、直ぐさま受け身を取りながら体勢を整える。

「…ハア…アナタ、何者なの…？」

「アンタに教える必要はない」

シアーはこれまでに無いくらい焦っていた。

世間では『鮮血のシアー』と呼ばれるほどの実力者で、敵の血を見る事はあっても自分の血を見る事は無かった。

しかし、目の前にいる二刀流の少年は息すら乱しておらず、こちらが追い詰められている。

常に相手より優位に立って戦って来たシアーには、劣勢など初めての経験だった。

それとは逆に、ソウマはこれまで無いほどに身体の調子の良さを感じていた。

理由は簡単、背の魔法陣がソウマに馴染んで来ているのだ。

ソウマ自身、魔法陣から流れる魔力が身体に染み渡るのを感覚として捉えている。

神龍から授かった力が、やっと自分の力になって来たのだ。

「遊んでいる暇はない…みたいね」

長期戦に持ち込んで勝ちは無い、シアは直感的にそれを理解すると、一気に勝負を決するために剣を鞘に納めた。

―居合い―

剣や刀を扱う者にとって、最もシンプルな剣技だ。

だが、最も実力が勝敗を左右する技でもある。

剣技の全てが集約された技こそが居合いなのだ。

先ほどとは雰囲気の変ったシアに対し、ソウマは左手に持つ刀を地面に突き刺し、残った刀を鞘に収める。

鞘を腰の左側に付け、右手を柄に軽くかけた。

鐔を軽く親指で押し、刀身を少しだけ見せる事でいつでも抜けるようにする。

「……アンタは、戦いに理由があるか？」

「いきなり何？今更ながら私とお話でもしたいの？」

シアは嫌らしい笑みでソウマに軽口をたたく。

だが、質問をしたソウマの表情は真剣そのもの。

戦いに理由があるか…この言葉には多くの意味が含まれている。

戦いに理由など要らないと言う者もいるが、それは間違いだ。

理由の無い戦いは意味の無い戦いと同義で、何の生産性の無い戦い

になる。

そして、理由のある戦いが出来る者は誇り高い戦士となって行く。ソウマは目の前に立つ敵の、戦いの意味を知りたかった。

「良いから答えろ」

「せっかちなね…早い人は嫌われるわよ？」

焦らすようにシーアは答えを引き伸ばす。

静かに…ただ静かに刀へと魔力を蓄積させながら、ソウマはシーアを睨む。

「もう…分かったわ。……理由なんて無いわ。必要ないもの」
「…そうか。——決着をつけよう」

最早、二人の間に交わす言葉は無かった。

そして…二人は同時に柄を握り、同時に鞘から抜刀する。

その速度は一般のレベルを遥かに超えていた。

——蒼閃流・天照——

全てを両断する剣撃同士がぶつかり合い、両者を中心に巻き起こる風。

決着は一瞬だった。

二人が交差し、すれ違って数秒…シーアの左胸から右腰までを一線し、そこから鮮血が吹き出す。

「そん…な…」

シーアの身体は崩れ落ちるように地面にドサリと倒れた。

抜いた刀を握り締めながらソウマはシーアを超えて歩を進める。そして、すれ違い際に命消え行くシーアに言った。

「こつちも色々と背負っているんだよ。悪いな」

言い残してソウマは戦乱の中へと姿を消した。

向かう場所の一つ…三人目の『異界者』のもとへ――

――TO BE CONTINUED――

夜明けと共に始まったダーラル国とデルーチ帝国の戦争、既に日は落ち始めて空は茜色へと染まっている。

だが、幾度となく繰り返される戦いで巻き起こされた土埃のせいで濁って見えてしまう。

ソウマの周りには敵軍はもういない。

背後ではまだ戦いが繰り広げられ、そこを突破して来たのだ。

多少だが静かになった戦場をゆっくりと進んでいると、ソウマの目の前に一人の男が現れた。

「……アンタが『カイト』か？」

「ああ。初めましてだな、神速のソウマ」

鋭い目つきに筋肉質な身体、黒く短い髪をツンツンに立たせている。見た目から血の気が多そうで、明らかに好戦的だと言うのが分かる。どうやら神速を使う事は筒抜けのようだ。

やはり、何らかの形でアヤセと関わっている可能性が高い。

「なぜ俺の事を？」

「なんだ、お前知らないのか？異界者六人のうち四人は既にグルなんだぜ」

ニヤリと余裕の笑みを浮かべるカイト。

六人中四人がグル…その言葉にソウマは驚愕していた。

既にほとんどの異界者が接触し、加えて手を組んでるなど予想だに
しなかった事だ。

異界者は一人で一国に立ち向かえる力を有している。

そんな危険人物が四人も集まっているなど…一体何を考えているん
だ？

「その中にアヤセも？」

「ああ。アヤセの情報でお前の事は筒抜けだ」

四人の中にアヤセが入っている。

つまり、まだ不明の一人を覗いてはソウマを知っていて、恐らく戦
い方すらも把握されているだろう。

アヤセを始末するにも、助けるにしても…他の異界者と戦う事にな
る可能性が高いと言う事だ。

現に、今この時にこうして異界者同士が敵として相對している。

戦いを避ける事は出来ないだろう。

「……………なるほどな。なら——」

ソウマはゆっくりと矛先をカイトに向ける。

殺氣の籠もった視線と緊迫した空氣、これ以上の会話は無いと言う
表れだった。

「お前にアヤセの居場所を吐いてもらう」

「ククク、おもしれえ…やってみやがれ！」

カイトの身体を赤い炎が包み込む。

自分と似てる魔力を感じ、ソウマは握る刀を構えた。

ここからは人間の戦いではない…「龍の喧嘩」の始まりだった。

ソウマは強く地面を蹴り、敵の懷まで入り込む。
普通ならいきなり敵に接近するのは危険だが、相手は自分の手の内を知っている。

それなら小細工などせずに真っ向から挑んだ方が効果的だ。
両手に握る日本刀『天地』を横腹に尻払うようにして振るう。
だが、カイトの腕がその間に入り込み、ガキインという金属音が響く。

「ガントレット……手甲か」

自分の剣を防いだそれを見てソウマは呟く。

カイトの手には手甲が付いており、肘辺りまで覆われている。
剣士からすると、手甲という物は戦いづらい。

手甲は攻撃と防御の両方を同時に行う事が出来る。

逆に言うとな劍は出来ない。

リーチはあるが、隙の無い手甲は攻め難く守りづらいのだ。

「ソウマ……だっけか？お前、俺たちと組まないか？」

ひとまず距離を空けた時、カイトからそう提案する。

組まないか、そう聞かれた所でソウマには答えようがない。
なぜなら……

「その前に、アンタらの目的が知りたい」

異界者を集めて手を組む理由を教えて貰っていないからだ。異界者の六人はそれぞれ龍の力を受け継ぎ、一騎当千の力を持っている。

そんな者たちを集めて企む事など、相当に大きい事だろう。ならば、それを聞かずに首を縦に振る事は出来ない。

暫しの沈黙の後、カイトはニヤリと嫌らしい笑みを浮かべた。

「俺たち異界者の目的は、元の世界に戻る事にある。だが…それには黒龍の力が必要だ」

「黒龍？」

「そうだ。そして、元の世界に戻るために黒龍は一つだけ条件を出した……それは、異空の巫女を殺すこと」

ソウマは訳が分からないと言ったように眉間に皺を寄せる。それを読みとってかカイトは話を続けた。

異空の巫女は自分たちを日本に返すのに邪魔な存在。生かしておけば元の世界には帰れない。

巫女さえ消えれば黒龍の力で日本に帰れる。

だが、ここで問題があった。

巫女は世界のピンチにしか現れない。

だから、この世界に歪みを作り巫女を炙り出す。それが目的だ。

カイトはそう告げた。

「その…巫女とやらは普通には会えないのか？」

未だ分らないと言ったように険しい表情でソウマが問う。

なぜ巫女が世界のピンチにしか現れないのか…それが本当だとして、世界を混乱に導いて良いのか。

確かに元の世界には帰りたい、それは皆同じのようだ。

だが、だからと言って何でもやって良い訳ではない。

「会えないな。巫女は『最果ての地』にいて、そこは人間が入れる場所じゃねえ。黒龍曰わく…な」
「なるほど」

ソウマは理解したと頷き、剣を振り上げて魔力を込める。
そして…振り抜くと同時に魔力を解き放つ。

銀色に飾られた剣撃がカイトを襲い、接触する瞬間。

突然に現れた赤色の炎がカイトを守り、剣撃を瞬く間に燃やし尽くした。

「残念だが…アンタらと手を組む訳には行かないな。アンタたちが言ってるのはワガママだ…それに、俺にはやる事がある」

鋭い視線を送るソウマが言う。

異空の巫女だとか最果ての地だとか、本当の所は未だに理解出来ない。

けれど、手を組んだ異界者四人が世界に混乱を齎すのなら、許される事ではない。

そうしなければ…元の世界に帰る事が出来ないとしても、だ。

カイトは態とらしく軽い溜め息を吐いて、ファイティングポーズをとる。

「残念だ…お前は良い戦力になると思ったがな」

お互いに探り合いは無し。

ソウマは素早く刀を鞘に仕舞い魔力を注ぐ、それを肘から腕、腰の回転を利用して勢い良く鞘から引き抜く。

居合いから放たれた剣撃は先ほどより格段に強く、それは鋼鉄をも簡単に切り裂く威力。——天照。

剣撃は土を抉り、カイトを巻き込んで地面へと一直線の亀裂を作る。轟音と共にカイトの身体が剣撃に消えた——

——TO BE CONTINUED——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3414j/>

MY：FANTASY

2010年10月16日00時35分発行